福岡市埋蔵文化財調査報告第751集

福 岡 外 環 状 道 路 関 係
埋蔵文化財調査報告

— 17 —

— 福岡市南区所在曰佐遺跡群第３次調査 —

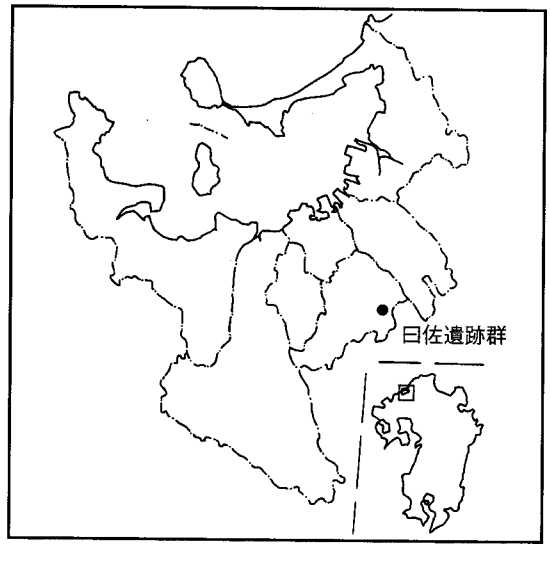
２００３
福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告第751集

福 岡 外 環 状 道 路 関 係
埋蔵文化財調査報告

— 17 —

— 福岡市南区所在曰佐遺跡群第３次調査 —



遺 跡 名	曰佐遺跡群
遺跡番号	ＯＳＳ－３
調査番号	００１１

２００３
福岡市教育委員会

第II調査区より東方を望む

序

福岡外環状道路は、福岡市姪浜から粕屋郡粕屋町戸原に至る総延長26.4kmの都市計画道路です。本道路は、福岡市西南部の交通対策の鍵を握る幹線道路で、早急な供用が望まれており、現在、姪浜と野芥間、月隈と志免町間など一部の供用が開始されております。

今回報告する曰佐遺跡群は、福岡外環状道路の月隈と野多目間に所在し、道路建設工事に先だって発掘調査を実施いたしました。

今回の調査では、縄文時代後期から晩期にわたる遺物包含層・古墳時代の溝・中世前期の建物や井戸からなる集落が発見され、多大な成果を得ることができました。

最後になりましたが、発掘調査に際し、国土交通省福岡国道工事事務所の関係者及び地元の方々を始め発掘調査から整理・報告まで多くのみなさまのご理解とご協力を得ました。ここに感謝の意を表するとともに、本書が文化財理解の一助となり、広く活用されることを願っております。

平成15年2月28日

福岡市教育委員会
教育長　生田　征生

例　言

1．本書は、福岡外環状道路の国土交通省施工区間に当たる第Ｉ工区の道路建設に伴う事前調査として、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が2000年5月15日から同年11月15日にかけて発掘調査を実施した曰佐遺跡群第３次調査の報告書である。
2．遺構の呼称は、堀立柱建物をＳＢ、溝をＳＤ、土壙をＳＫ、柱穴をＳＰ、炉跡をＳＸとする。
3．本書使用の遺構実測図は、横山邦継・阿部泰之・藤祥子が作成した。
4．本書使用の遺物実測図は、土器・石器を阿部が、一部の石器を藤が作成した。
5．今回の調査において出土した陶磁器については、森本朝子氏にご教示を賜った。
6．本書使用の写真は、遺構は横山・阿部が、遺物は阿部が撮影した。
7．本書使用の図面の製図は、阿部が行った。
8．本書使用の方位は、磁北である。
9．本書の執筆・編集は、横山・阿部が行った。
10．本書収録の出土遺物及び調査の記録類は、福岡市埋蔵文化財センターで一括収蔵・保管し、公開していく。

本文目次

第Ⅰ章　はじめに
1．調査に至る経過 …… 1
2．平成13年度の調査体制 …… 3

第Ⅱ章　位置と環境
1．遺跡の立地 …… 4
2．歴史的環境 …… 4
第Ⅲ章　発掘調査の記録
1．調査概要 …… 7
2．第Ⅰ区の調査
調査概要 …… 7
①掘立柱建物 …… 8
②溝 …… 8
③土壙 …… 21
④炉跡 …… 39
⑤柱穴 …… 39
⑥遺構検出面出土の遺物 …… 39
⑦Ⅰ区出土の石製品 …… 42
⑧Ⅰ区出土の縄文土器 …… 45
⑨小結 …… 45
3．第Ⅱ区の調査
調査概要 …… 46
①掘立柱建物 …… 46
②溝 …… 48
③土壙 …… 53
④柱穴 …… 56
⑤遺構検出面出土の遺物 …… 56
⑥小結 …… 59
4．第Ⅲ区の調査
調査概要 …… 61
①溝 …… 61
②土壙 …… 62
③柱穴 …… 69
④遺構検出面出土の遺物 …… 69
⑤小結 …… 70

第Ⅳ章　おわりに …… 71

挿図目次

Fig.1　福岡外環状道路路線図 …… 1
Fig.2　第Ⅰ工区調査遺跡位置図 …… 2
Fig.3　曰佐遺跡群の位置と周辺の遺跡（縮尺1/50,000） …… 5
Fig.4　調査区全体図（縮尺1/1,000） …… 6
Fig.5　Ⅰ区東壁土層断面実測図（縮尺1/100） …… 8
Fig.6　SB05建物検出状況実測図（縮尺1/60） …… 9
Fig.7　SB06建物検出状況実測図（縮尺1/60） …… 10
Fig.8　Ⅰ区全体図（縮尺1/200）
Fig.9　Ⅰ区SD01溝遺物出土状況実測図（縮尺1/30） …… 11
Fig.10　Ⅰ区SD01溝出土土器実測図（縮尺1/3） …… 12
Fig.11　Ⅰ区SD02溝出土土錘実測図（縮尺1/3） …… 12
Fig.12　Ⅰ区SD02溝出土土器実測図（縮尺2/3） …… 13
Fig.13　Ⅰ区SD03溝出土土器実測図（縮尺1/3） …… 13
Fig.14　Ⅰ区SD04溝出土土器実測図（縮尺1/3） …… 13
Fig.15　Ⅰ区SD07溝出土土器実測図（縮尺1/3） …… 14
Fig.16　Ⅰ区SD08溝出土土器実測図（縮尺1/3） …… 15
Fig.17　Ⅰ区SD09溝出土土器実測図（縮尺1/3） …… 15
Fig.18　Ⅰ区SD13溝出土土器実測図（縮尺1/3） …… 16
Fig.19　Ⅰ区SD15溝出土土器実測図（縮尺1/3） …… 17
Fig.20　Ⅰ区SD16溝出土土器実測図（縮尺1/3） …… 18
Fig.21　Ⅰ区SD17溝出土土器実測図（縮尺1/3） …… 19
Fig.22　Ⅰ区SD18・19溝北壁土層断面実測図（縮尺1/30） …… 20
Fig.23　Ⅰ区SD18溝出土土器実測図（縮尺1/3） …… 20
Fig.24　Ⅰ区SD19溝出土土器実測図（縮尺1/3） …… 20
Fig.25　Ⅰ区SK01土壙検出状況実測図（縮尺1/30） …… 21
Fig.26　Ⅰ区SK01土壙出土土器実測図（縮尺1/3） …… 22
Fig.27　Ⅰ区SK01土壙出土鉄製品実測図（縮尺1/3） …… 22
Fig.28　Ⅰ区SK02土壙検出状況実測図（縮尺1/30） …… 23
Fig.29　Ⅰ区SK02土壙南北土層断面実測図（縮尺1/30） …… 24
Fig.30　Ⅰ区SK02土壙出土土器実測図（縮尺1/3） …… 24
Fig.31　Ⅰ区SK03・04・06・07・09・11土壙検出状況実測図（縮尺1/30） …… 25
Fig.32　Ⅰ区SK04土壙出土土器実測図（縮尺1/3） …… 26
Fig.33　Ⅰ区SK11土壙出土土器実測図（縮尺1/3） …… 26
Fig.34　Ⅰ区SK12土壙検出状況実測図（縮尺1/30） …… 26
Fig.35　Ⅰ区SK12土壙出土土器実測図（縮尺1/3） …… 27
Fig.36　Ⅰ区SK13土壙検出状況実測図（縮尺1/30） …… 28
Fig.37　Ⅰ区SK13土壙出土土器実測図（縮尺1/3） …… 28

Fig.38　Ⅰ区SK14土壙検出状況実測図（縮尺1/30）…… 29
Fig.39　Ⅰ区SK14土壙出土土器実測図（縮尺1/3）…… 30
Fig.40　Ⅰ区SK08・09・15土壙検出状況実測図（縮尺1/30）…… 32
Fig.41　Ⅰ区SK16土壙検出状況実測図（縮尺1/30）…… 33
Fig.42　Ⅰ区SK17土壙検出状況実測図（縮尺1/30）…… 34
Fig.43　Ⅰ区SK17土壙出土鉄製品実測図（縮尺1/3）…… 34
Fig.44　Ⅰ区SK17土壙出土土器実測図（縮尺1/3）…… 35
Fig.45　Ⅰ区SK18土壙検出状況実測図（縮尺1/30）…… 36
Fig.46　Ⅰ区SK18土壙出土土器実測図（縮尺1/3）…… 36
Fig.47　Ⅰ区SK19土壙検出状況実測図（縮尺1/30）…… 37
Fig.48　Ⅰ区SK19土壙出土土器実測図（縮尺1/3）…… 38
Fig.49　Ⅰ区SK20土壙検出状況実測図（縮尺1/30）…… 38
Fig.50　Ⅰ区SK20土壙出土土器実測図（縮尺1/3）…… 39
Fig.51　Ⅰ区SK21・22・23・24・25・26・27土壙検出状況実測図（縮尺1/30）…… 40
Fig.52　Ⅰ区SK23土壙出土土器実測図（縮尺1/3）…… 41
Fig.53　Ⅰ区SX01炉跡検出状況実測図（縮尺1/30）…… 41
Fig.54　Ⅰ区出土玉類実測図（縮尺1/1）…… 42
Fig.55　Ⅰ区SP柱穴出土土器実測図（縮尺1/3）…… 42
Fig.56　Ⅰ区出土石製品実測図①（縮尺2/3）…… 42
Fig.57　Ⅰ区遺構検出面出土遺物実測図（縮尺1/3）…… 42
Fig.58　Ⅰ区出土石製品実測図②（縮尺1/3）…… 43
Fig.59　Ⅰ区グリッド調査状況実測図（縮尺1/100）…… 44
Fig.60　Ⅰ区出土縄文土器・打製石器実測図（縮尺1/5・2/3・1/1）…… 45
Fig.61　Ⅱ区SB01建物検出状況実測図（縮尺1/30）…… 46
Fig.62　Ⅱ区全体図（縮尺1/250）…… 47
Fig.63　Ⅱ区SB02建物検出状況実測図（縮尺1/60）…… 48
Fig.64　Ⅱ区SB建物出土土器実測図（縮尺1/3）…… 48
Fig.65　Ⅱ区SB03建物検出状況実測図（縮尺1/80）…… 49
Fig.66　Ⅱ区SB04建物検出状況実測図（縮尺1/60）…… 50
Fig.67　Ⅱ区SD20溝出土陶磁器実測図（縮尺1/3）…… 51
Fig.68　Ⅱ区SD20溝出土土師器実測図（縮尺1/3）…… 51
Fig.69　Ⅱ区SD20溝出土瓦類実測図（縮尺1/3）…… 52
Fig.70　Ⅱ区SD21溝出土陶磁器実測図（縮尺1/3）…… 52
Fig.71　Ⅱ区SD21溝出土土師器・土製品実測図（縮尺1/3）…… 53
Fig.72　Ⅱ区SD21溝出土瓦類実測図（縮尺1/3）…… 53
Fig.73　Ⅱ区検出SK28～32土壙実測図（縮尺1/30）…… 54
Fig.74　Ⅱ区SK28・29・31・32土壙出土土器実測図（縮尺1/3）…… 55
Fig.75　Ⅱ区SD20・21溝、SK32土壙出土鉄製品実測図（縮尺1/3）…… 55
Fig.76　Ⅱ区SP柱穴出土土器実測図（縮尺1/3）…… 56
Fig.77　Ⅱ区遺構検出面出土土器実測図（縮尺1/3）…… 57

Fig.78　Ⅱ区出土石製品類実測図（縮尺1/3）…… 57
Fig.79　Ⅱ区出土打製石器類実測図（縮尺2/3）…… 58
Fig.80　Ⅱ区出土縄文土器実測図（縮尺1/3）…… 58
Fig.81　Ⅱ区グリッド調査状況実測図（縮尺1/100）…… 60
Fig.82　Ⅲ区全体図（縮尺1/200）…… 61
Fig.83　Ⅲ区SD溝出土遺物実測図（縮尺1/3）…… 62
Fig.84　Ⅲ区SD溝出土鉄製品実測図（縮尺1/3）…… 62
Fig.85　Ⅲ区SK40・41・42・43・44土壙検出状況実測図（縮尺1/30）…… 63
Fig.86　Ⅲ区SK40～43・45・47・49・51～53・56土壙出土土器実測図（縮尺1/3）…… 64
Fig.87　Ⅲ区SK45・49・50・51・52・53土壙検出状況実測図（縮尺1/30）…… 66
Fig.88　Ⅲ区SK47土壙検出状況実測図（縮尺1/30）…… 67
Fig.89　Ⅲ区SK54・55・56・57土壙検出状況実測図（縮尺1/30）…… 68
Fig.90　Ⅲ区SP柱穴出土土器実測図（縮尺1/3）…… 69
Fig.91　Ⅲ区出土打製石器実測図（縮尺2/3）…… 69
Fig.92　Ⅲ区遺構検出面等出土遺物実測図（縮尺1/3）…… 70
Fig.93　日佐遺跡群第3次調査遺構変遷図①…… 72
Fig.94　日佐遺跡群第3次調査遺構変遷図②…… 73
Fig.95　日佐遺跡群第3次調査遺構変遷図③…… 75

図版目次

PL.1　1　第Ⅰ区調査区全景（東から）・2　Ⅰ区SK01土壙出土状況（東から）・3　Ⅰ区SK02検出状況（西から）
PL.2　1　Ⅰ区SK04土壙出土状況（南から）・2　Ⅰ区SK07土壙出土状況（東から）・3　Ⅰ区SK12土壙出土状況（西から）・4　Ⅰ区SK14土壙出土状況（東から）・5　Ⅰ区SK17土壙出土状況（東から）・6　Ⅰ区SK17遺物出土状況・7　Ⅰ区SK18土壙出土状況（東から）・8　Ⅰ区SK20土壙出土状況（東から）
PL.3　1　Ⅰ区SK21土壙出土状況（東から）・2　Ⅰ区SK23土壙出土状況（西から）・3　Ⅰ区SK24土壙出土状況（西から）・4　Ⅰ区SK25土壙出土状況（西から）・5　Ⅰ区SK26土壙出土状況（東から）・6　Ⅰ区SK27土壙出土状況（西から）・7　Ⅰ区SD01溝遺物出土状況（西から）・8　Ⅰ区SD04溝遺物出土状況
PL.4　1　Ⅰ区調査区東部遺構全景（南から）・2　Ⅰ区南東側炉跡出土状況（西から）・3　Ⅰ区第1縄文調査グリッド（南から）・4　Ⅰ区第2縄文調査グリッド（北から）・5　Ⅰ区第4縄文調査グリッド（北から）
PL.5　1　第Ⅱ区北半部遺構出土状況全景（東から）・2　第Ⅱ区南半部遺構出土状況全景（東から）
PL.6　1　Ⅱ区北半部遺構出土状況全景（東から）・2　Ⅱ区南半部遺構出土状況全景（南から）・3　Ⅱ区SB03建物出土状況（西から）・4　Ⅱ区SB04建物出土状況（西から）・5　Ⅱ区SK28土壙土師器出土状況・6　Ⅱ区SK29土壙土師器出土状況
PL.7　1　Ⅱ区SK32土壙瓦器・土師器出土状況（北から）・2　Ⅱ区SK31土壙遺物出土状況（西から）・3　Ⅲ区SK40土壙遺物出土状況（西から）・4　Ⅲ区SK52土壙出土状況（西から）・5　Ⅲ区SK55土壙出土状況（北から）・6　Ⅱ区SD20溝内礫群出土状況①（南から）・7　Ⅱ区SD20溝内礫群出土状況②（南から）・8　Ⅱ区縄文グリッド（北から）
PL.8　1　第Ⅲ区全景（南から）・2　Ⅲ区SK41土壙出土状況（南から）・3　Ⅲ区SK42土壙出土状況（北から）・4　Ⅲ区SK47土壙出土状況（南から）・5　Ⅲ区SD30溝内礫群出土状況（東から）
PL.9　出土土器・陶磁器
PL.10　出土土器・瓦・石製品類

第１章　はじめに

１．調査に至る経過

福岡外環状道路は、昭和44年に都市計画決定された延長26.4kmの都市計画道路で、西区姪浜から粕屋郡粕屋町戸原に至る。国土交通省施工の福重・月隈間の16.2kmの区間は、一般国道202号福岡外環状道路と呼称される。

平成元年から3年にかけ、国土交通省福岡国道事務所より福岡外環状道路路線内の埋蔵文化財の調査願いが埋蔵文化財課に提出された。これを受ける形で、同課は、第Ⅰ工区の立花寺から第Ⅳ工区の野芥・福重間にて遺跡の有無及び遺構の遺存状態確認のため、用地内において平成２年より断続的に試掘調査を実施した。

本書所収の曰佐１丁目地内の曰佐遺跡群は、埋蔵文化財課が平成10年6月に試掘調査を実施した。その結果、中世の柱穴・溝等が検出され、記録保存のための発掘調査が必要であると決定された。

発掘調査は、福岡国道事務所・福岡市土木局外環状道路推進部・埋蔵文化財課の3者で、発掘調査願・契約などで協議を重ね、工事工程にあわせたかたちで実施した。曰佐工区における要調査地は、曰佐遺跡群第３次調査として本調査を実施した。なお、平成12年度には、曰佐遺跡群の他、野多目遺跡・寺島遺跡・笠抜遺跡・梅林古墳群の調査が行われている。

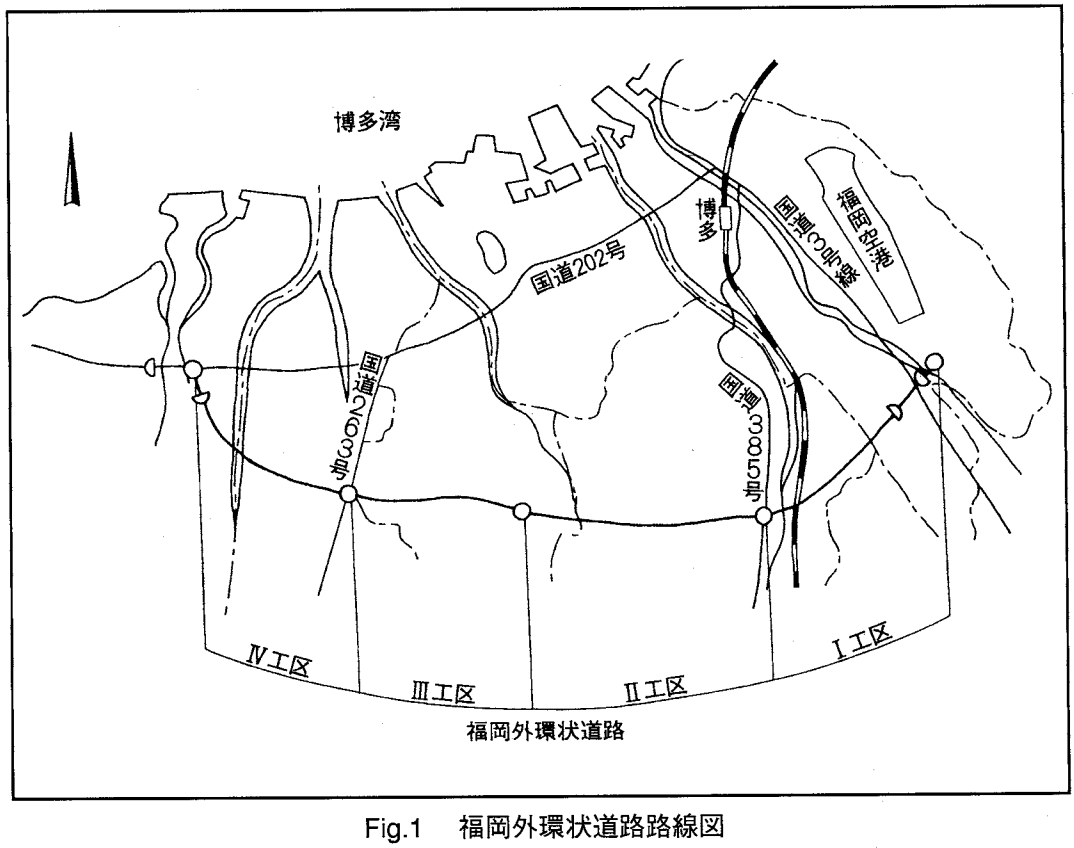


Fig.1　福岡外環状道路路線図

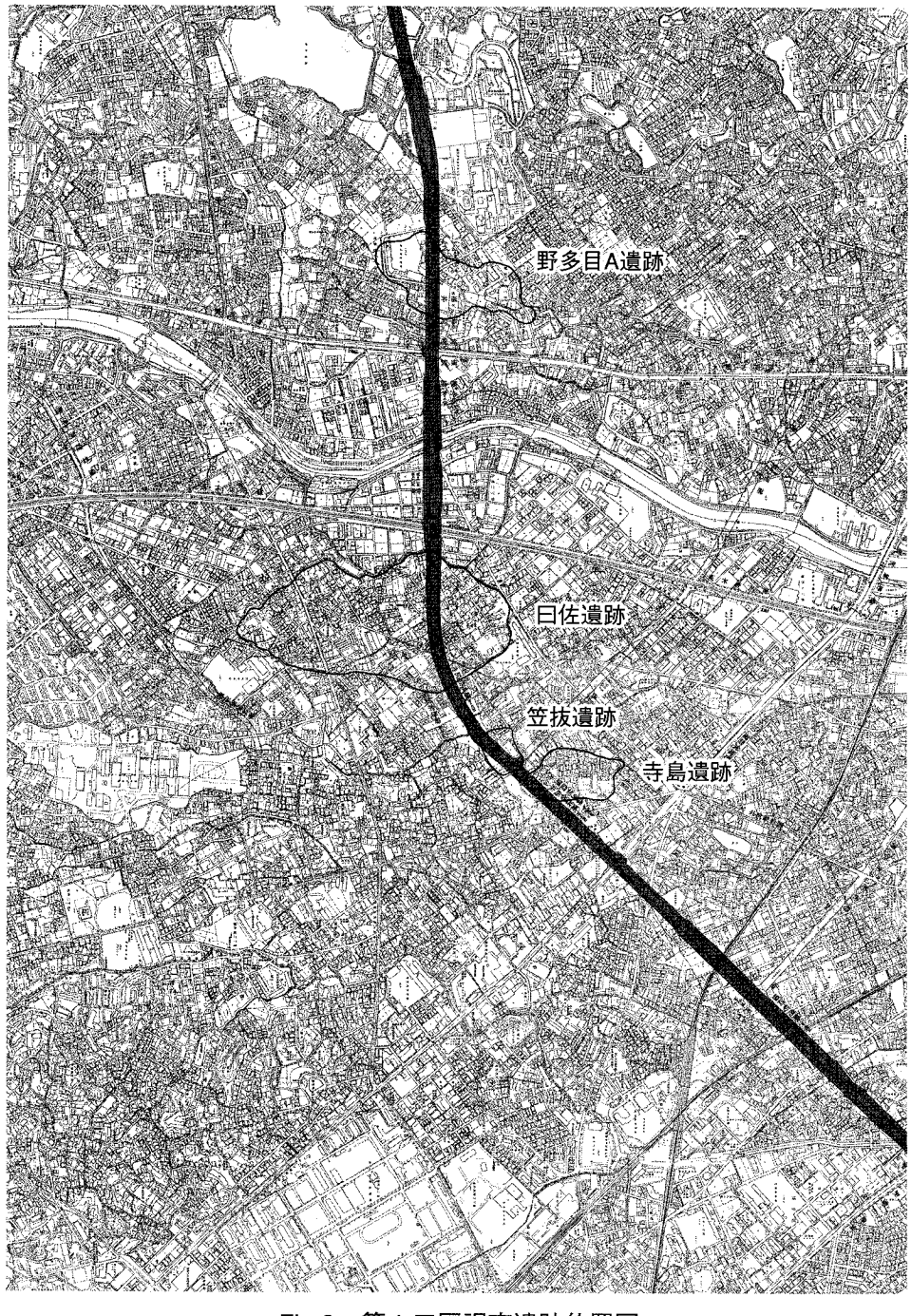


Fig.2　第Ⅰ工区調査遺跡位置図

2．平成12年度の調査体制

調査体制としては、国土交通省福岡国道事務所をはじめとする関係者各位の協力の下、本調査・整理作業・報告書作成は順調に推移した。記して感謝の意を表するものである。

調査主体　福岡市教育委員会埋蔵文化財課
教育長　生田征生
文化財部長　堺徹　柳田純孝（前任）
埋蔵文化財課長　山崎純男
調査担当　横山邦継　阿部泰之
試掘調査担当　宮井善朗
庶務担当　川村浩旭　宮川英彦（前任）
調査員　藤祥子
調査作業員　小柳和子　網田美代野　平田政子　森山早苗　倉光京子　井上紀代子　倉光アヤ子　和田裕見子　鍋山千鶴子　結城千賀子　細川虎男　吉鹿裕隆　大原政幸　渕上俊克　鳥井原良治　徳永洋二郎　平山栄一郎　木田ひろこ　原　義晴　青木史彦　有江笑子　斉藤博文　結城フヂ子　結城差世　西川吾郎

調査作業関係者の皆さん

第Ⅱ章　位置と環境

1．遺跡の立地

曰佐遺跡群は、福岡平野南部、南北に貫流する那珂川の中流域右岸、標高約60～10mを測る沖積微高地上に位置し、那珂川の中位段丘にあたる。遺跡は、五十川川を西限とし、東には、「奴国」の中心地と考えられる須玖遺跡群が位置する春日丘陵が広がる。この台地内には、小規模な谷が複雑に入り込んでおり、いわゆる「ヤツデ」状の景観をなしている。その丘陵から延びる台地の先端に、寺島遺跡・笠抜遺跡が立地している。

2．歴史的環境

「曰佐」の地名は、青柳種信の『筑前国続風土記拾遺』に、下曰佐村・上曰佐村として、住吉社の所在する村としてあらわれる。また、主に通訳（オサ）の人々が周辺に集住したところから「曰佐」の地名が起こったとする話を、調査地周辺の住民から聞くことができた。

まず、曰佐遺跡群内における既往の調査について簡単に触れておく。第１次調査では、中世初期の掘立柱建物・溝・土壙が検出されている。溝は、東西及び南北方向に掘削され、掘立柱建物が南北溝に沿って建てられている。土壙墓も検出されており、墓域を屋敷地内に含んだ農村集落の可能性が指摘されている。遺構面の黄褐色シルトからは、縄文後期の西平式系土器・土錘・黒曜石製削器、終末期の突帯文土器・石鏃・石斧・石製穂摘具、その他、前期・中期の土器が出土している。第２次調査では、中世前期の掘立柱建物・柵列・東西方向の区画溝・土壙群が検出されており、土壙のうち１基は、現地火葬墓の可能性が指摘されている。また、下層を掘り下げ、縄文土器を包含する氾濫河川流路を２本検出している。

次に、周辺の遺跡について概要を述べる。著名なものに曰佐原遺跡が挙げられる。曰佐原遺跡は、曰佐遺跡群の南、春日市との境界にあり、現在の福岡市遺跡分布地図では、弥永原遺跡に包含されているが、箱式石棺墓・甕棺墓などの埋葬遺構が50基以上出土したとされ、そのうちの一基から長宜子孫内行花文鏡が出土している。弥永原遺跡は、曰佐遺跡群の南に位置する集落遺跡で、現在まで5次にわたる調査が行われている。弥生後期から古墳時代にかけての遺構が検出されており、弥生後期の「環溝」が検出され、ガラス勾玉の鋳型が出土していることが特筆される。時期・規模等を考えあわせると、曰佐原遺跡は、この集落に対応する墓域であったと考えられる。曰佐遺跡群の南には、警弥郷遺跡群が立地する。本遺跡は、曰佐遺跡群同様、那珂川の中流域に広がる沖積地に立地し、弥永原遺跡の東に所在する。1970年に古式土師器・滑石製模造鏡が採集されており、現在に至るまで４回の調査が行われている。第２次調査では中世後期の水田、その下層から、弥生前期末に相当する水田跡が検出され、板付Ⅱ式・城の越・須玖式土器が出土している。第３次調査では、竪穴住居・掘立柱建物・溝等が検出され、弥生後期から古墳中期に至る集落とされた。第４次調査では、中世前期の掘立柱建物２棟・土壙・南北方向の流路が検出されている。遺構検出面の黄褐色シルトからは、縄文晩期の粗製深鉢・磨製石斧が出土しており、様相は、曰佐遺跡群の既往の調査と類似している。中世前期に沖積地に進出した農村集落と考えられる。

1	曰佐遺跡群	11	比恵遺跡群	21	大橋E遺跡	31	老司A遺跡	41	片江B遺跡
2	福岡城跡	12	那珂遺跡群	22	井尻B遺跡	32	老司B遺跡	42	樋井川A遺跡
3	鴻路館跡	13	東那珂遺跡	23	笹原遺跡	33	老司古墳	43	樋井川B遺跡
4	博多遺跡群	14	雀居遺跡	24	横手遺跡群	34	老司瓦窯	44	桧原古墳群
5	吉塚本町遺跡	15	那珂君休遺跡	25	寺島遺跡	35	老松神社古墳群	45	桧原遺跡群
6	堅粕遺跡群	16	諸岡Ａ遺跡	26	野多目A遺跡	36	警弥郷A遺跡群	46	柏原K遺跡
7	吉塚遺跡	17	諸岡B遺跡	27	野多目B遺跡	37	警弥郷B遺跡群	47	板付遺跡
8	駅東生産遺跡	18	井尻Ａ遺跡	28	野多目C遺跡	38	弥永遺跡	48	高畑遺跡
9	榎田遺跡	19	三宅廃寺	29	野多目D遺跡	39	神松寺遺跡	49	笠抜遺跡
10	上牟田遺跡	20	三宅瓦窯	30	卯内尺古墳群	40	片江A遺跡		

Fig.3　曰佐遺跡群の位置と周辺の遺跡（1/50,000）

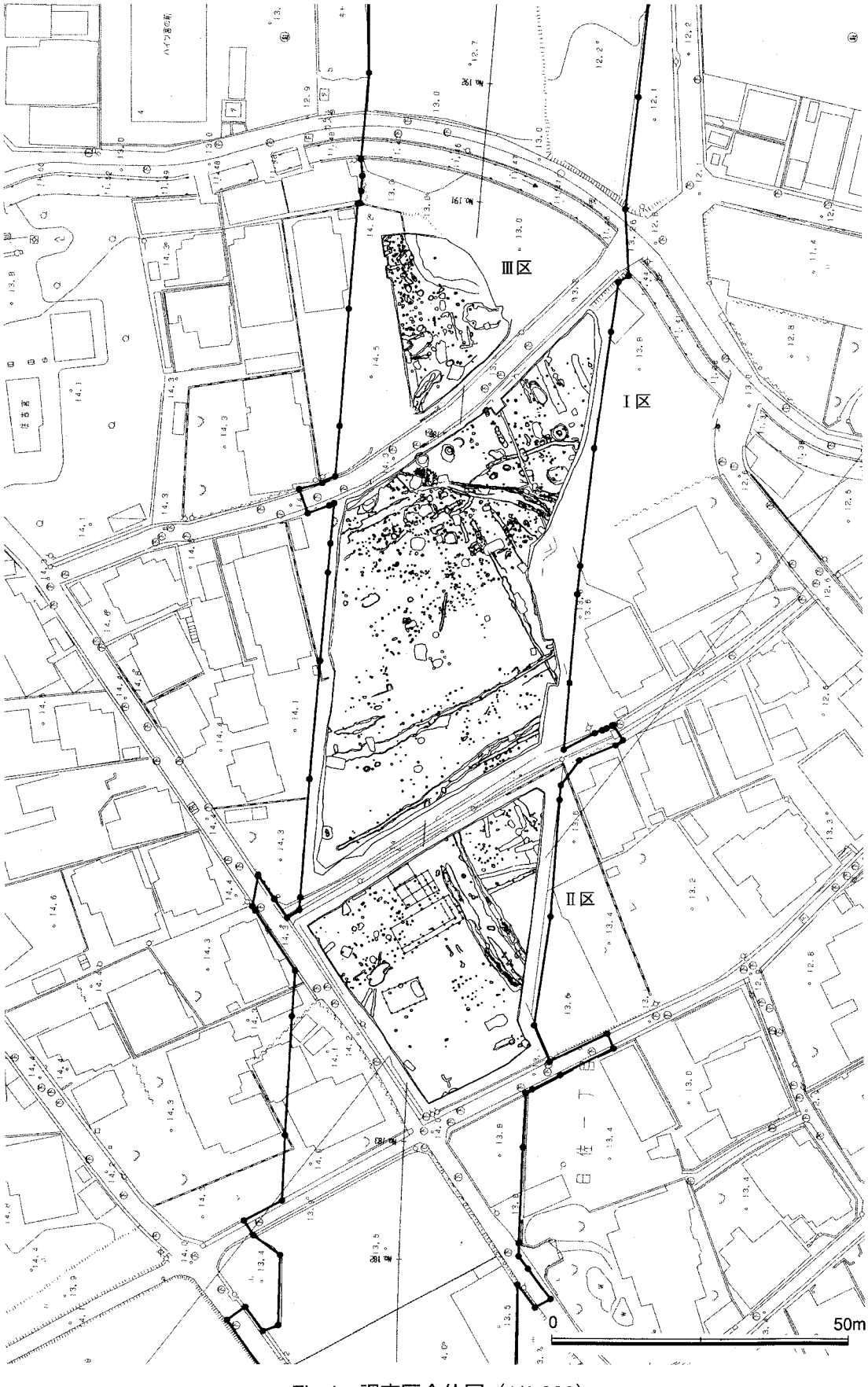


Fig.4　調査区全体図（1/1,000）

第Ⅲ章　発掘調査の記録

1．調査概要

事業名　：　福岡外環状道路第１工区　曰佐
所在地　：　南区曰佐１丁目地内
調査期間：　平成12年５月15日から平成12年11月15日
調査面積：　3997.625㎡

平成10年6月に埋蔵文化財課が試掘調査を行い、側道及び橋脚の建設で遺構の破壊を免れない部分5,000㎡について発掘調査対象地とした。ただ調査開始の時点において住人のある宅地・住人の生活に必要な宅地部分については、調査範囲から除外した。それ以外の調査地のうち、調査当時走っていた生活道路で全体をⅠ区・Ⅱ区・Ⅲ区と区割りしている。本書ではこの区割りごとに調査報告を行う。

第Ⅰ区の調査

掘立柱建物２棟・土壙26基・溝19条・炉跡１基を検出した。調査面積は、2,400㎡を測る。遺構の時期は、中世前半、11～13世紀前半のものが多いが、14世紀末に下る遺構、古墳時代後期にさかのぼる遺構も含まれる。炉跡は、遺物が僅少で根拠が薄いが、縄文後～晩期と思われる。遺構検出面のシルトからは縄文土器・石器が出土した。なお、第Ⅰ区調査時は、遺構面とその直上の包含層の区別が曖昧であったため、包含層の上面で機械掘削を止めた箇所もあり、十分な遺構検出ができたとは言い難い。検出できなかった遺構の存在が予想される。

第Ⅱ区の調査

掘立柱建物４棟・土壙５基・溝２条を検出した。調査面積は、1,213.625㎡を測る。建物は、すべて南北棟でうち３棟は主軸を平行に建てられている。時期的には近接していると思われるが、柱穴埋土に焼土塊が混じるものとそうでないものがあり、火災による焼失、その後の再建の過程が想定されよう。土壙は、遺物の出土状況から墳墓と思われるものが含まれる。遺構検出面のシルトから縄文土器が出土している。第１次調査と同様の様相を示している調査区である。

第Ⅲ区の調査

溝２条・土壙16基・柱穴多数を検出した。調査面積は、384㎡を測る。溝の時期は、中世後半、14世紀末～15世紀代と思われる。土壙は、12世紀前半～13世紀前半頃の所産である。遺物の出土状況から墳墓と思われるものも数基見られる。柱穴は、古墳時代前期の遺物が出土するものがある。遺構検出時に６世紀前半代の須恵器が出土したことからも、Ⅲ区の南側に古墳時代の集落が存在する可能性が指摘される。調査区西側は、五十川川の氾濫原となる。窪み状の落ち込みが１カ所検出され、14世紀代の遺物が出土した。

2．第Ⅰ区の調査

調査概要

掘立柱建物・溝・土壙・炉跡の順で記述する。調査区の層序は、地表面から50cmまで畑の盛り土、その下層60cmが遺物包含層の灰褐色土となる。

①掘立柱建物（Fig.6～8・PL.1）

SB05建物（Fig.6）

SB05は、Ⅰ区の中央部に位置する。柱穴の残存状況から全体に削平を受けていることが考えられる。方位は、N―30°―Wにとり、標高11.8mを測る。２間×２間の総柱建物で、南北方向4.2m・東西方向4.4mを測る。南北方向の柱間は、芯々で1.9から2.4m、東西方向の柱間は、同じく芯々で2.1から2.4mを測る。床面積は、18.48㎡を測る。柱穴の形状は、北側の２基が不正な隅丸長方形を呈する以外は、不正な円形または楕円形を呈する。

遺物は、土師質土器・滑石製石鍋が出土したが、いずれも細片のため図示し得なかった。時期は、11～12世紀代と思われる。

SB06建物（Fig.7）

SB06は、Ⅰ区の中央部に位置する。柱穴の残存状況から全体に削平を受けていることが考えられる。方位は、N―33°―Wにとり、標高11.8mを測る。２間×２間の側柱建物で、柱間の中間に束柱の痕跡が残存している。南北方向5.3m・東西方向4.4mを測る。柱間は、南北で1.0から2.4m、東西で1.6から2.2mを測る。床面積は、23.32㎡を測る。北側から２基目の柱穴で、間仕切りがあった可能性があるが、現場では確認し得なかった。

遺物は、土師質土器・無釉陶器が出土したが、いずれも細片のため図示し得なかった。11～12世紀代。

②溝（Fig.8～24・PL.3）

SD01溝（Fig.8・13）

SD01は、Ⅰ区の西半部に位置する。南北方向に掘削され、若干出入りのある平面プランをなし、断面形は、隅丸台形を呈する。北端部は、調査区壁に接するため明確にし得ないが、東側に屈曲するものと思われる。幅60から70cm・深さ54cm・検出長16.7mを測る。

SD01溝中央部にて須恵器高坏２個体及び土師器椀１個体がまとまって出土した。溝の底部からの出土ではなく、ある程度溝が埋没した時点で一括して投げ込んだ状況が想像できる。溝の廃絶に伴う祭祀的行為であろうか。椀は完形であったが、高坏には完形に復元できる個体はなく、破砕した上で投げ込んだものであろう。

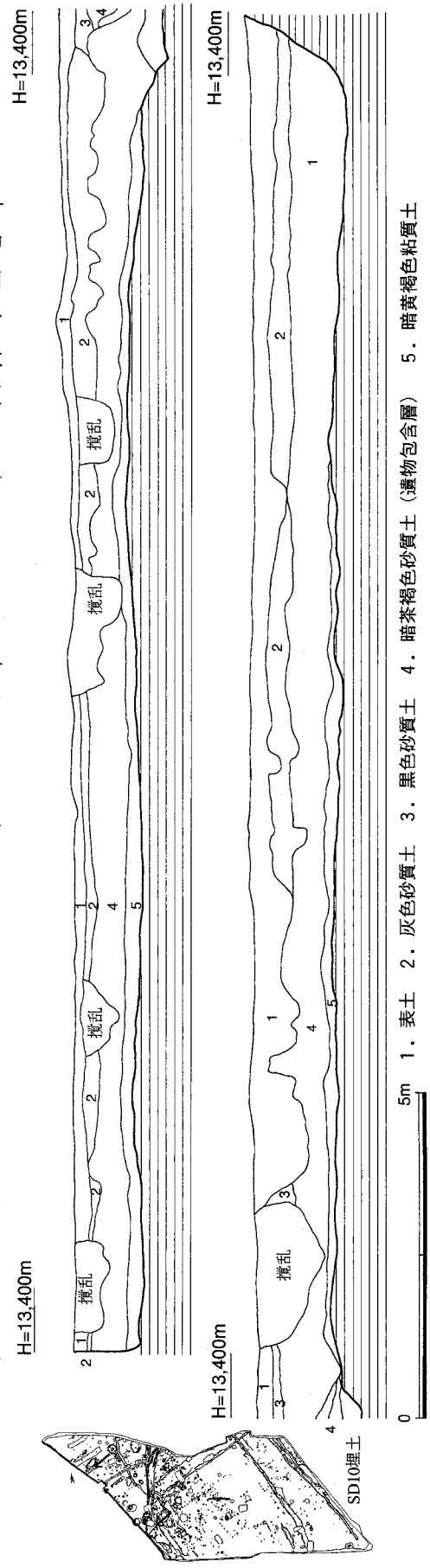


Fig.5　Ⅰ区東壁土層断面実測図（1/100）

SD01溝出土遺物（Fig.10・PL.3･10）

1は、須恵器坏蓋である。全体の1/2個体が残存し、口径は、復元で13.4cm・器高は、4.3cmを測る。外面の上部1/3に右回りの回転ヘラ削りを施す。胎土は精良堅緻で、焼成は良好である。天井部内面に同心円状の当て具痕が残る。2は、須恵器甕の口縁部である。外反する頸部に中央部をくぼませた肥厚部分をもたせ玉縁状となす。胎土は精良堅緻で、焼成は良好である。3は、須恵器甕の口縁部である。端部をほぼ水平に引き出し、その下部に肥厚部分を持たせ口縁部外面はほぼ垂直に作る。口径は、復元で21.8cmを測る。胎土は精良堅緻で、焼成は良好である。4は、須恵器坏である。ここでは、暫定的に蓋とした。天井部から体部の外面にかけ左回りの回転ヘラ削りを施す。天井部内面に平行線状の当て具痕・外面にヘラ記号が3条平行に施される。胎土は精良堅緻で、焼成は良好である。5は、須恵器高坏である。6・10・11とともに出土した。口径11.1cm・器高9.6cm・底径11.1cmを測る。坏部外面にはヘラ削りの痕跡は認められず、1条の突帯を有する高さ5.2cmの脚部を直接貼り付けて成形している。脚部には若干の焼けひずみがみられるが胎土は精良堅緻で、焼成は良好である。坏部内面に同心円状の当て具痕が観察される。6は、須恵器高坏である。口径11.3cm・器高10.3cm・底径11.1cmを測る。杯部外底面に回転ヘラ削りを施し、高さ5cm、1条の沈線を有する脚部を貼り付けている。杯部内面に同心円状の当て具痕がみられる。7は、須恵器坏蓋である。焼成はやや不良で、軟質である。8・9は、須恵器坏身の小片である。9は、復元口径13cm以上を測る。10は、須恵器高坏である。口径12.3cm・器高10.0cm・底径10.9cmを測る。坏部外底面に回転ヘラ削りを施し、高さ5.6cmの脚部を貼り付けている。坏部内底面に同心円状の当て具痕を有する。11は、土師器埦である。口径11.4cm・器高6.0cmを測る。外底面に縦方向の荒いハケ調整を施す。他はナデ調整。内面には1条の稜を持ち、ここから口縁部が外反する。胎土は精良だが砂粒を多く含む。12は、土師器埦である。口縁部の小片で器壁は2ミリ程度と薄く作る。胎土は精良堅緻で、焼成は良好である。13は、土師器壺である。口縁部の小片である。

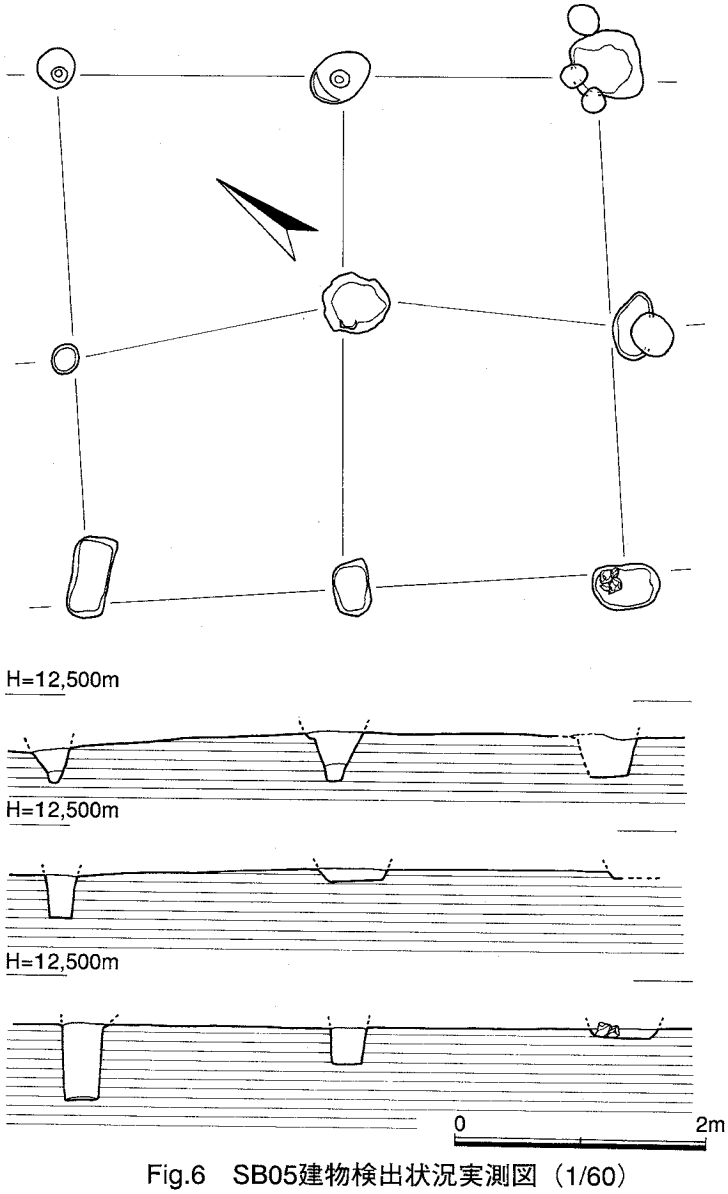


Fig.6　SB05建物検出状況実測図（1/60）

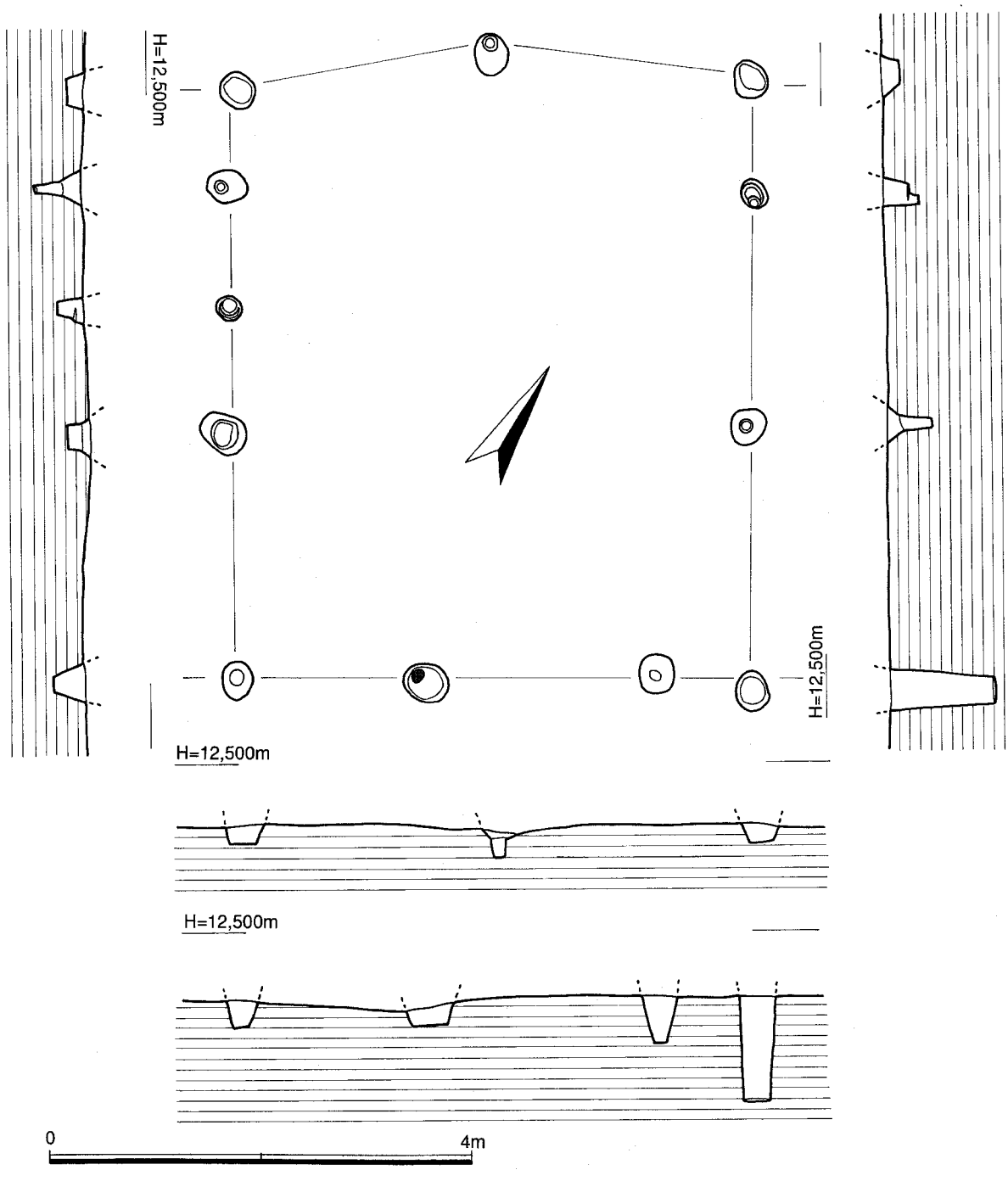


Fig.7　SB06建物検出状況実測図（1/60）

胎土は精良堅緻で、焼成は良好である。14は、土師器埦である。口縁部の小片である。胎土は精良堅緻で、焼成は良好である。15は、土師器甕である。口縁部の小片である。胎土は精良堅緻で、焼成は良好である。16は、土師器の小片である。ここでは暫定的に甑とする。外面に荒い刷毛目を施す。胎土は精良堅緻で、焼成は良好である。17は、土師器甕である。口縁部の小片で、外面に３条を１単位とする荒い刷毛目を施す。18は、布留系の甕である。口縁部の小片で、ほぼ直線的に外反し口縁をまるく肥厚させる。胎土は精良堅緻で、焼成は良好である。19は、土師器のミニチュア土器である。上半部を欠失し底径2.4cmを測る。内外面とも赤褐色を呈し成型時の指押さえ痕が残る。20は、土師器甕である。外面に５条１単位の荒い刷毛目を施す。内面には不定方向のヘラ削りが観察できるほか、１条の稜をもちそこから頸部が外反する。以上の遺物から本遺構は、６世紀末から７世紀初頭頃に埋没したものと思われる。

Fig.8　Ⅰ区全体図（縮尺1/200）

Fig.8　Ⅰ区全体図（縮尺1/200）

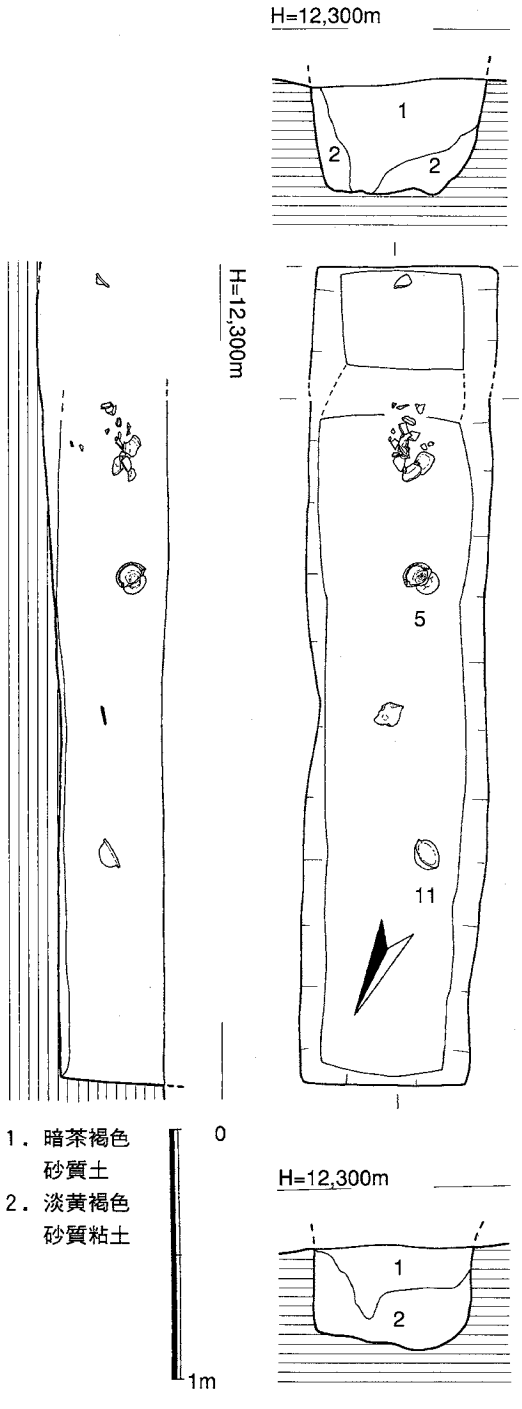


Fig.9　Ⅰ区SD01溝遺物出土状況実測図
(1/30)

SD02溝（Fig.8・PL.1）

SD02は、Ⅰ区の西半部に位置する。南北方向に掘削され、若干出入りのある平面プランをなす。断面形は、隅丸台形を呈する。中ほどやや北よりで方位を若干東にふる。方位は、N―2°―Eにとる。幅40から70cm・深さ10cm・検出長17.4mを測る。南半の底面には植物根の痕跡が多く検出された。その南側には生痕の広がる部分があり、この部分のレベルの方が高いことから、この部分が水溜状の遺構となり、ここから北に水を流すための水路と考えられる。

出土遺物（Fig.11・12）

21は、土錘である。器長7.0cmを測る。土師質で、ナデにより調整される。22・23は、白磁Ⅴ類の碗である。口縁部の小片で、釉調は、透明感ある浅緑色を呈する。23は、口縁部の小片で、口縁部及び外面にはヘラ削りが施される。24は、白磁Ⅳ類の碗である。口縁部の小片で大振りの玉縁を作り出す。釉調は、透明感のない乳白色を呈する。25は、白磁Ⅳ類の碗である。底部の小片で、低い高台を削り出す。釉調は、透明感のない灰緑色を呈する。26は、須恵器坏である。底部の小片で、内底面には同心円状の当て具痕、外底面にはヘラ状の工具で不定方向に磨いたような痕跡が観察される。成形技法の１つであろう。27・28は、須恵器甕である。口縁部の小片である。29は、須恵器瓿である。胴部のみ破片の出土で胴部径は8.2cmを測る。胴部中程に復元直径8ミリの孔を外面より穿孔する。胎土は精良堅緻で、焼成は良好である。30は、須恵器坏である。ここでは暫定的に蓋として扱う。天井部径5.8cmを測り外面には回転ヘラ切りの痕跡、内面には不定方向のナデ調整の痕が観察できる。体部には強い回転ナデにより明瞭な稜が２条作られる。胎土は精良堅緻で、焼成は良好である。31は、須恵器杯身である。1/4個体残存し、口径11.8cm・器高4.1cmを測る。外底面に左回りの回転ヘラ削りを施し、かえりは低く内傾する。11世紀末～12世紀前半。

SD03溝（Fig.8・13）

SD02の東側に隣接する形で検出した。幅40～90cm、深さ25cm、検出長20mを測る。

出土遺物（Fig.13）

34は、土師器の甕である。35は、須恵器の坏蓋である。天井部外面にヘラ記号を有する。

SD04溝（Fig.8・14）

Ⅰ区西半に位置する。SD03に切られる。東西方向に掘削されやや蛇行して掘削されている。幅20

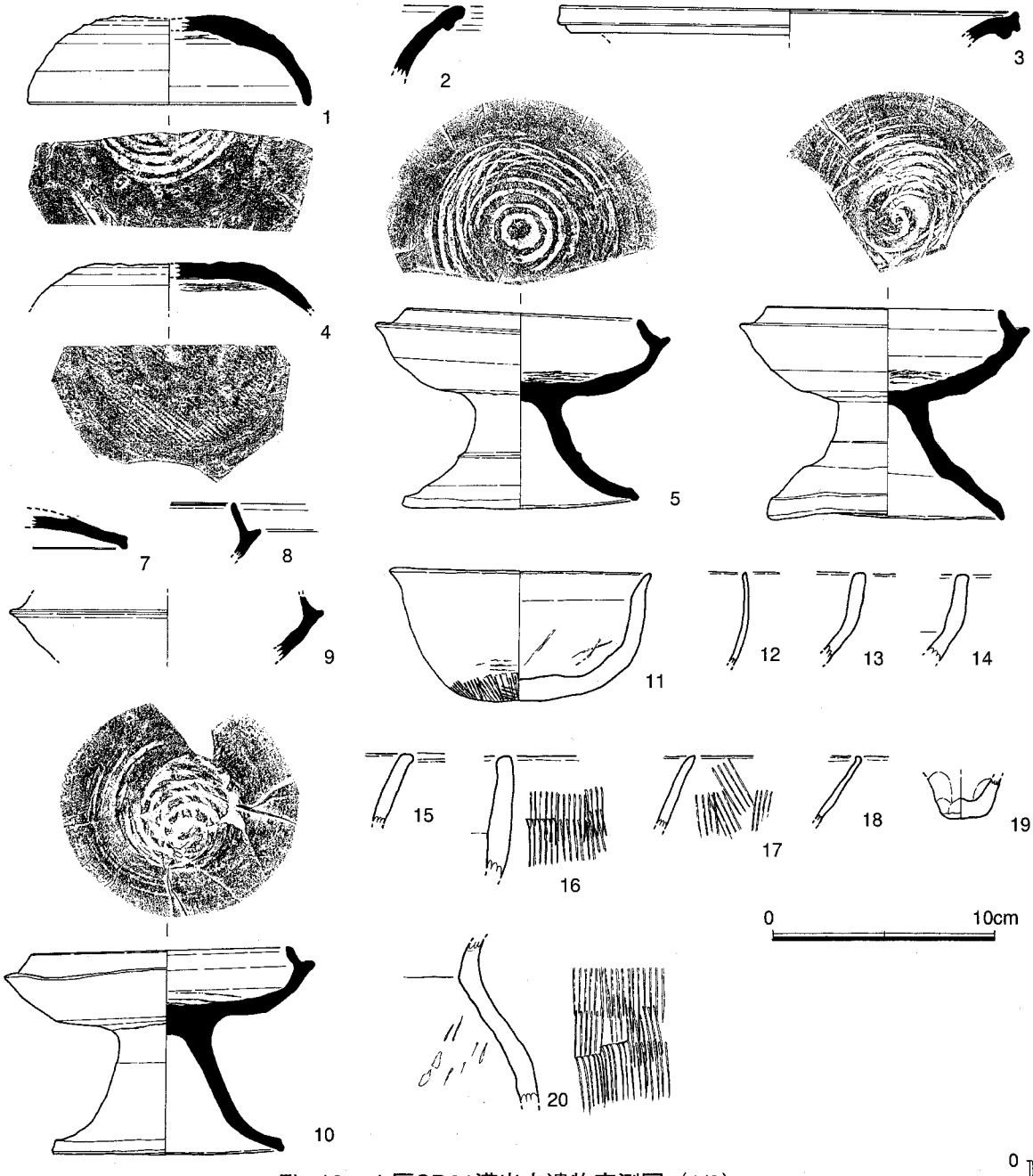


Fig.10　Ⅰ区SD01溝出土遺物実測図（1/3）

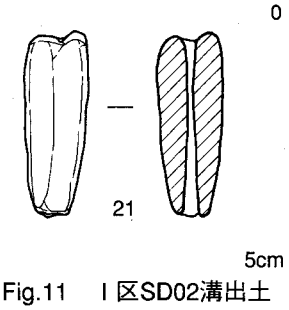


Fig.11　Ⅰ区SD02溝出土土錘実測図（2/3）

～40cm、深さ20cm、検出長2.5mを測る。

出土遺物（Fig.14）

36は、同安窯系青磁の小壺である。4/5個体残存し、口径3.0cm、器高4.9cm、胴部最大径6.6cm、底径3.5cmを測る。胴部外面に3条を1単位とする沈線を上下方向に5単位等間隔に巡らす。37は、土師器椀である。底部径6.3cmを測る。外底面にヘラ記号を十字形に施す。38・39は、土師器の皿である。38は、口径8.4cm、器高1.3cmを測る。外底面に回転ヘラ切り痕及び板状圧痕が観察できる。39は、口径8.8cm、器高1.1cmを測る。3/5個体残存する。底部は回転糸切りで、板状圧痕は観察できない。12世紀後半の遺構であろう。

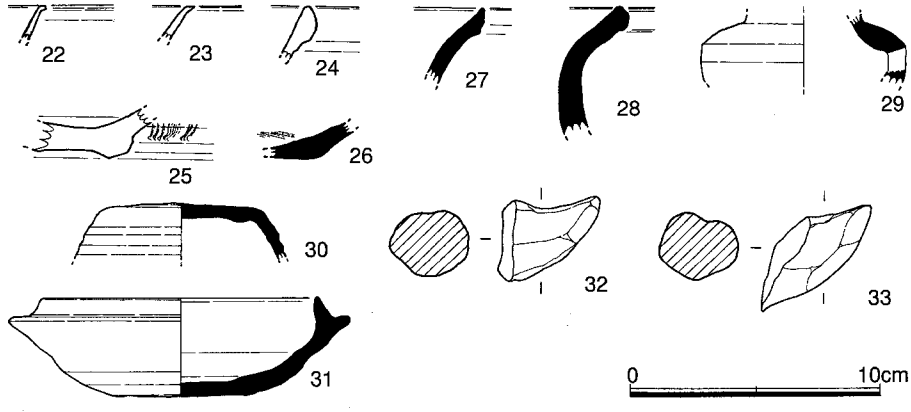


Fig.12　Ⅰ区SD02溝出土土器実測図（1/3）

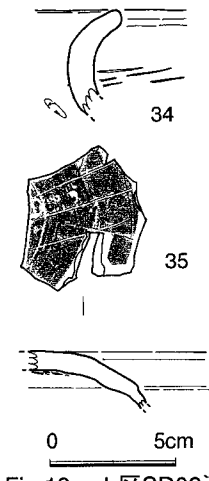


Fig.13　Ⅰ区SD03溝出土遺物実測図（1/3）

SD07溝（Fig.8・15）

Ⅰ区中央部北側に位置する。東西方向に方位をとり、若干蛇行しながらであるが37°北に偏する。SD16に切られる。所々広狭はあるものの出入りの少ない平面プランをなし、断面形は隅丸台形を呈する。幅40～80cm、深さ20cm、検出長30.5mを測る。

出土遺物（Fig.15）

陶磁器：40は、白磁Ⅳ類の碗である。口縁部の小片で、口縁には小振りの玉縁を作り出す。41は、白磁Ⅱ類の皿である。ほぼ完形で残る。口径11.4cm、器高2.7cm、底径4.4cmを測る。口縁部はわずかに外反し、内面に段を作り出す。釉調は、透明感のない緑味を帯びた乳白色を呈する。胎土は精良堅緻で、焼成は良好である。42は、白磁Ⅱ類の碗である。底部から体部にかけての破片で、2/3個体残存する。底径は、外径で6.0cmを測る。体部のみ施釉され、高台部は露胎。釉調は、透明感ある白緑色を呈する。

瓦器：43・44は、埦である。口縁部から体部にかけての破片である。口縁部を丸く作り内外両面に密なヘラ磨きを施す。44は、1/2個体残存し、全体が復元できた。口径15.9cm、器高5.2cm、底径6.2cmに復元できる。口縁部をのぞく外面及び内面に密なヘラ磨きを施す。内面は、まず底面に縦方向の磨きを施し、その後壁面全体に横方向の磨きを入れている。

須恵器：45は、須恵質土器の埦である。神出窯産であろう。1/3個体残存し、全体が復元できた。口径15.5cm、器高5.0cm、底径4.6cmを測る。口縁は丸く収め、体部外面やや口縁よりに沈線を１条巡らす。底部は、円盤状の粘土を体部に貼り付ける形で成形しており、外底面には回転糸切り痕が観察できる。

黒色土器：46は、黒色土器A類の埦である。底部から体部にかけての破片で、1/5個体残存する。底径のみ復元でき、6.8cmを測る。内底面に垂直方向、内壁面に水平方向の密なヘラ磨きを施す。丸く低い高台を貼り付ける。胎土は精良で、焼成は良好である。

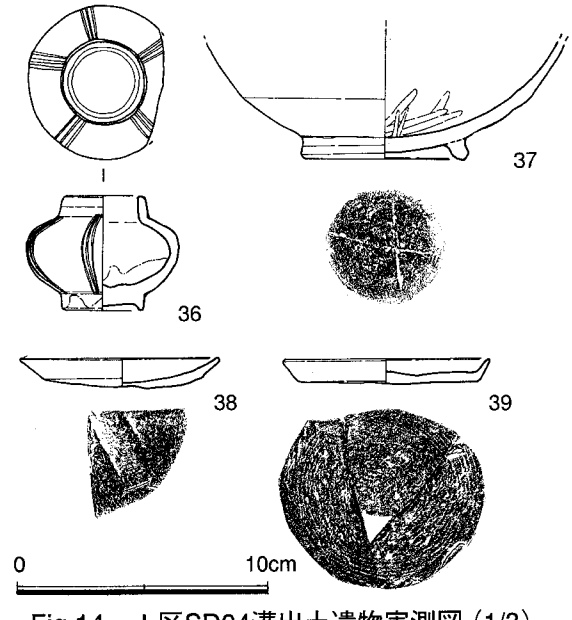


Fig.14　Ⅰ区SD04溝出土遺物実測図（1/3）

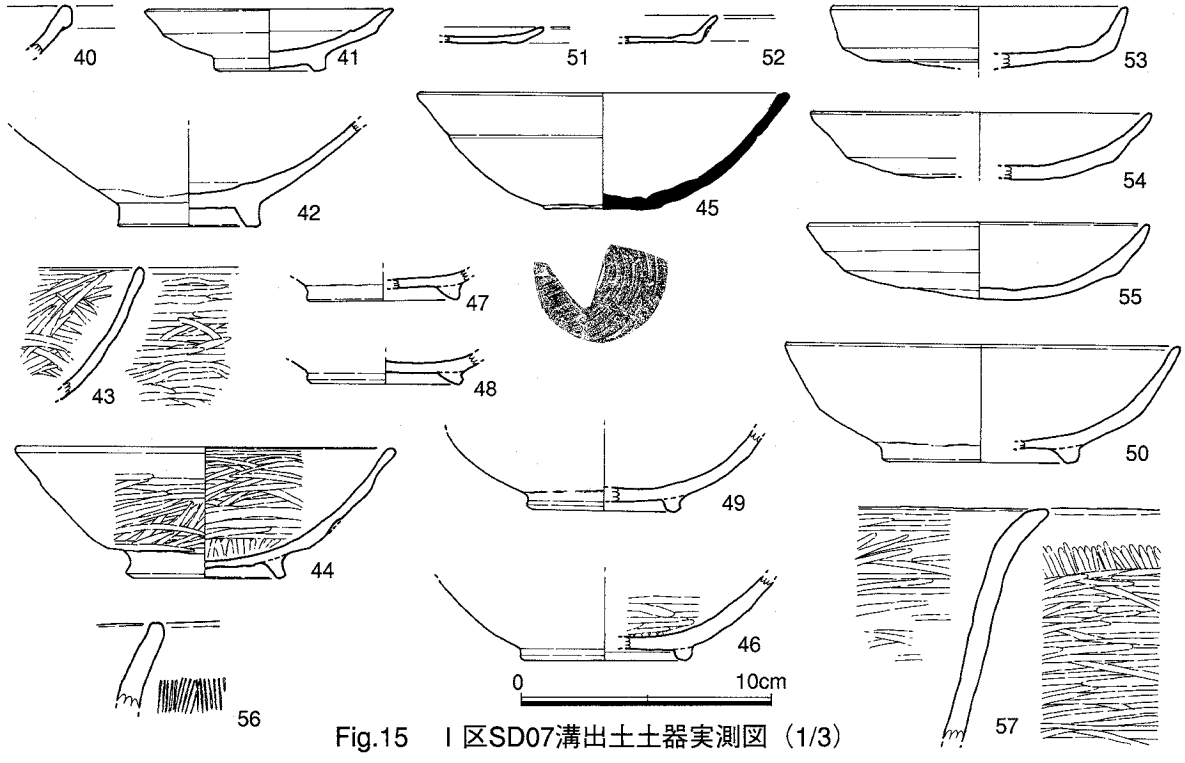


Fig.15　Ⅰ区SD07溝出土土器実測図（1/3）

土師器：47・48・49・50は、埦である。底部のみの破片で、底径は6.2cmを測る。やや外側に張り出す低い高台を貼り付けて成形する。胎土は精良で、焼成は良好である。48も底部のみの破片で、底径は、5.8cmを測る。やや外側に張り出す低い高台を貼り付けて成形する。胎土は精良で、焼成は良好である。49は、底部から体部にかけての破片である。全体を復元するまでには至らなかった。底径は、復元で6.1cmを測る。やや外側に張り出す低い高台を貼り付けて成形する。胎土は精良で、焼成は良好である。50は、 底部から口縁部にかけての破片である。底部をのぞく全体を復元できた。口径16.7cm、器高5.0cm、底径7.8cmを測る。口縁は丸く収め、体部外面やや底部よりに鈍い稜を１条作り出す。やや外側に張り出す低い高台を貼り付けて成形する。胎土は精良で、焼成は良好である。51は、皿である。小片のため全体を復元するには至らなかった。外底面には、磨滅のため不明瞭だが、回転ヘラ切り痕が残る。52・53・54・55は、坏である。52は、小片のため全体を復元するには至らなかった。外底面に回転糸切り痕が残る。53は、底部をのぞく全体を復元できた。口径12.6cm、器高2.6cm以上、底径9.0cmを測る。外面底部よりに２条の稜を作り出す。外底面には、回転ヘラ切り痕が残る。54は、底部をのぞく全体を復元できた。口径14.5cm、器高2.8cmを測る。外面やや底部よりに１条の稜を作り出す。外底面に回転ヘラ切り痕が残る。55は、1/3個体残存し、全体を復元できた。口径14.4cm、器高3.4cmを測る。外面やや口縁よりに稜を１条作り出す。外底面に回転ヘラ切り痕が残る。56は、甕である。口縁部の小片で、口径等の復元には至らなかった。外面に５条１単位の荒い刷毛目を施す。混入した遺物であろう。

縄文土器：57は、深鉢である。口縁部から体部にかけての破片である。口縁は緩く外傾する。外面には垂直方向の後水平方向の、内面には水平方向の磨きが施される。口縁部外面には磨きはみられない。これも混入した遺物であろう。

遺構面直上に堆積した包含層を除去しきれなかったこともあり、遺構に帰属しない遺物も混ぜて取り上げているが、遺物からの時期は、12世紀前半～中葉と思われる。

SD08溝（Fig.8・16）

Ⅰ区西半部北側、SD19溝の南側にて検出した。南北方向に方位をとり、18°程度西偏する。後世に削平を受けているためか残りは悪く、深さは上面から14cm程度を測るにすぎない。幅は60cm～1.2mを測る。底面は凹凸が少なくなめらかである。

出土遺物（Fig.16）

陶磁器：58・59は、白磁碗である。58は口縁部の小片で、大振りの玉縁を作り出し外面は回転ヘラ削りにて成形する。59は底部から体部にかけての破片である。底径は6.2cmを測る。60は、白磁皿である。2/3個体残存し全体を復元できた。口径10.8cm・器高2.8cm・底径3.7cmを測る。口縁は丸く収め、底部は高台をもうけず、回転ヘラ削りによって若干上げ底状に作っている。61は、合子の蓋である。褐釉が施され、小片ではあるが天井部に花鳥図と思われる文様を型押しして施文し、体部には刻み目を施す。

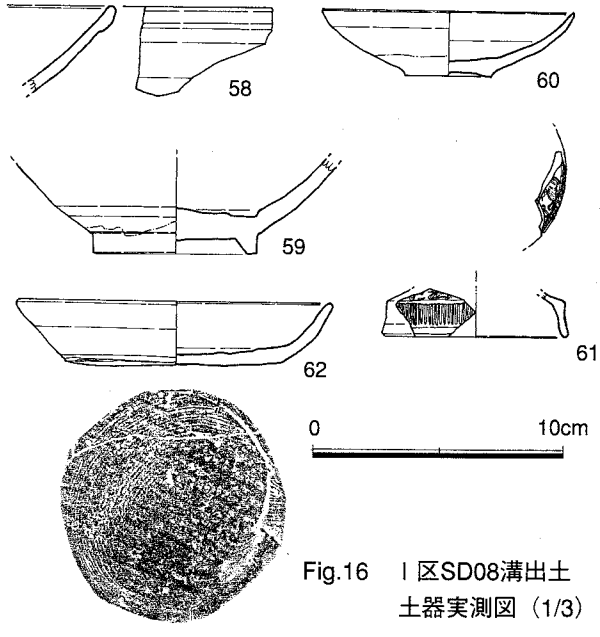


Fig.16　Ⅰ区SD08溝出土土器実測図（1/3）

土師器：62は、土師皿である。口径13.2cmを測り、外底面に板状圧痕を有する。12世紀後半。

SD09溝（Fig.8・17）

Ⅰ区西半部北側で検出した。南北方向に方位をとり、西に緩く屈曲する。西側の壁面は、調査区外となるため検出できなかった。埋土の土質・1mを越える深さから、おそらく第Ⅲ区のSD30に接続

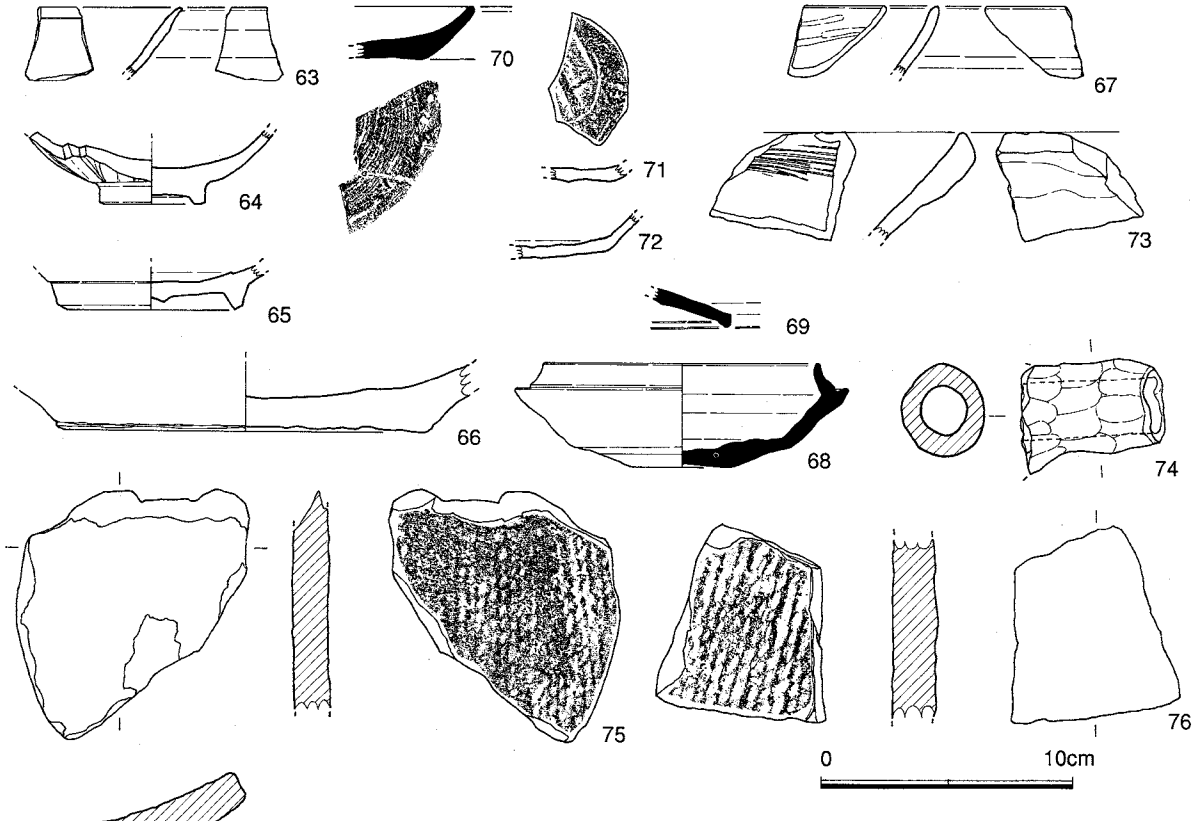


Fig.17　Ⅰ区SD09溝出土土器実測図（1/3）

すると思われる。流水及び滞水の痕跡は、土層断面からは確認できなかった。

出土遺物（Fig.17）

陶磁器：63は、白磁である。Ⅴ類の碗で、口縁部の小片である。口縁内面はわずかに面取りされ、釉色は、透明感ある乳白色を呈する。64は、龍泉窯系青磁碗である。底部から体部にかけての破片で、底径は3.7cmを測る。体部外面には片彫の蓮弁文を施す。高台部畳付の外側は釉剥ぎを施す。65は、白磁である。Ⅷ類の碗で、底径は6.6cmを測る。内面見込みに蛇の目状の釉剥ぎを施す。釉色は淡青白色を呈する。66は、備前焼の捏鉢である。底部の破片で、底径は復元で14.2cmを測る。胎土は精良で焼成は良好である。

瓦器：67は、埦である。口縁部の小片で、内面に横位のヘラ磨きを施す。胎土は精良で焼成は良好である。

須恵器：68は、坏身である。1/2個体残存し全体を復元できた。口径10.8cm・器高4.1cmを測り、外面下部1/3まで左回りの回転ヘラ削りを施す。かえりは低く内傾し、受け部にヘラ状工具で窪みを巡らす。内底面は不定方向のナデが観察できる。胎土は精良堅緻で焼成は良好である。69は、坏蓋である。高坏の脚部の可能性もあるがここでは暫定的に坏蓋とした。口縁部の小片で、胎土は精良堅緻で焼成は良好である。

土師器：70から72は、坏である。すべて破片であり、口径その他法量の復元はできなかった。1/4個体程度残存する。外底面は回転糸切り痕が残り、板状圧痕は観察できない。胎土は精良で焼成は良好である。71は、底部の小片である。外底面は回転ヘラ切りで、板状圧痕が観察できる。胎土は精良で焼成は良好である。72は、底部から体部にかけての小片で、1/6個体程度が残存する。底部調整は、磨滅のため観察できなかった。胎土は精良で焼成は良好である。73は、捏鉢である。口縁部の小片で、注口部分が残る。外面はナデ調整・内面には６条１単位の横位のハケ目を施す。74は、注口である。こまかな指押さえで成形し、外径は、最大径で3.7cm・内径は1.8cmを測る。胎土は精良で焼成は良好である。

瓦：75・76は、平瓦である。破片であるが、幅は復元で16.6cmを測ると思われる。厚さは1.4cmを測る。凹面には縦方向の縄目叩きを施し、凸面は縄目叩きの後、叩き目をナデ消している。燻しは内外両面に施されるが、磨滅のためわずかに残る程度である。76は、平瓦の小片である。法量の復元はできなかった。厚さは、1.6～1.8cmを測る。凹面には縦方向の縄目叩き、凸面は縄目叩きの後、叩き目をナデ消している。燻しは内外両面に施されるが、磨滅のためわずかに残る程度である。

これらの遺物から、SD09の時期は、13世紀初頭から前半と思われる。

SD13溝（Fig.8・18）

Ⅰ区中央北側にて検出した。南北方向に方位をとり、SD02から分流する形をなす。底面に生痕を有し、おそらく、南側の、生痕が密集する部分に水を溜め、北側に排水するための水路であろう。SD02との先後関係は、現場で確認できなかった。

出土遺物（Fig.18）

77は、須恵器坏蓋である。口縁部内面にわずかな段を有する。

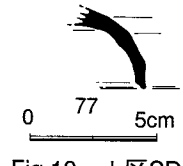


Fig.18　Ⅰ区SD13
溝出土土器実測図（1/3）

SD15溝（Fig.8・19）

Ⅰ区東半部北側にて検出した。南北方向に方位をとる。底面はなめらかで、生痕等は検出できなかった。当初、SD16に含まれるものと考えたが、切り合いはSD16に切られる形であった。削平のため上部及び西側の壁面をほとんど欠失する。埋土は、暗茶褐色シルト質土で、深さは6cmを測る。流水及び滞水の痕跡は、現場では確認できなかった。

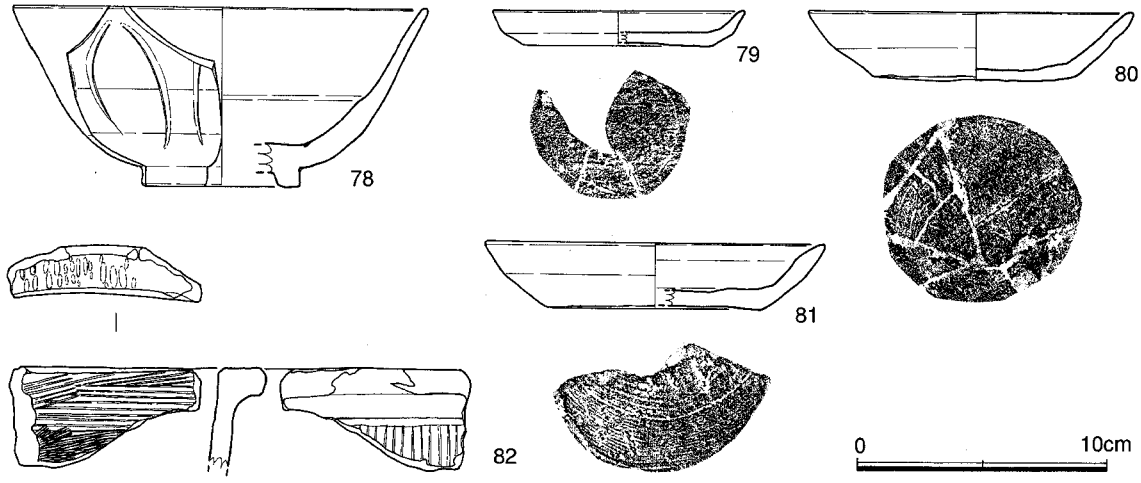


Fig.19　Ⅰ区SD15溝出土土器実測図（1/3）

陶磁器：78は、龍泉窯系青磁碗である。1/5個体程度残存し、かろうじて法量の復元が可能であった。口径16.4cm・器高7.2cm・底径6.2cmを測る。体部外面には片彫による蓮弁文が施される。内面には1条の沈線を持つ。胎土は精良堅緻で焼成は良好である。

土師器：79は、小皿である。2/3個体残存し、全体形の復元ができた。口径9.8cm・器高1.4cm・底径7.4cmを測る。外底面は回転糸切りで、板状圧痕を有する。80・81は、坏である。80はほぼ完形で出土した。口径12.8cm・器高2.8cm・底径8.1cmを測る。外底面は回転糸切りで、板状圧痕を有する。81は、口径13.4cmを測る。82は、弥生土器の甕である。混入したものであろう。

SD16溝（Fig.8・70）

Ⅰ区東半部にて検出した。南北方向に方位をとり、28°西偏する。幅は、狭部で40cm・広部で1.8m、深さは16cmを測る。緩やかに蛇行する平面プランを呈し、東部の壁面はやや出入りが激しい。一部、遺構検出面上層の遺物包含層が除去しきれず、溝の遺物と混ざってしまった。また、東側のSD18・19とほぼ並行して掘削されていることから、これと併せて道路遺構に伴う側溝の可能性が考えられるが、現場では道路と考えられる土層は確認できなかった。

出土遺物（Fig.20）

陶磁器：83・84・85・88は、龍泉窯系青磁碗である。83は、口縁部から体部にかけての小片である。口縁は丸く収め、わずかに外反する。体部外面には片彫による蓮弁文を有する。蓮弁の中央には鎬を作り出す。釉調は透明感ある茶緑色を呈する。84は、口縁部から体部にかけての小片である。口径は、復元で16.4cmを測る。体部外面には片彫による蓮弁文を有する。蓮弁の中央には鎬を作り出す。胎土は精良堅緻で焼成は良好である。85は、底部から体部にかけての破片である。1/5個体残存する。体部外面には片彫による蓮弁文を有する。体部下半に稜を削りだし、そこから上に施文する。蓮弁の中央には鎬を作り出す。高台の外面は外に向け肥厚し、底部は厚く作る。体部内面に1条の沈線を施す。88は、底部の破片である。底部のみほぼ完存する。わずかに残る体部に蓮弁文が観察できる。86・87・89は、白磁である。86は、Ⅳ類碗の口縁部である。厚い玉縁を作り出す。87は、Ⅷ類の皿である。1/6個体残存し、底径は復元で4.0cmを測る。底部には低い高台を作り出し、畳付から内側は露胎とする。89は、碗である。底部の破片で底部はほぼ完存する。底径は4.6cmを測る。底部には低い高台を作り出し、畳付から内側は露胎とする。90は、龍泉窯系青磁碗である。釉が厚く掛けられ、口縁部は緩く外反する。91は、白磁Ⅷ類の皿である。1/3個体残存し、内面見込みに劃花文を施す。口縁は緩く外反させ、体部外面には1条の稜を有する。外底面は露胎とする。92は、龍泉窯系青磁の小碗であ

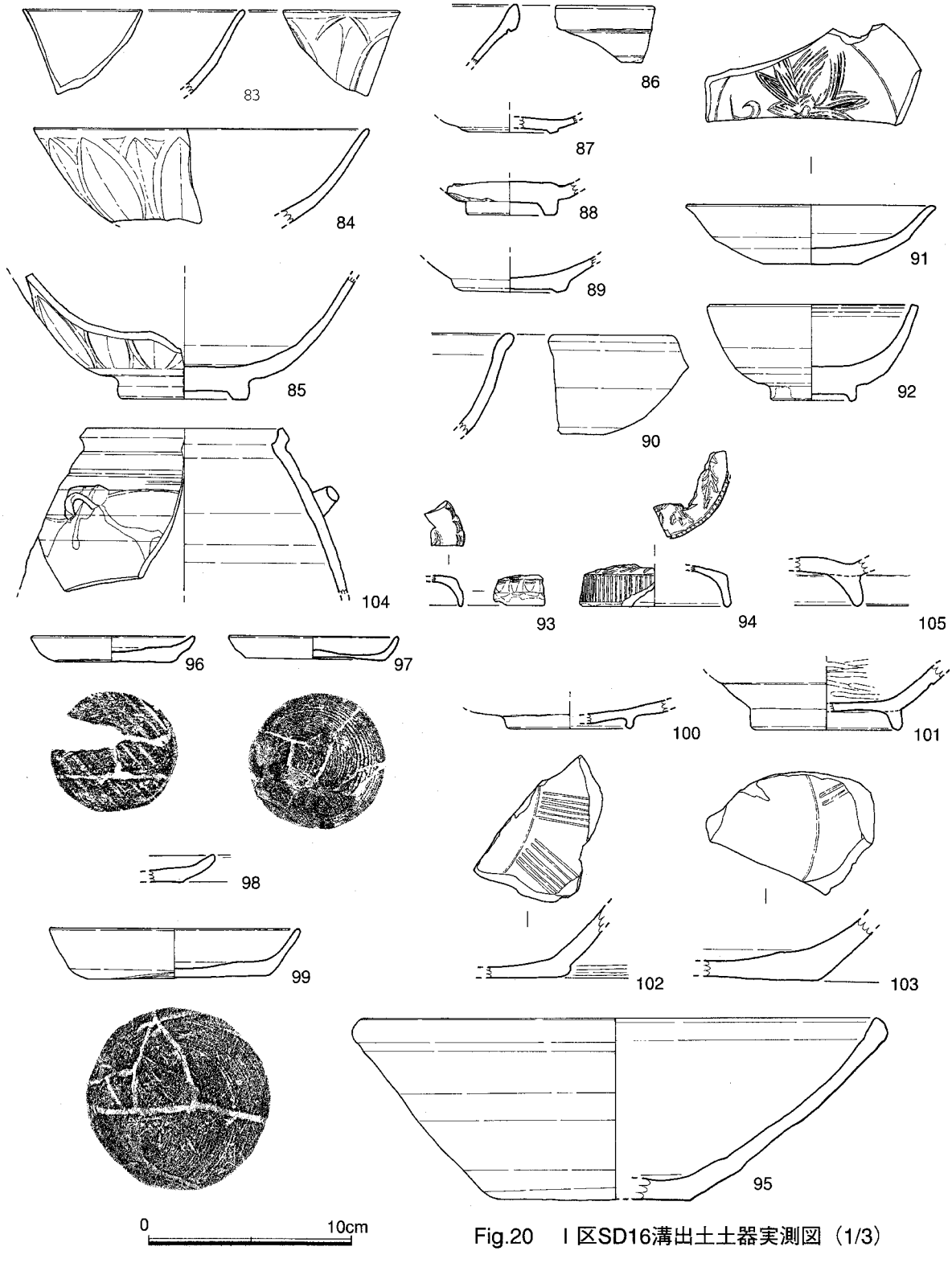


Fig.20　Ⅰ区SD16溝出土土器実測図（1/3）

る。2/3個体残存し、口縁は角張らせる。低い高台をつけ、底部は厚く作る。釉調は透明感あるオリーブ緑色を呈する。104は、茶褐釉陶器の四耳壺である。口縁部から体部にかけての破片で、1/6個体残存する。口縁部付近にのみ施釉し、他は露胎とする。93は、青白磁合子である。蓋の小片で、口縁部付近及び内面は露胎とする。天井部外面に文様が型押しされているが、それが何であるかは不明で

ある。94は、陶器の合子である。蓋の破片で、天井部外面には花鳥文と思われる文様が型押しされている。体部には細かい凸線が型押しされる。釉調は透明感ある茶褐色で、口縁及び内面は露胎とする。

須恵器：95は、東播系須恵質土器の捏鉢である。1/4個体残存し、口縁は復元で25.4cm・器高9.0cm・底径9.5cmを測る。口縁は丸く肥厚させ、内外両面とも回転ナデ調整を施す。底部調整は回転糸切りである。

瓦器：100・101は、埦である。100は、底部から体部にかけての小片である。底径は、復元で6.0cmを測る。101は、底部から体部にかけての破片である。1/6個体残存する。底径は、7.2cmを測る。内面には横位のヘラミガキ、外面には1条の沈線を施す。胎土は精良で焼成は良好である。

土師器：96・97・98は、土師皿である。96は、4/5個体残存し、口径9.8cm・器高1.3cm・底径7.6cmを測る。底部内面中央部は、不定方向のナデにより凹ませる。外底面は回転糸切りで、板状圧痕を有する。97は、ほぼ完形で出土した。口径10.2cm・器高1.0cm・底径8.6cmを測る。底部は薄く作り、中央部がやや膨らむ。内面には不定方向のナデ調整が観察される。外底面は回転糸切りで、板状圧痕は観察できない。98は、口縁から底部にかけての小片である。外底面は回転糸切りで、板状圧痕を有する。99は、坏である。ほぼ完形で出土した。口径12.2cm・器高2.5cm・底径10.6cmを測る。外底面は回転糸切りである。102・103は、擂鉢である。どちらも体部から底部に掛けての小片で、内面には粗い擂り目を有する。これらの遺物から、溝の時期は13世紀初頭～前半と思われる。

SD17溝（Fig.8・21）

Ⅰ区東半部にて検出した。南北に方位をとり、削平により南側9.5m程度のみ残存する。検出幅は最大1.8mを測る。

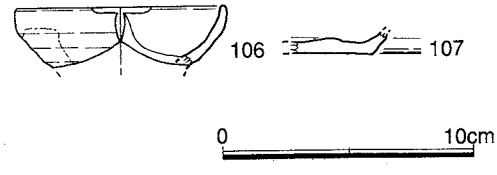


Fig.21　Ⅰ区SD17溝出土土器実測図（1/3）

出土遺物（Fig.21）

陶磁器：106は、白磁皿である。口縁部から体部にかけての小片で、口径は、復元で8.7cmを測る。

土師器：107は、土師皿である。底部調整は回転糸切りである。

SD18溝（Fig.8・Fig.22）

Ⅰ区東端近くで検出した。SD19に切られる。南北に方位をとり、30°西偏する。幅は70から80cm・深さ26cmを測る。平面プランはわずかに蛇行するが、ほぼ直線的に掘削されている。断面からは掘り直しは確認できないが、埋没後、SD19にその機能を譲ったものと思われる。なお、SD19および本遺構は、現在の里道とほぼ並行しており、中世段階の地割りが現在に至るもなお残存しているものと思われる。本遺構の機能もまた、田畑もしくは屋敷地の区画、道路の側溝といったものの可能性が考えられる。時期は、出土遺物から12世紀後半と思われる。

出土遺物（Fig.23）

陶磁器：108は、青白磁の皿である。底部から体部にかけての破片で、1/6個体程度残存する。底径は、復元で5.2cmを測る。低い高台を削りだしており、畳付から内側は露胎とする。釉調は透明感ある青白色を呈する。109は、白磁碗である。底部がほぼ完存する破片で、底径は5.3cmを測る。低い高台を削りだし、内面に1条の沈線を持つ。110は、同安窯系青磁碗である。底部から体部にかけての破片で、1/8個体程度残存する。胎土は暗灰色を呈し内面のみ施釉される。釉調は透明感ない暗緑色を呈する。111は、龍泉窯系青磁碗である。底部から体部にかけての破片で、1/3個体残存する。底径は6.2cmを測る。底部は厚く作られ、畳付から内側は露胎とする。112は、無釉陶器鉢である。口縁部の小片で、焼成は良好である。

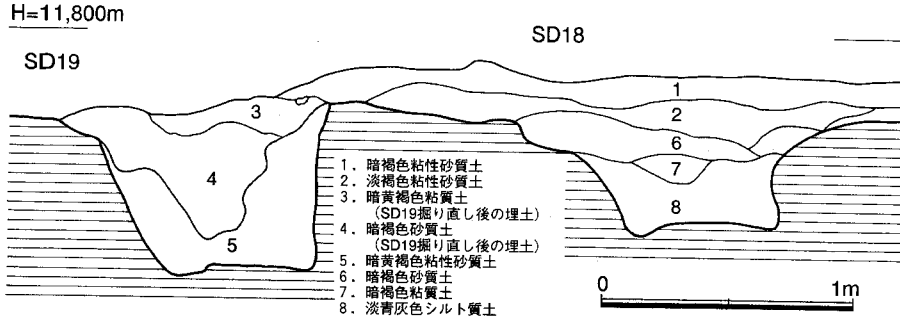


Fig.22　Ⅰ区SD18・19溝北壁土層断面実測図（1/30）

瓦器：113は、埦である。底部の破片で、底径は復元で5.8cmを測る。

土師器：114・115は、坏である。114は、1/8個体残存し、磨滅のため底部調整は不明。115は、復元口径15.6cmを測る。116は、埦である。底部の破片で、底径は復元で5.8cmを測る。117は、鉢である。口縁部の小片で、指押さえにより注口を作り出す。外面は横位の刷毛目が観察できる。

SD19溝（Fig.8・22・24）

Ⅰ区東端付近で検出した。SD18を切る。北端部より22m付近でⅡ区の方向に屈曲し、深さ55cmを測る。南北方向に方位をとり、SD18とほぼ並行する。土層断面からは1回の掘り直しが認められるが、埋没後SD18の埋土が上層に堆積している。調査当初、両溝の切り合いが確認できず、SD19屈曲部まで両方の遺物が混ざってしまった。

出土遺物（Fig.24）

陶磁器：118は、龍泉窯系青磁碗である。底部がほぼ完存する破片で、底径は6.4cmを測る。内面見込みに4カ所の目痕を有する。119は、白磁碗である。口縁部の小片である。120・121は、同安窯系青磁碗である。どちらも底部の完存する破片で、120は、底径3.8cmを測り、内面は施釉される。高台と体部の境にL字状の工具で稜をつける。121は、底径3.8cmを測り、胎土は暗灰色、釉調は透明感ある灰緑色を呈する。

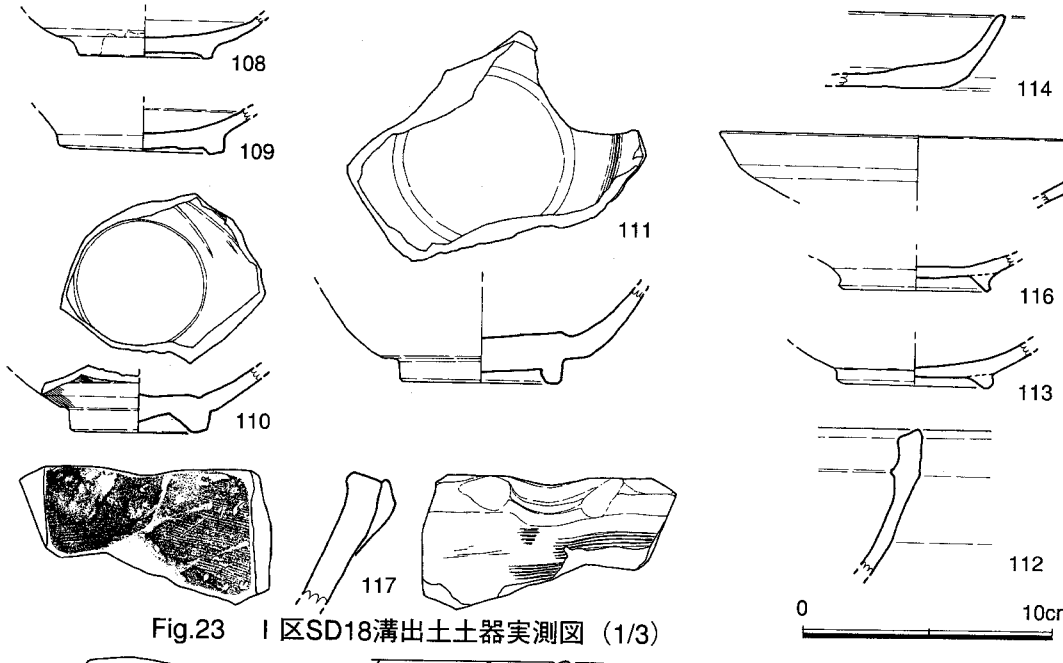


Fig.23　Ⅰ区SD18溝出土土器実測図（1/3）

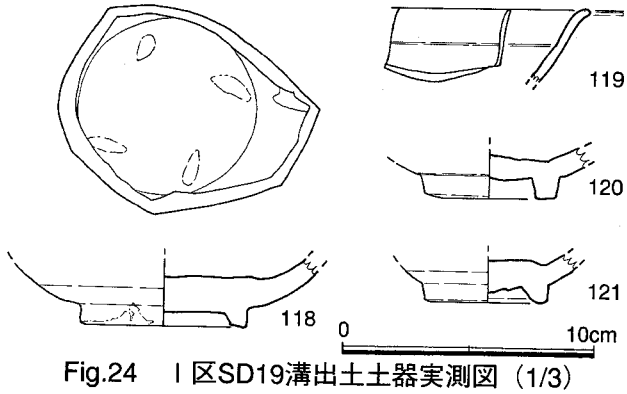


Fig.24　Ⅰ区SD19溝出土土器実測図（1/3）

③土壙（Fig.25～52・PL.1～3）

SK01土壙（Fig.25）

Ⅰ区西半部にて検出した。長軸を東西にとる不正な楕円形の平面プランを呈し、長径4.3m・短径2.04m、深さは、上半部が削平されているため本来の数値ではないが、深い部分で43cmを測る。土層は２層に分かれるが、滞水の痕跡は、現場では確認できなかった。

出土遺物（Fig.26・27）

すべて底面から浮いた状態で出土した。円礫はすべて被熱していた。

陶磁器：122は、龍泉窯系青磁碗である。口縁部から体部にかけての小片で、口縁はわずかに外反する。内面には、片彫による文様が施される。胎土は精良堅緻で焼成は良好である。123は、白磁である。Ⅷ類の碗で、底部がほぼ完存する破片である。底径は6.2cmを測り、内面見込みの釉を輪状に掻き取る。焼成は良好で、釉調は透明感ない乳白色を呈する。124は、合子である。蓋の破片で、陶器と思われるが、釉色は同安窯系青磁に似る。口縁部を外側に肥厚させ、外面のみ施釉する。天井部外面には、草花文あるいは花鳥文と思われる文様を型押しする。

土師器：125・126・127・128は、皿である。125は、

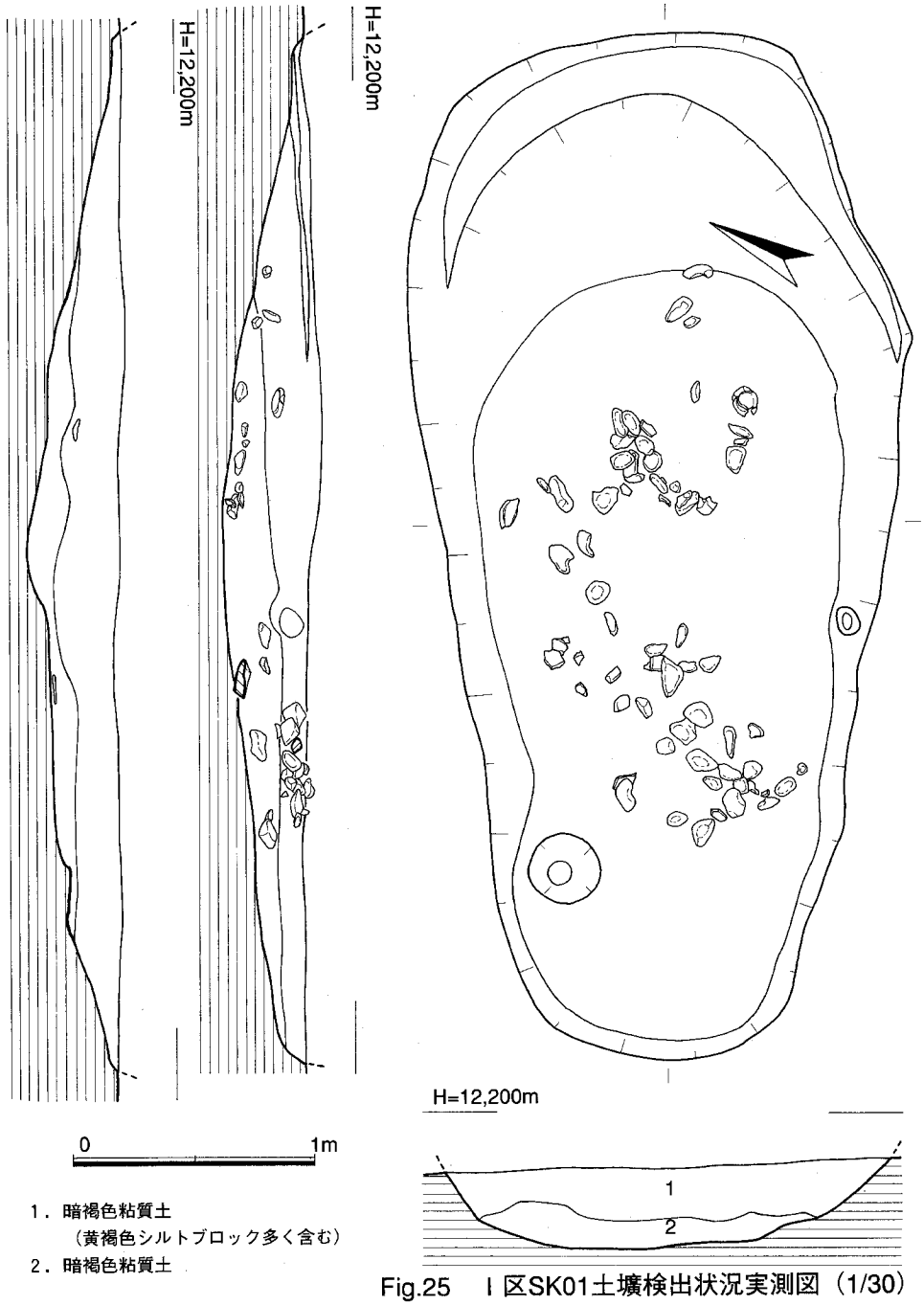


Fig.25　Ⅰ区SK01土壙検出状況実測図（1/30）

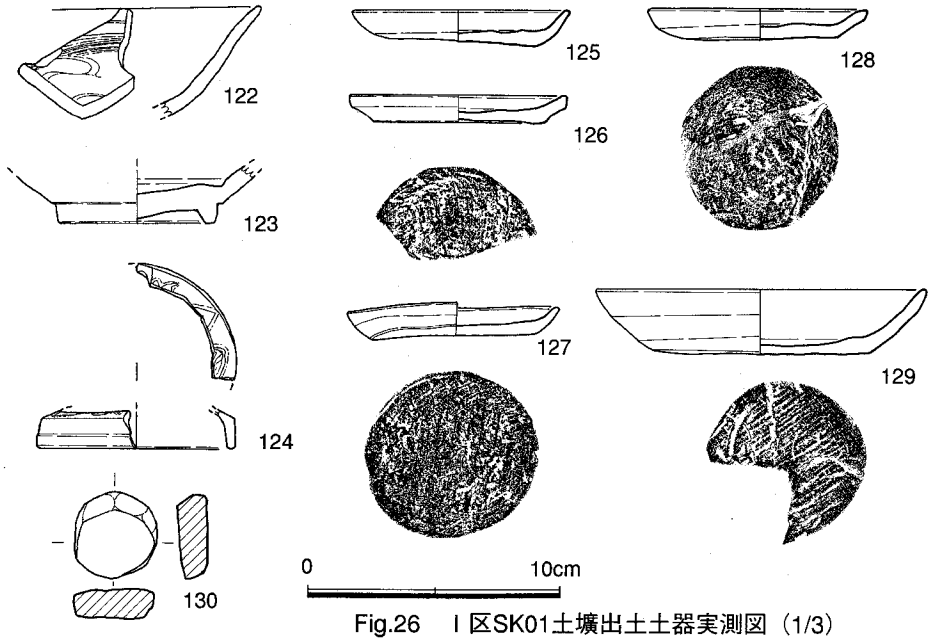


Fig.26　Ⅰ区SK01土壙出土土器実測図（1/3）

3/4個体残存し、口径8.6cm・器高1.4cm・底径5.8cmを測る。底部に回転糸切り痕および板状圧痕を有する。胎土は精良で、焼成は良好である。126は、2/3個体残存し、復元で、口径8.4cm・器高1.1cm・底径6.6cmを測る。口縁部を肥厚させ、玉縁状に作る。胎土は精良で、焼成は良好である。127は、ほぼ完形で、焼けひずみのためねじれている。口径8.3cm・器高1.3cm・底径6.5cmを測り、内面は不定方向のナデ調整で作る。底部に回転糸切り痕を有する。胎土は精良で、焼成は良好である。128は、ほぼ完形であるが、磨滅のため調整は不鮮明である。口径8.7cm・器高1.2cm・底径6.4cmを測る。底部に回転糸切り痕を有し板状圧痕は観察できない。胎土は精良で、焼成は良好である。129は、坏である。3/4個体残存し、復元で、口径12.8cm・器高2.5cm・底径8.6cmを測る。口縁は丸く収め、体部外面に1条の稜を有する。底部内面は不定方向のナデにより仕上げている。130は、土製円盤である。当初、瓦玉かとも考えたが、ここでは弥生時代の土製円盤とする。混入したものであろう。器長3.4cm・器幅3.2cm・器厚1.2cmを測る。土師質である。胎土は精良で、焼成は良好である。

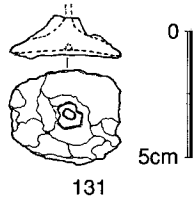


Fig.27　Ⅰ区SK01土壙出土鉄製品実測図（1/3）

鉄製品：131は、不明鉄製品である。紡錘車の可能性もあるが、詳細はよくわからなかった。ご教示を願うものである。平面隅丸長方形を呈し、長辺4.3cm・短辺3.6cmを測り、碗状にくぼむ。上方に棒状の突起があったものと思われるが、欠失している。

以上の遺物から、SK01土壙の時期は、13世紀前半頃と思われる。

SK02土壙（Fig.28～30）

Ⅰ区西半部北側にて検出した。調査区端に接し、北端部は調査できなかった。ここでは土壙として報告しているが、井筒が検出されているため、井戸であったと思われる。平面プランは不正な円形を呈し、直径2.9m、深さ3.0mを測る。堀方底面でも湧水はせず、地下水位が下がっているか、あるいは底面を検出できていない可能性も考えられるが、現場では確認できなかった。土壙中央に井筒を検出した。木質はすでに失われており、輪状の黒色土として検出した。直径56cmを測る。内部の埋土は黒褐色の粘質土である。

出土遺物（Fig.30）

陶磁器：132・133・134は、白磁Ⅳ類碗である。いずれも口縁部から体部にかけての小片で、132・133は、小振りな玉縁を有し、全面に施釉される。134は、やや大振りな玉縁を有し、体部外面を露胎とする。いずれも釉調は透明感ない淡緑色を呈する。135は、白磁Ⅴ類碗である。底部から体部にか

けての破片で、底径は4.8cmを測る。高台部は露胎とし、内面見込みに櫛書きによる文様が観察される。胎土は精良堅緻で、焼成は良好である。釉調は透明感ない淡緑色を呈する。136は、茶褐釉陶器の瓶である。底部から体部にかけての破片で、1/6個体程度残存する。底部はやや上げ底に成形され、内外両面に施釉される。底径は復元で8.2cmを測り、外面は回転ヘラ削り、内面は回転ナデにて成形する。釉調は透明感ない暗灰色を呈し、焼成は良好である。

瓦器：137・138は、椀である。137は、底部がほぼ完存する破片で、底径は4.2cmを測る。体部外面に1条の稜を有し、低い三角形の高台を貼り付ける。外面は縦位、内面は横位のヘラ磨きが施される。138は、底部から体部にかけての破片で、底径は復元で6.6cmを測る。内外両面とも、横位の密なヘラ磨きを施す。低い不整な高台を貼り付ける。

須恵器：139・140は、東播系須恵質土器の鉢である。口縁部から体部にかけての小片である。

土師器：141・142・143は、皿である。141は、口縁部から底部にかけての小片である。142は、1/4個体残存し、復元で口径9.8cm・器高0.9cm・底径8.2cmを測る。143は、1/4個体残存し、口径9.4cm・器高1.1cm・底径7.8cmを測る。

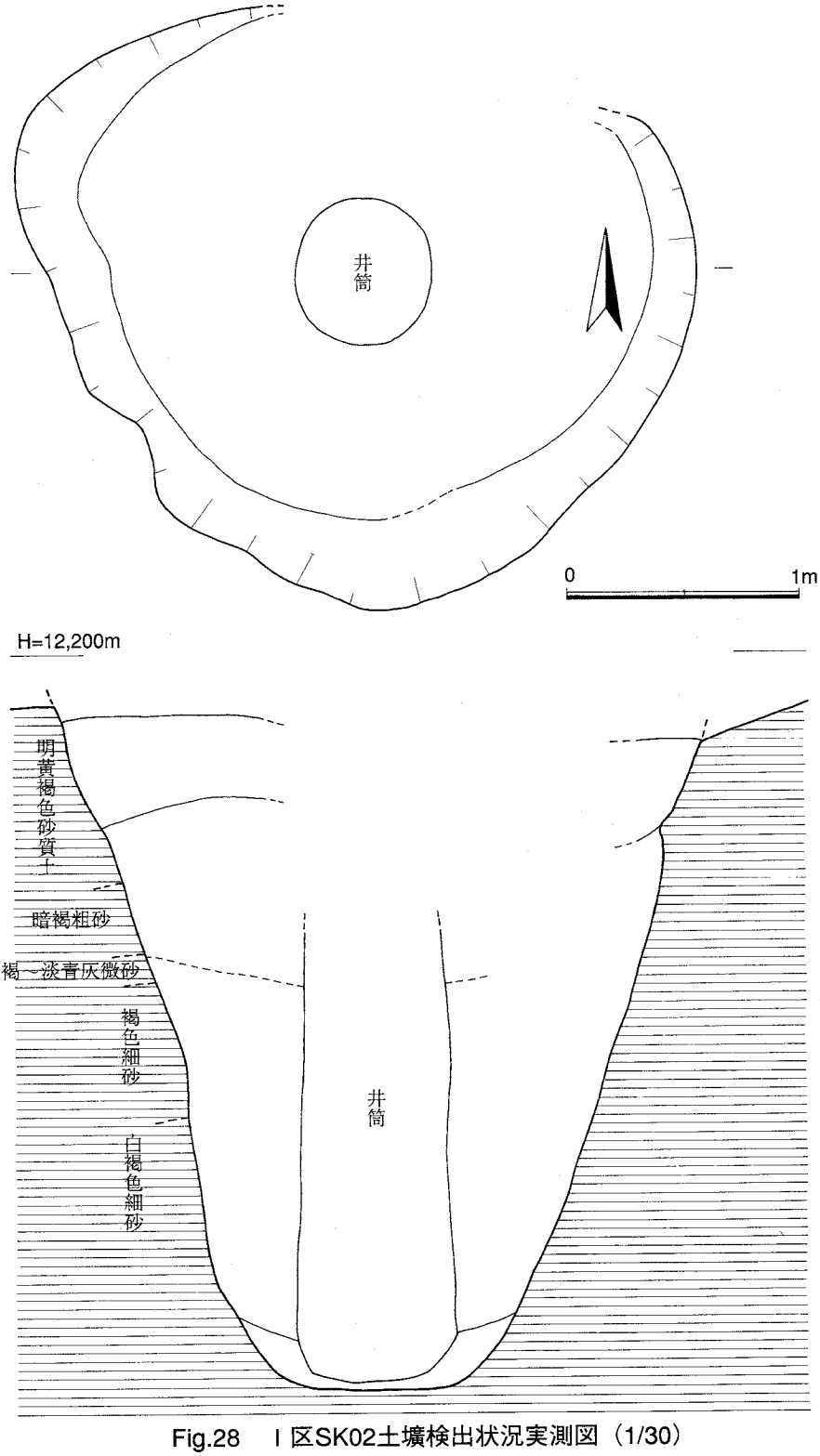


Fig.28　Ⅰ区SK02土壙検出状況実測図（1/30）

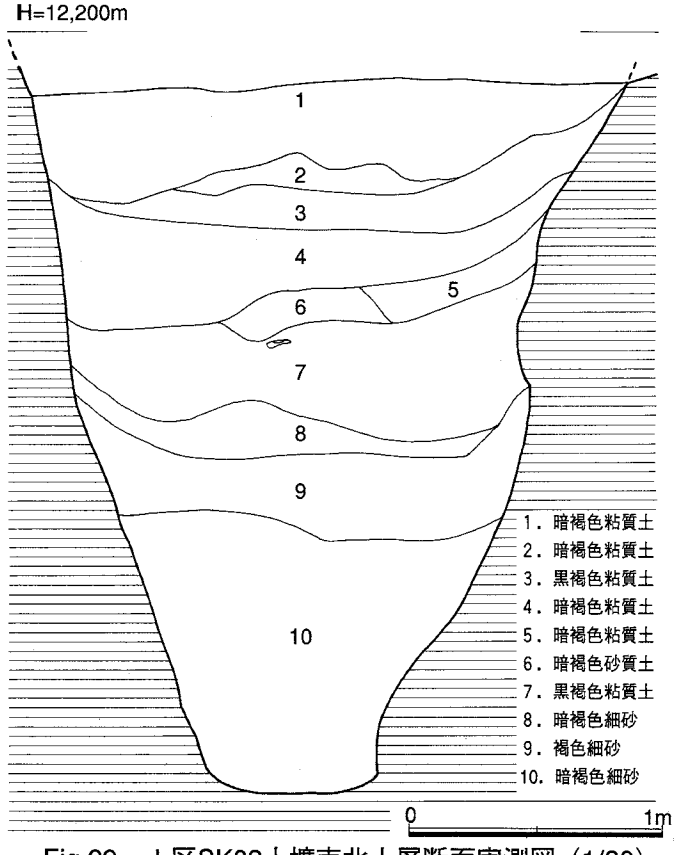


Fig.29　Ⅰ区SK02土壙南北土層断面実測図（1/30）

SK03土壙（Fig.31）

Ⅰ区西半部にて検出した。溝状の土壙で、南に緩く屈曲する。西端部を攪乱に切られる。幅は最大56cm、残存長は1.7mを測る。深さは、削平を受けているため当初の姿を残しているわけではないが、8cm程度残存する。

出土遺物は、須恵器・土師器・瓦器の細片が出土している。

SK04土壙（Fig.31）

Ⅰ区西半部にて検出した。SD01溝を切る。不整な小判形の平面プランを呈し、東側の平面はやや角張っている。長径2.24m・短径1.02mを測り、深さは、最大20cm残存する。底面はやや盛り上がり、低い凹凸を有する。埋土は、暗茶褐色シルト質土である。

出土遺物（Fig.32）

陶磁器：144は、合子である。釉調は透明感ある淡緑色で、磁器の可能性もあるが、暫定的に陶器とする。1/2個体残存し、復元で口径7.9cm・器高1.9cm・底径8.2cmを測る。

土師器：145・146は、皿である。口縁部から底部にかけての小片で、底部は回転糸切りである。146には板状圧痕を有する。147は、底部の小片である。高い高台を貼り付ける。時期は12世紀後半か。

SK06土壙（Fig.31）

Ⅰ区西半部にて検出した。平面プランは不整な円形を呈し、２基のピットに切られる。長径76cm・短径60cm・深さは現状で8cmを測る。

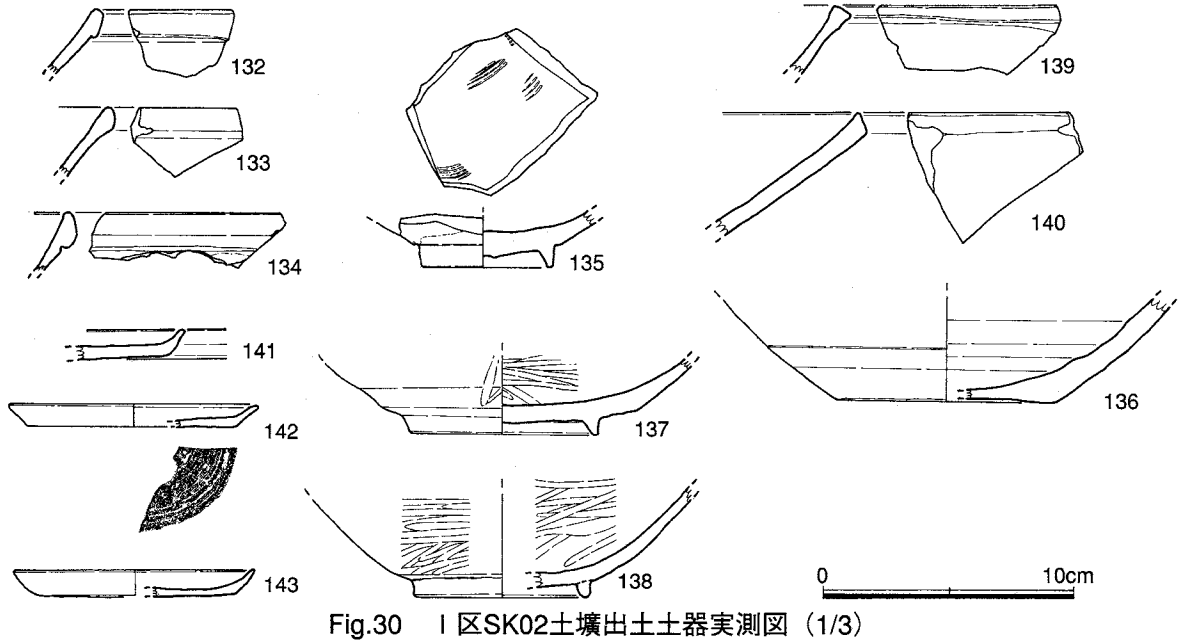


Fig.30　Ⅰ区SK02土壙出土土器実測図（1/3）

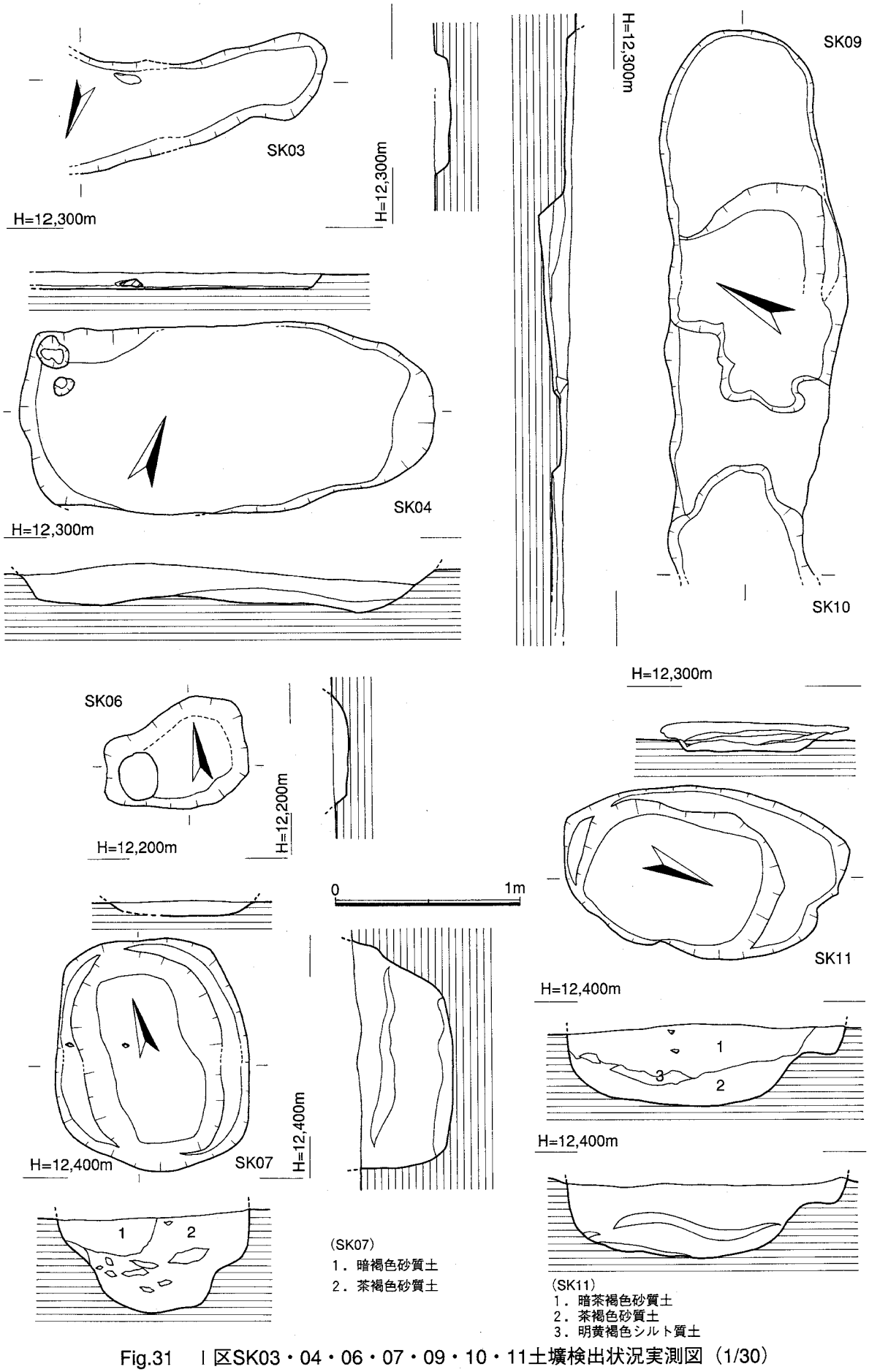


Fig.31　Ⅰ区SK03・04・06・07・09・10・11土壙検出状況実測図（1/30）

SK07土壙（Fig.31）

Ⅰ区西半部にて検出した。不整な隅丸方形の平面プランを呈する土壙で、東西両方に狭長なテラスを有する。長径1.24m・短径1.04m・深さは、削平のため本来の数値ではないが、50cmを測る。

出土遺物は、陶磁器・瓦器・土師器の細片が出土した。12世紀代か。

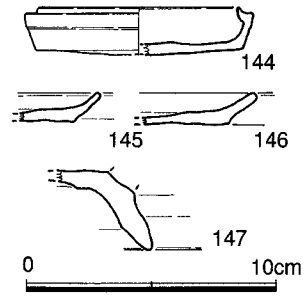


Fig.32　Ⅰ区SK04土壙出土土器実測図（1/3）

SK09土壙（Fig.31）

Ⅰ区西半部にて検出した。SK10に切られる。細かい出入りを有する溝状の平面プランを有し、底面は、東端部・中央部に高さ4から12cmのテラスを持つ。残存長3.04m・幅96cm・残存する深さ6～18cmを測る。

出土遺物は、白磁・須恵器・土師器が出土したが、細片のため図示できなかった。

SK10土壙（Fig.8）

Ⅰ区西半部にて検出した。SK09を切る。不整な円形の平面プランを呈する土壙で、土層からは人為的な埋め戻しが認められる。長径1.0m・短径80cmを測り、6cm程度残存する。

出土遺物は、土師器・黒色土器・瓦器が出土しているが、細片のため図示できなかった。

SK11土壙（Fig.31）

Ⅰ区西半部にて検出した。SD01溝と長軸を平行にする。不整な楕円形の平面プランを有し、北から西・および南側にテラスを有する。長径1.56m・短径94cm・深さは現状で40cmを測る。

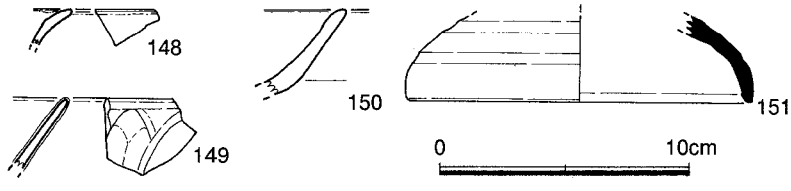


Fig.33　Ⅰ区SK11土壙出土土器実測図（1/3）

出土遺物（Fig.33）

陶磁器：148は、白磁である。Ⅸ類の碗で、朝顔形に開く口縁部の小片である。149は、龍泉窯系青磁碗である。口縁から体部にかけての小片で、片彫りによる鎬蓮弁文を有する。13世紀前半か。

須恵器：151は、坏蓋である。復元で口径13.6cmを測る。胎土は精良で焼成は良好である。

土師器：150は、椀である。口縁部の小片である。胎土は精良で焼成は良好である。

SK12土壙（Fig.34）

Ⅰ区西半部にて検出した。不整な楕円形の平面プランを呈し、北側の削平が著しい。長軸はほぼ磁北方向を向く。SD02溝とほぼ方位を一にすることから、何らかの関係を持つ可能性が考えられる。時期が近いためか。排水溝の攪乱に切られるが、ほぼ堀方は残っている。長径2.3m・短径1.1m、深さは、削平のため本来の数値は不明であるが、30cmを測る。埋土は、暗茶褐色シルト質土である。

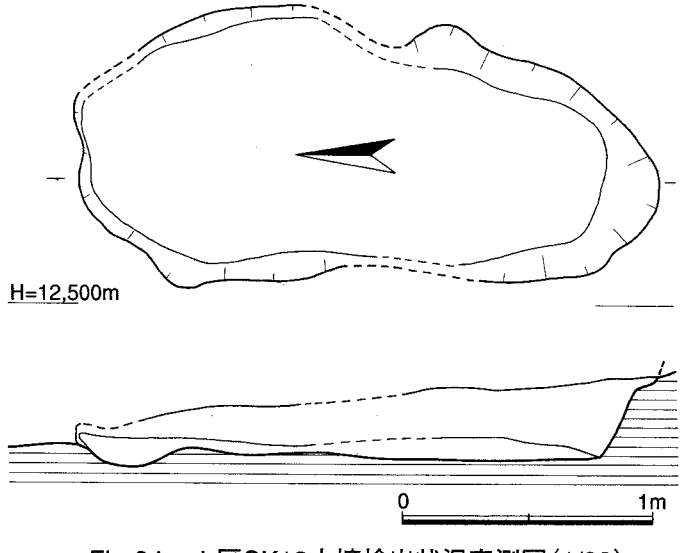


Fig.34　Ⅰ区SK12土壙検出状況実測図（1/30）

出土遺物（Fig.35）

陶磁器：152は、白磁である。Ⅷ類の碗で、口縁から体部にかけての小片である。

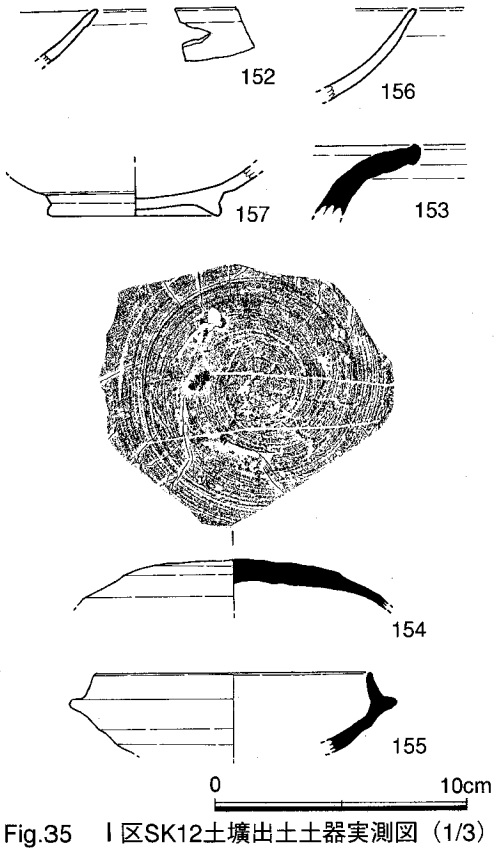


Fig.35　Ⅰ区SK12土壙出土土器実測図（1/3）

全面に施釉され、釉調は透明感ある暗緑色を呈する。口縁部を肥厚させ、外面やや下に稜を持たせる。胎土は精良堅緻で、焼成は良好である。

須恵器：153は、甕である。口縁から頸部に掛けての小片で、口縁部を丸く肥厚させる。内外両面とも回転ナデ調整で成形される。胎土は精良堅緻で、直径１ミリ程度の砂粒を含む。口縁部で1/8残存する。焼成は良好である。154は、坏蓋である。天井部から体部にかけての破片で、1/3個体程度残存する。天井部には右回りの回転ヘラ削りが施され、２条のヘラ記号が観察される。幅１ミリ程度で、中央付近に若干平行を崩して施条される。天井部内面は不定方向のナデにより仕上げられ、それ以外の部分は回転ナデにより成形される。胎土は精良堅緻で、直径１ミリ程度の砂粒を含む。焼成は良好である。

155は、坏身である。口縁部から体部にかけての破片で、口縁で1/6残存している。口径は、復元で10.8cmを測る。かえりは低く内傾し、高さ1cmを測る。全体に丸みを持たせて成形され、受け部にはくぼみが見られない。内外両面とも回転ナデ調整にて成形される。胎土は精良堅緻で、焼成は良好である。

土師器：156・157は、埦である。口縁部から体部にかけての破片で、口縁で1/8残存する。胎土は精良で、焼成は良好である。157は、底部から体部にかけての破片で、1/10個体残存する。底径は6.5cmを測る。胎土は精良で、焼成は良好である。これらの遺物から、時期は12世紀代と思われる。

SK13土壙（Fig.36）

Ⅰ区西半、調査区北壁に接して検出された。竪穴住居の可能性もあるがここでは土壙として報告する。不整な円形の平面プランを呈し、北端は調査区外となるため調査できなかった。南東に２カ所の狭いテラスを有し、南北長3.2m以上・東西長3.2mを測る。底面から２基のピットを検出した。この土壙に先行するのか、伴うのかは現場では確認できなかった。

出土遺物（Fig.37）

158は、甕である。口縁から胴部にかけての小片である。159は、甑である。底面から浮いた状態で出土し、ほぼ完形である。取手を１カ所有する。外面上3/4は縦刷毛、ほかはヘラ削りで調整される。時期は、これらの遺物からでは特定が難しいが、古墳中期から後期頃か。

SK14土壙（Fig.38）

Ⅰ区西半、調査区西壁に接して検出された。底面は粗砂となり湧水するため、井戸の可能性も考えられるが、ここでは土壙として報告する。不整な円形の平面プランを呈し、２つの段を作りつつ円形プランの底部に至る。南北長2.24m・東西長2.7mを測る。深さは、検出面から1.6mを測る。埋土は、暗灰色シルト質土である。

出土遺物（Fig.39）

陶磁器：160・161・162・163・164は、白磁である。160は、Ⅳ類碗である。口縁から体部にかけての小片で、口縁に薄い玉縁を作り出す。釉調は、透明感ない乳白色を呈する。161は、Ⅷ類碗である。

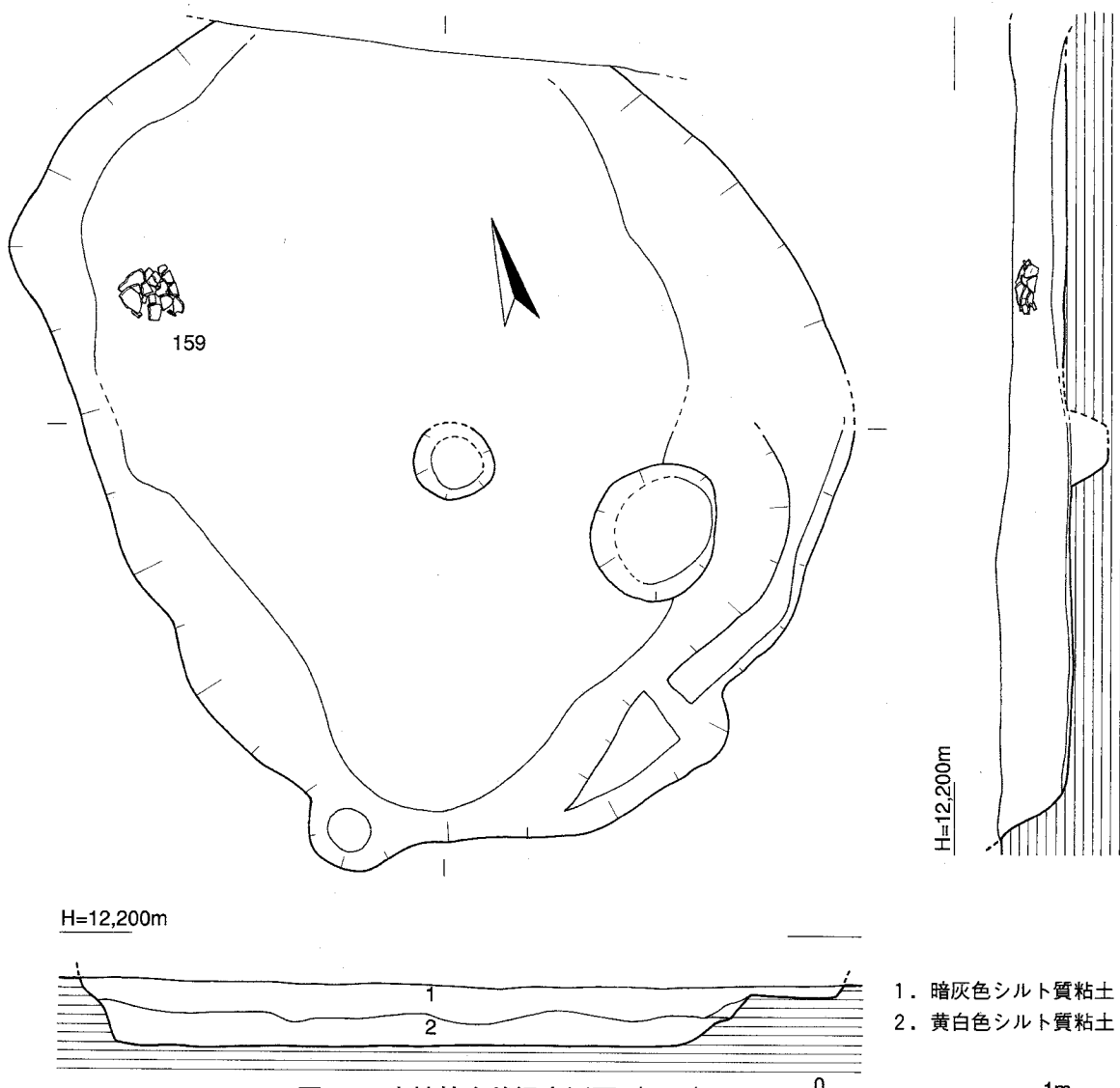


Fig.36　Ⅰ区SK13土壙検出状況実測図（1/30）

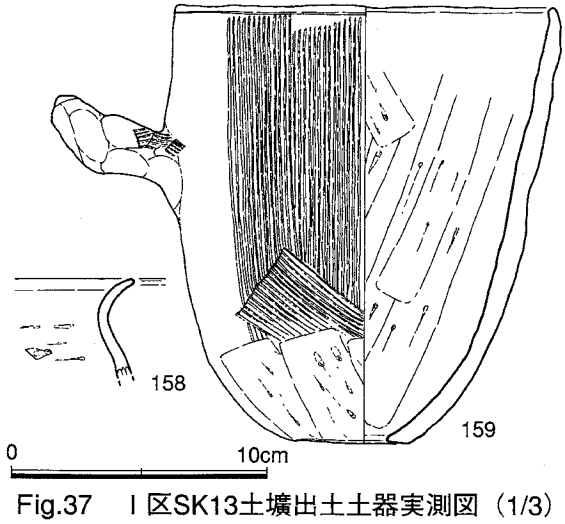


Fig.37　Ⅰ区SK13土壙出土土器実測図（1/3）

底部から体部にかけての破片で、底径5.6cmを測る。内面見込みの釉を輪状に掻き取る。高台畳付から内側を露胎とする。162は、Ⅴ類碗である。底部から体部にかけての破片で、1/4個体残存する。底径6.4cmを測り、高台部分から下を露胎とする。体部外面に１条の稜を持つ。163・164は、Ⅳ類碗である。底部が完存する破片で、低く厚い高台を削り出す。底径は5.6cmを測る。外面は露胎、内面には施釉される。164は、底部が完存する破片で、低く厚い高台を削り出す。底径は6.0cmを測る。外面は露胎、内面には施釉される。165は、龍泉窯系青磁碗である。底部が完存する破片で、1/6個体残存する。底径5.3cmを測り、外面には、

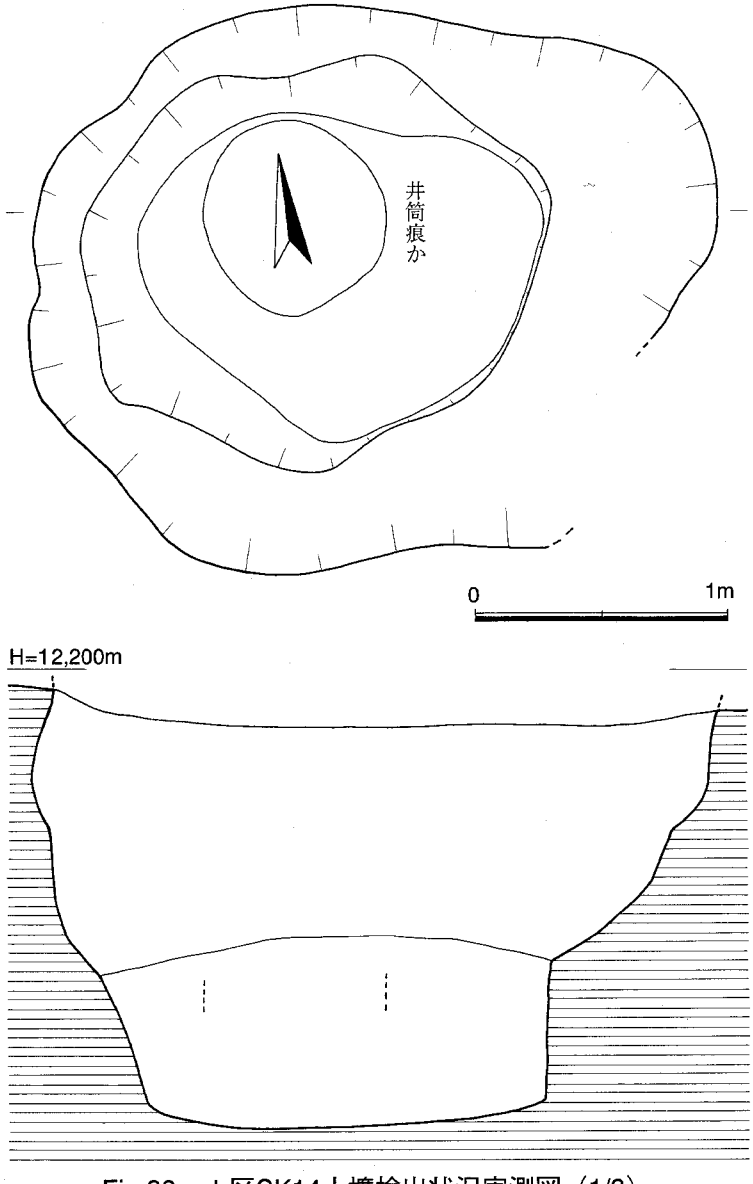


Fig.38　Ⅰ区SK14土壙検出状況実測図（1/3）

片彫りによる蓮弁文が施される。高台外面まで施釉される。底部は厚く作る。釉調は透明感ある暗緑色を呈し、焼成は良好である。166は、白磁Ⅴ類碗である。底部から体部にかけての破片で、復元で底径6.4cmを測る。高台は高く作り、外面上半まで施釉される。内面には１条の沈線を有し、櫛描きによる文様が観察できる。焼成はやや不良で、陶器状の胎土に焼き上がっている。167は、龍泉窯系青磁碗である。底部が完存する破片で、1/8個体残存する。底径は4.8cmを測り、高台外面まで施釉される。体部外面には片彫りにより鎬蓮弁文が施される。底部は厚く作る。釉調は透明感ある灰緑色を呈する。168は、白磁Ⅷ類碗である。底部から体部にかけての破片で、底部で3/4残存する。底径は復元で6.3cmを測る。高台部から下は露胎とする。内面に段を有し、見込みに輪状の釉剥ぎを施す。169は、白磁Ⅴ類碗である。底部から体部にかけての破片で、1/3個体残存する。高台は薄く高く作り、底径は5.8cmを測る。内面に段を有し、櫛書きによる単位の短い文様が施される。高台部以下は露胎とするが、一部釉がたれている部分もある。170は、陶器四耳壺である。口縁部から胴部にかけての破片で、1/6個体残存する。復元で、口径9.5cm・胴部径1.5cmを測る。口縁部内面、頸部との境界付近に砂目を有する。肩部に耳を貼り付け、胴部外面に１条の沈線を緩く蛇行させて施す。外面のみ施釉し、釉だれが観察できる。釉調は透明感ない暗オリーブグリーン色を呈す。171は、茶褐釉陶器鉢である。『博多出土貿易陶磁分類表』（森本朝子　1984）でＢ群とされているものであろう。底部から体部にかけての破片で、底部で1/3残存する。復元で底径は8.6cmを測る。外面は回転ヘラ削りで成形され、底部は削り込んで碁笥底状とする。内面は回転ナデで仕上げられる。胎土は精良で明灰色を呈し、焼成は良好である。

須恵器：172は、甕である。口縁部から頸部・肩部にかけての破片で、頸部で1/4残存する。口縁部はほとんど欠失する。口径は復元で10.9cmを測る。口縁部外面から頸部内面にかけて自然釉が付着する。内外両面とも回転ナデ調整で成形され、肩部内面には同心円状の当て具痕が観察される。胎土

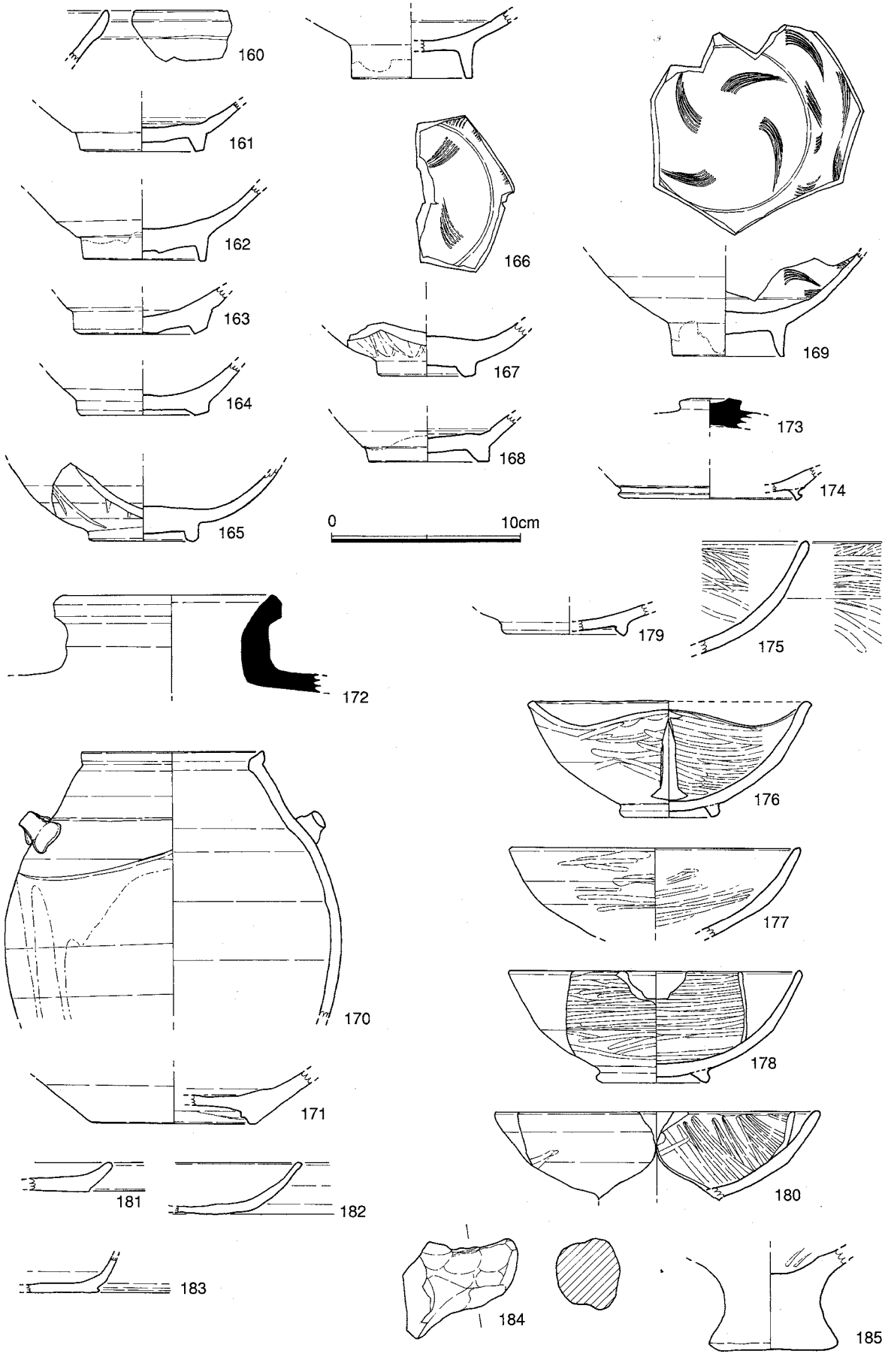


Fig.39　Ⅰ区SK14土壙出土土器実測図（1/3）

は精良堅緻で、焼成は良好である。173は、坏蓋である。天井部の小片で、つまみ部が完存する。つまみ上面は３ミリ程度くぼませて成形され、径は3.3cmを測る。内外両面とも回転ナデ調整される。胎土は精良堅緻で、焼成は良好である。174は、埦である。底部で1/8残存する破片で、復元で底径は9.2cmを測る。内外両面ともナデ調整され、低く外反する高台を貼り付ける。接合部は、断面円形の工具で強くなでつけた印象である。

瓦器：175・176・177・178・179は、埦である。175は、口縁部から体部にかけての小片で、1/8個体残存する。内外両面とも、横から斜め方向のヘラ磨きが施される。口縁付近は密に、底部付近は粗になる傾向である。胎土は精良堅緻で、焼成は良好である。176は、1/2個体残存し、全体を復元できた。焼けひずみにより口縁部がゆがんでいるが、口径14.4cm・器高6.1cm・底径4.8cmに復元できる。比較的厚い高台を貼り付け、内面は横方向の密なヘラ磨き、外面は横方向の疎なヘラ磨きを施す。胎土は精良堅緻で、焼成は良好である。177は、口縁部から体部にかけての破片で、1/6個体残存する。口径は復元で15.2cmを測る。内外両面とも横方向の疎なヘラ磨きを施す。178は、1/4個体残存し、全体を復元できた。口径15.3cm・器高5.9cm・底径5.6cmに復元できる。低く外反する高台を貼り付け、外面には１条の稜を有する。内外両面とも横方向のヘラ磨きが施され、内面は単一方向を往復するように密に、外面は稜より下は疎に施される。179は、底部から体部にかけての破片である。底径は5.7cmに復元できる。全体に磨滅が著しく細部の調整は不明。

土師器：180は、埦である。口縁部から体部にかけての破片で、口径は16.8cmに復元できる。内面には単一方向を往復するように密な、外面には横方向の疎なヘラ磨きが施される。181は、皿である。口縁部から底部にかけての小片で、1/6個体残存する。底部は回転糸切りである。182・183は、坏である。口縁部から底部にかけての小片で、底部は回転ヘラ切りである。184は、取手である。指押さえにより成形される。185は、弥生土器の甕。混入であろう。遺構の時期は13世紀初頭～前半。

SK15土壙（Fig.40）

Ⅰ区西半部、調査区北壁付近で検出した。SD14に切られるうえ、西半分は攪乱に切られる。短径84cmを測る。深さは、上部が削平されているため元の数値は不明であるが、4～8cm残存する。出土遺物は、須恵器・土師器・白磁・瓦器が出土しているが、細片のため図化し得なかった。

SK16土壙（Fig.41）

Ⅰ区西半部にて検出した。SD07の北側に平行する溝を切る。平面プランは隅丸長方形を呈し、断面形はやや袋状に底部が膨らむ。長辺1.36m・短辺78cm・深さ1.04mを測る。土層はシルト質土の水平堆積で、人為的な埋め戻し・滞水の痕跡は、現場では確認できなかった。出土遺物は、須恵器・土師器・陶磁器が出土したが、細片のため図示し得なかった。

SK17土壙（Fig.42）

１区西半部にて検出した。西端部が調査区西壁に接するため、調査区を拡張して調査を行った。平プランは不整な楕円形を呈し、長径2.2m・短径1.6m・深さ1.0mを測る。壁面は、下半が粗砂となり、東壁は、中程がオーバーハングしている。埋土の土層は、粗砂が中心で層序が乱れており、湧水していたものと思われる。

出土遺物（Fig.43・44）

陶磁器：188は、龍泉窯系青磁碗である。底部から体部にかけての破片で、1/6個体程度残存する。底径は、復元で5.0cmを測る。底部は厚く作り、低い高台をもうける。内面見込みと体部の境界部分に１条の沈線を有する。内面には、片彫りによる劃花文が施される。釉色は、透明感ある抹茶色を呈する。189・190は、白磁碗である。底部から体部にかけての破片で、1/8個体残存する。底径は、復

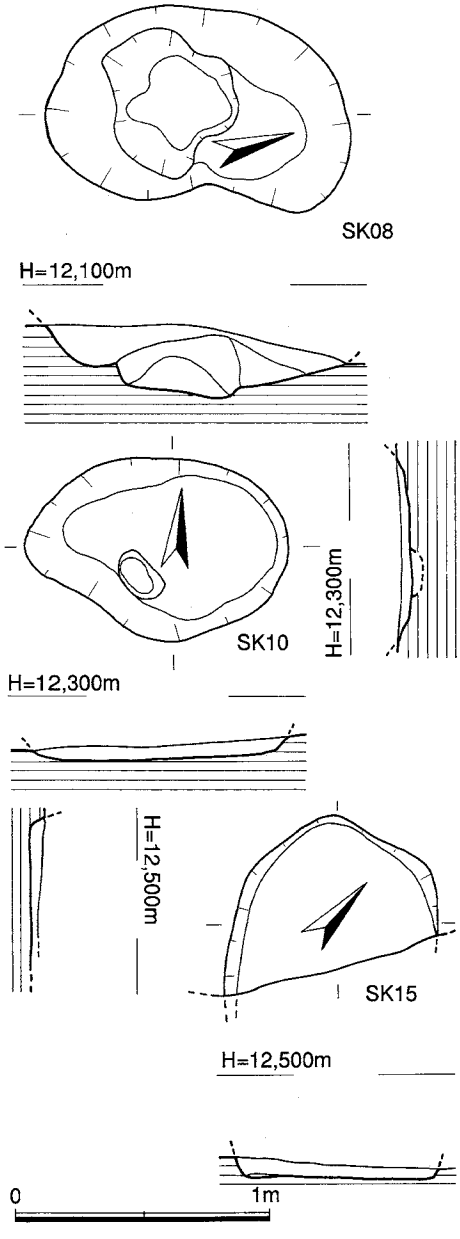


Fig.40　Ⅰ区SK08・09・15土壙検出状況実測図（1/30）

元で5.9cmを測る。低く厚い高台を削りだし、内面には１条の沈線を有する。釉調は、透明感ない明褐灰色を呈する。胎土は精良堅緻で、焼成は良好である。190は、Ⅳ類碗である。口縁部の小片で、幅1cmの玉縁を有する。釉色は透明感ある乳白色で、焼成は良好である。191は、陶器瓶である。口縁部から肩部にかけての小片で、口縁を境に外面のみ施釉する。口縁部を外面に向けやや肥厚させ、内面は回転ナデにより成形される。釉色は透明感ない暗緑色を呈する。胎土は精良堅緻で、焼成は良好である。192は、褐釉陶器小口瓶である。SK17土壙の底部から10cmほど浮き、横に寝かせた状態で出土した。完全な完形である。そのため内面に関しては推定で作図している。口径は外径で6.1cm・内部最小径3.4cm、器高21.4cm、胴部最大径14.6cm、底径8.6cmを測る。外面には、底部に至るまで施釉され、釉調は、透明感ない暗茶褐色を呈する。底部はやや上げ底状に作られる。回転ナデ調整で成形される。口縁部は外反し、端部は丸く収める。内面は露胎とし、胎は暗灰色を呈する。胎土は精良堅緻で、焼成は良好である。

瓦器・瓦質土器：200は、瓦質土器鉢である。口縁部の小片で、厚く作り内湾させる。内面には斜め方向のハケメを有する。内外両面とも燻しはわずかに残る程度である。胎土は精良であるが焼成はやや不良である。193・194は、瓦器椀である。底部から体部にかけての破片で、低く外反する高台を貼り付け、底径5.2cmを測る。内面はヘラミガキが施されるが、磨滅のため単位は不明である。胎土は精良で焼成は良好である。194は、底部から体部にかけての破片で、底部は完存する。低く外反する高台を貼り付け、底径5.8cmを測る。内外両面とも燻しがよく残り、内面見込みには幅広のヘラミガキが観察される。胎土は精良で焼成は良好である。

須恵器：195・196は、椀である。195は、底部の破片で、底径は復元で7.2cmを測る。低く外反する角張った高台を貼り付ける。内外両面とも回転ナデ調整で成形されるが、内面見込みは不定方向のナデ調整で仕上げられる。胎土は精良堅緻で、焼成は良好である。196は、底部から体部にかけての破片で、底径8.0cmを測る。低く角張った高台を貼り付ける。内外両面とも回転ナデ調整で成形されるが、内面見込みは不定方向のナデ調整で仕上げられる。胎土は精良堅緻で、焼成は良好である。197は、瓶である。胴部の破片で、胴部径は復元で9.8cmを測る。肩部付近に直径1.5cmの孔を外面から穿孔する。上半は成型時の回転ナデ調整が残り、下半には右回りの回転ヘラ削りが施される。胎土は精良堅緻で、焼成は良好である。

土師器：198は、椀である。底部の破片で、底径は復元で6.2cmを測る。高台は薄く内湾する。磨滅のため、内外両面とも調整は不明である。胎土は精良であるが、焼成はやや不良である。199は、鉢である。胴部の破片で、胴部最大径は14.6cmを測る。外面は剥落が激しく調整は不明であるが、内面に

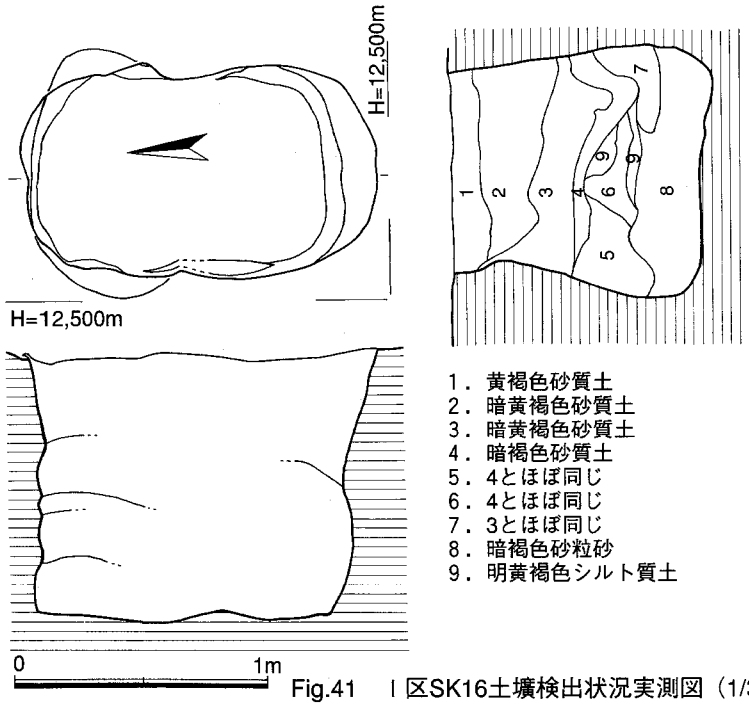


Fig.41　Ⅰ区SK16土壙検出状況実測図（1/30）

は指ナデ痕が明瞭に観察される。胎土は精良で焼成は良好であるが、２次焼成を受けた可能性がある。

鉄製品：186は、不明鉄製品である。板状を呈し緩く湾曲する。187は、鏃である。器長16.5cm・襠部幅1.4cmを測る。上層の包含層を除去しきれず、古墳時代の遺物が混ざってしまったが、時期は12世紀中葉から後半頃であろう。

SK18土壙（Fig.45）

Ⅰ区中央部にて検出した。平面プランは隅丸方形を呈し、南北長1.66m・東西長1.98m・深さ1.02mを測る。西側に南北80cm・幅20cmのテラスを有する。断面形は下半が袋状に膨らむ。埋土の土層は、黄褐色粘質土がレンズ状に堆積しており、人為的な埋め戻しは見られない。滞水・湧水の痕跡は現場では確認できなかった。

出土遺物（Fig.46）

陶磁器：201は、白磁Ⅴ類碗である。口縁部から体部にかけての小片で、口縁は鋭く外反し、上面は水平に削られる。釉調は透明感ある淡緑色を呈する。胎土は精良堅緻で、焼成は良好である。

瓦質土器：202は、鉢である。口縁部の小片で、外側に肥厚する。内面には横方向の細かいハケメが観察される。磨滅のため燻しはわずかに認められる程度である。胎土は精良で、焼成は良好である。

土師器：203は、皿である。1/4個体残存し、口径92cm・器高0.9cm・底径7.6cmに復元できた。底部には回転ヘラ切りの痕跡が観察でき、板状圧痕を有する。

このほか、細片のため図示し得なかったが、青磁・陶器が出土している。これらの遺物から、SK18土壙の時期は、12世紀中葉と思われる。

SK19土壙（Fig.47）

１区西半部、で検出した。SD09溝に切られる状況で検出したため西半は不明であり、出入りも多いが、おおよそ楕円形の平面プランを有すると思われる。南から東にかけてテラスを有し、長径4.6m・深さは、テラス部分で20cm・最深部で1.04mを測る。埋土は暗灰色土で、滞水・湧水の痕跡は現場では観察できなかった。

出土遺物（Fig.48）

陶磁器：204は、龍泉窯系青磁碗である。口縁から体部にかけての小片で、外面に片彫りによる蓮弁文を施す。釉調は透明感ないオリーブ緑色を呈する。胎土は精良堅緻で、焼成は良好である。205・206は、白磁碗である。205は、口縁から体部にかけての小片で、口縁は外反し、外面に釉垂れが観察される。206は、底部から体部にかけての破片で、高い高台を持ち底径6.5cmを測る。内面に櫛書きによる文様を有する。胎土は精良堅緻で、焼成は良好である。

瓦器：207・208は、埦である。207は、底部から体部にかけての破片で、底径は復元で7.5cmを測る。

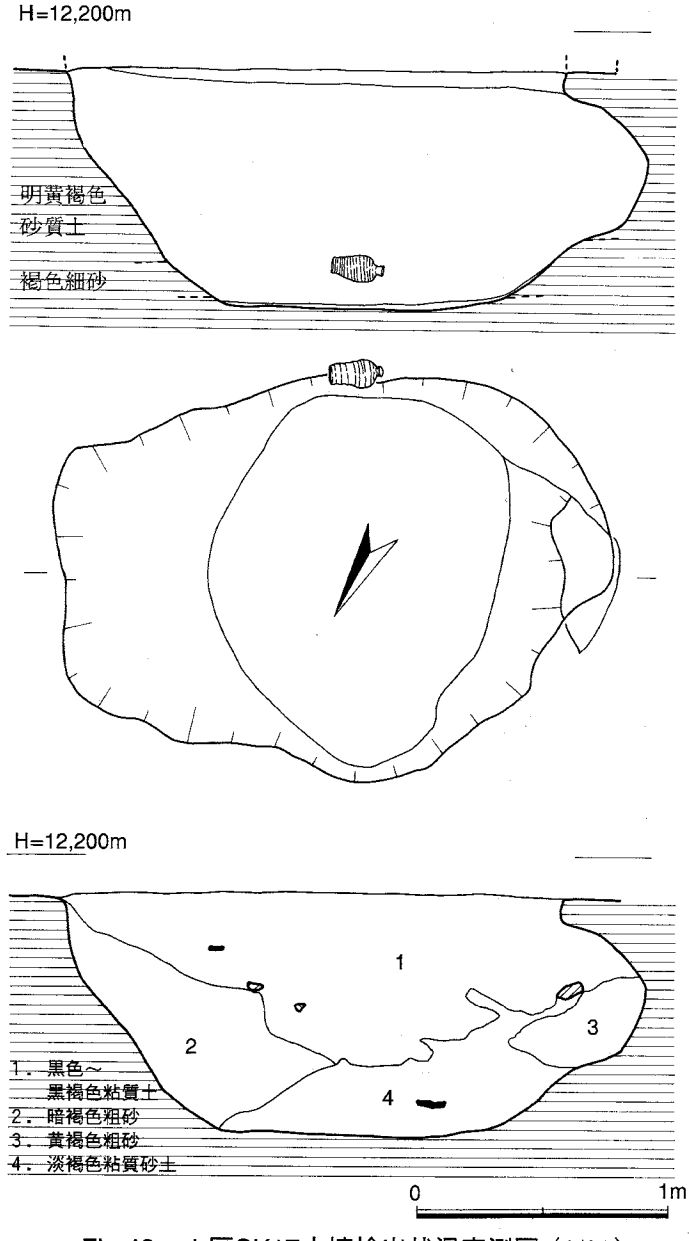


Fig.42　Ⅰ区SK17土壙検出状況実測図（1/30）

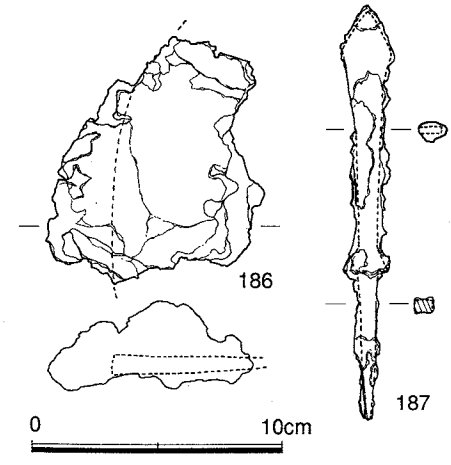


Fig.43　1区SK17土壙出土鉄製品実測図（1/3）

低く丸みを帯びた高台を貼り付け、内面は密に、外面は疎に横位のヘラミガキを施す。208は、底部の破片である。外反する高台を貼り付け、底径は復元で6.8cmを測る。内面にヘラミガキを施す。

土師器・黒色土器：209は、黒色土器B類椀である。底部の破片で、底径は5.8cmを測る。外底面に十字のヘラ記号らしき凹線が観察される。内面にヘラミガキを施す。210・211・212・213・214は、土師皿である。210は、1/6個体残存し、口径9.3cm・器高0.9cm・底径7.6cmに復元できた。口縁は外反する。211は、復元で底径6.8cmを測る。212は、復元口径9.4cm。213は、口径8.7cm。ヘラ切りで板状圧痕あり。214は、復元口径8.8cm。回転糸切りである。215は、椀である。外底面に十字のヘラ記号を持つ。216は、取手である。指押さえで成形される。これらの遺物から、時期は12世紀中葉と思われる。

SK20土壙（Fig.49）

Ⅰ区中央部北側にて検出した。上部をほとんど削平され、西及び南側の壁面の一部は、完全に失われている。現状で南北方向に長軸を向け、30°西偏する。小判形の平面プランを持ち、長径3.2m・短径1.6m、深さは現状で8cmを測る。

出土遺物（Fig.50）

土師器・黒色土器：217・218は、土師皿である。217は、ほぼ完形で出土し、口径10.3cm・器高1.1cm・底径8.1cmを測る。外底面には、回転ヘラ切り痕が観察される。他はナデ調整。胎土は精良であるが、焼成はやや不良である。218は、1/4個体残存し、口径11.2cm・器高1.0cm・底径8.7cmに復元できる。内外両面ともナデ調整。胎土は精良で、焼成は良好である。219・220は、坏である。219は、

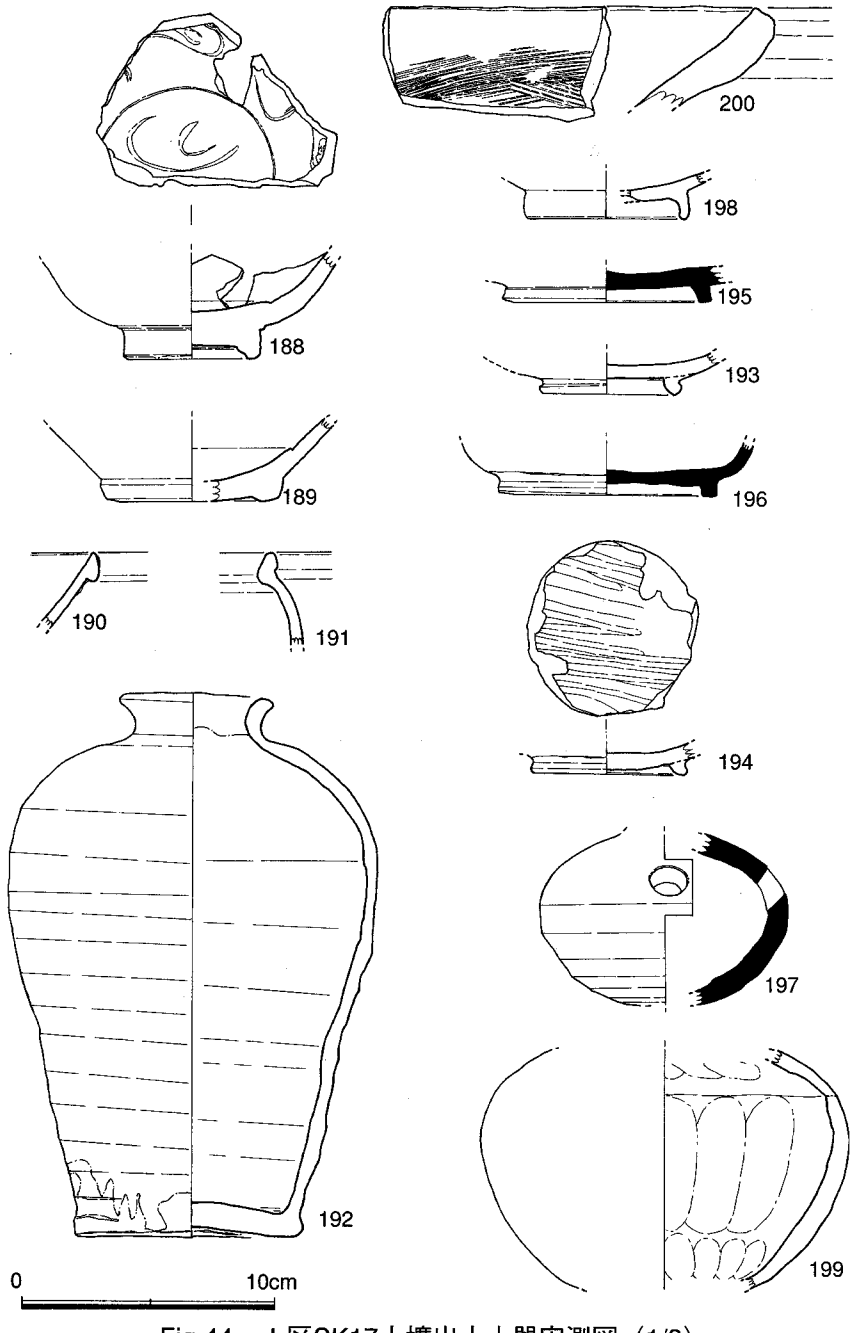


Fig.44　Ⅰ区SK17土壙出土土器実測図（1/3）

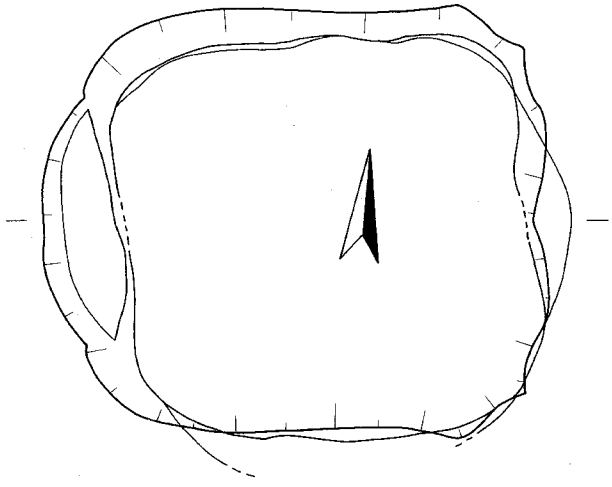
口縁部から体部にかけての破片で、1/6個体残存し、口径17.2cmに復元できる。表面の磨滅が著しく調整は不明。胎土は精良で焼成は良好である。220は、1/2個体残存し、口縁付近に一部煤の付着が観察される。口径15.6cm・器高3.1cmに復元できる。体部内面にヘラ状工具で縦にへこみを作る部分があり、その付近に煤が付着していることから、ここに芯をおいていたものと思われる。灯明皿として特製された個体か。221・222は、黒色土器A類埦である。221は、4/5個体残存し、口径15.1cm・器高5.7cm・底径6.6cmを測る。口縁はわずかに外反し、内面に炭素が沈着する。内外両面ともナデ調整。やや外側に膨らむ高台を貼り付ける。胎土は精良だが、焼成はやや不良である。222は、4/5個体残存し、口径14.8cm・器高5.1cm・底径5.9cmを測る。やや外反する口縁を有し、内面は疎なヘラミガキ、外面には2条の稜を有する。223は、黒色土器B類埦である。口径14.6cmを測る。遺構の時期は11世紀前半頃であろう。

SK21土壙（Fig.51）

1区中央部南側にて検出した。東西方向に長軸を向ける不整な楕円形の平面プランを有する。長径1.1m・短径86cm・深さ74cmを測る。土層は、水平に堆積し、人為的な埋め戻しは、現場では確認できなかった。遺物は出土しなかった。

SK22土壙（Fig.51）

Ⅰ区東半部南側にて検出した。残土反転の境界付近で検出したため、東半部は調査できなかった。東西方向に長軸を向ける不整な長方形の平面プランを有すると思われ、短辺98cm・深さ24cmを測る。



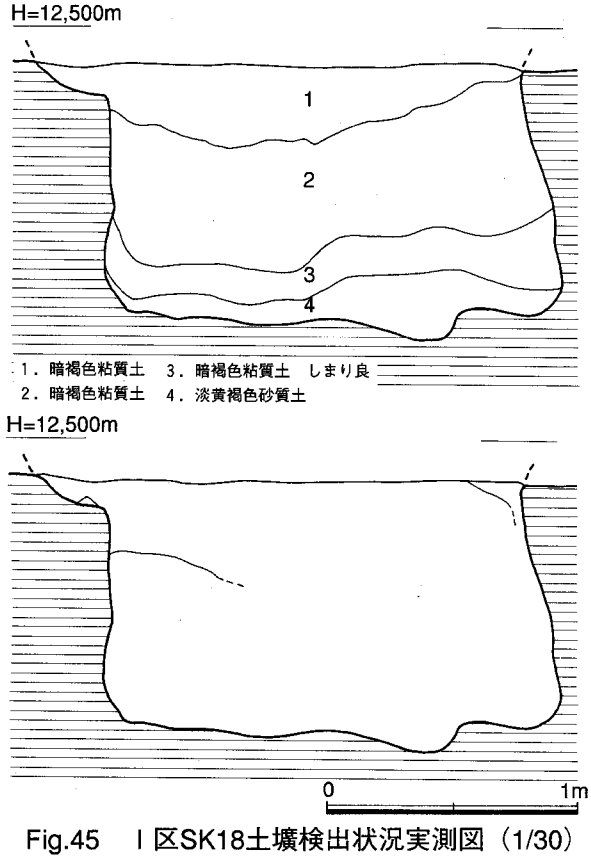


Fig.45　Ⅰ区SK18土壙検出状況実測図（1/30）

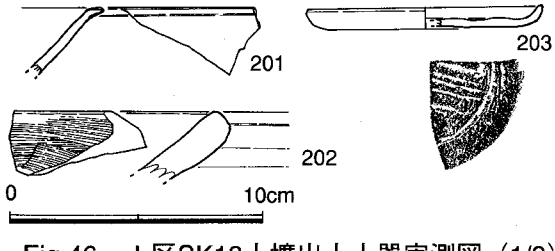


Fig.46　Ⅰ区SK18土壙出土土器実測図（1/3）

断面形は逆台形を呈すると思われる。埋土は、暗灰色土である。遺物は、土師器が出土しているが、細片のため時期は不明。

SK23土壙（Fig.51）

Ⅰ区東半部南側にて検出した。長軸を南北に向け、12°西偏する。不整な楕円形の平面プランを呈し、長径1.24m・短径は最大径で68cm・深さは、削平のため上部を失っているが、12cm残存する。底部は出入りが大きく、南側がやや深くなる。断面形は、逆台形を呈する。

出土遺物（Fig.52）

すべて土師器である。224は、坏である。1/4個体残存し、口径12.8cm・器高2.4cm・底径5.4cmに復元できる。底部には回転ヘラ切り痕が観察され、板状圧痕を有する。それ以外の部分は、回転ナデにより調整される。胎土は精良で雲母片を含み、焼成は良好である。225・226は、埦である。225は、底部が完存する破片で、底径6.4cmを測り、やや外側に膨らむ高台を貼り付ける。内面はヘラミガキが施されていると思われるが、磨滅のため不明瞭。外面は回転ナデ調整。胎土は精良で雲母片を含み、焼成は良好である。226は、1/2個体残存する破片で、口径14.8cm・器高5.7cm・底径6.4cmに復元できる。内面には疎なヘラミガキが施される。胎土は精良で焼成は良好である。12世紀前半頃か。

SK24土壙（Fig.51）

Ⅰ区東半部南側にて検出した。長軸を南北に向け、25°西偏する。不整な円形の平面プランを呈し、長径1.2m・短径1.0m・深さ60cmを測る。南北の２方にテラスを有する。遺物は、土師器が出土しているが、細片のため図示できなかった。

SK25土壙（Fig.51）

Ⅰ区東半部南側にて検出した。長軸を南北に向け、22°西偏する。不整な楕円形の平面プランを呈し、長径1.06m・短径74cm・深さ20cmを測る。北側及び西側にテラスを有する。西側テラス部分に一部オーバーハングする部分があり、底面はやや不整な隅

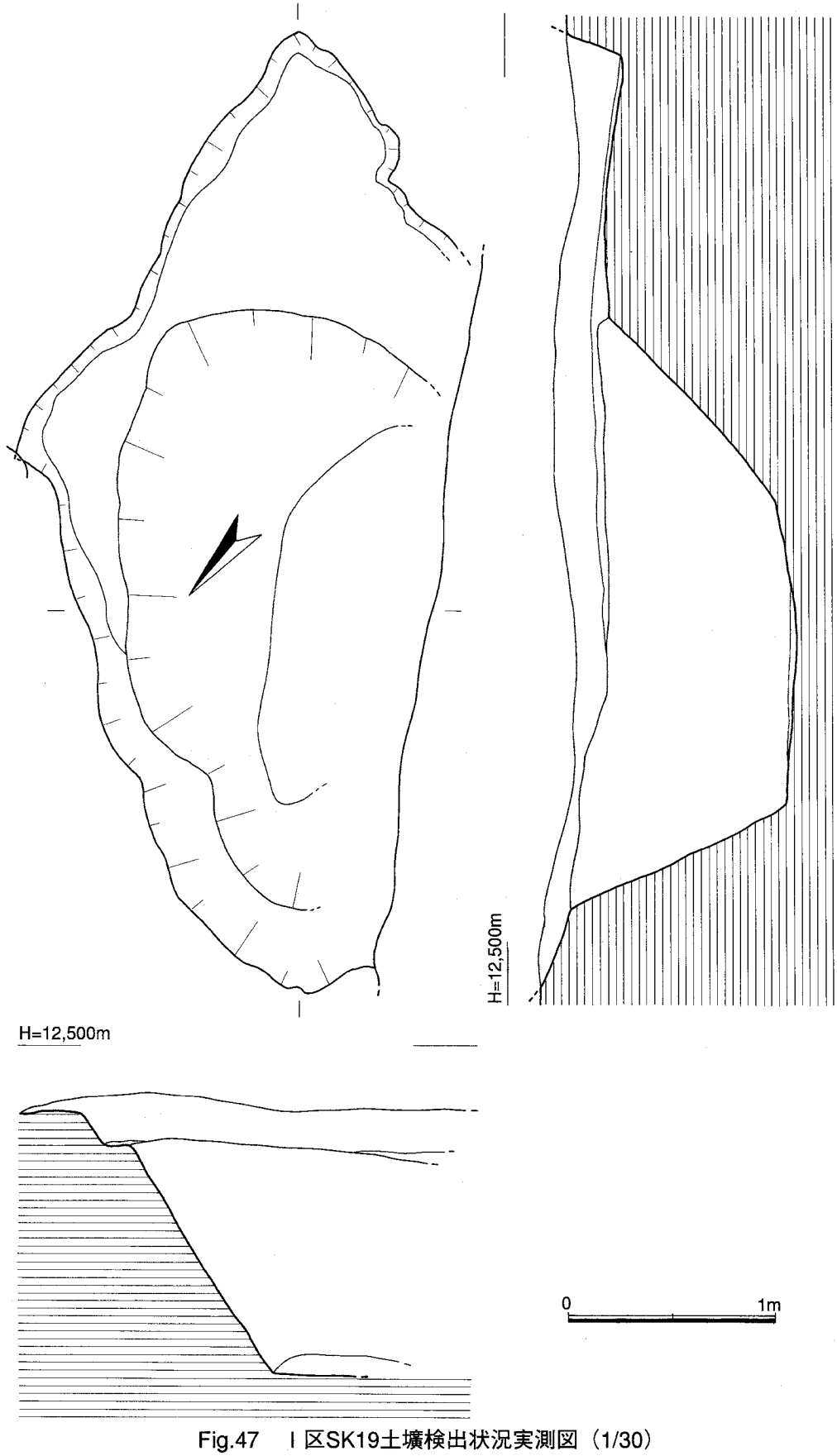


Fig.47　Ⅰ区SK19土壙検出状況実測図（1/30）

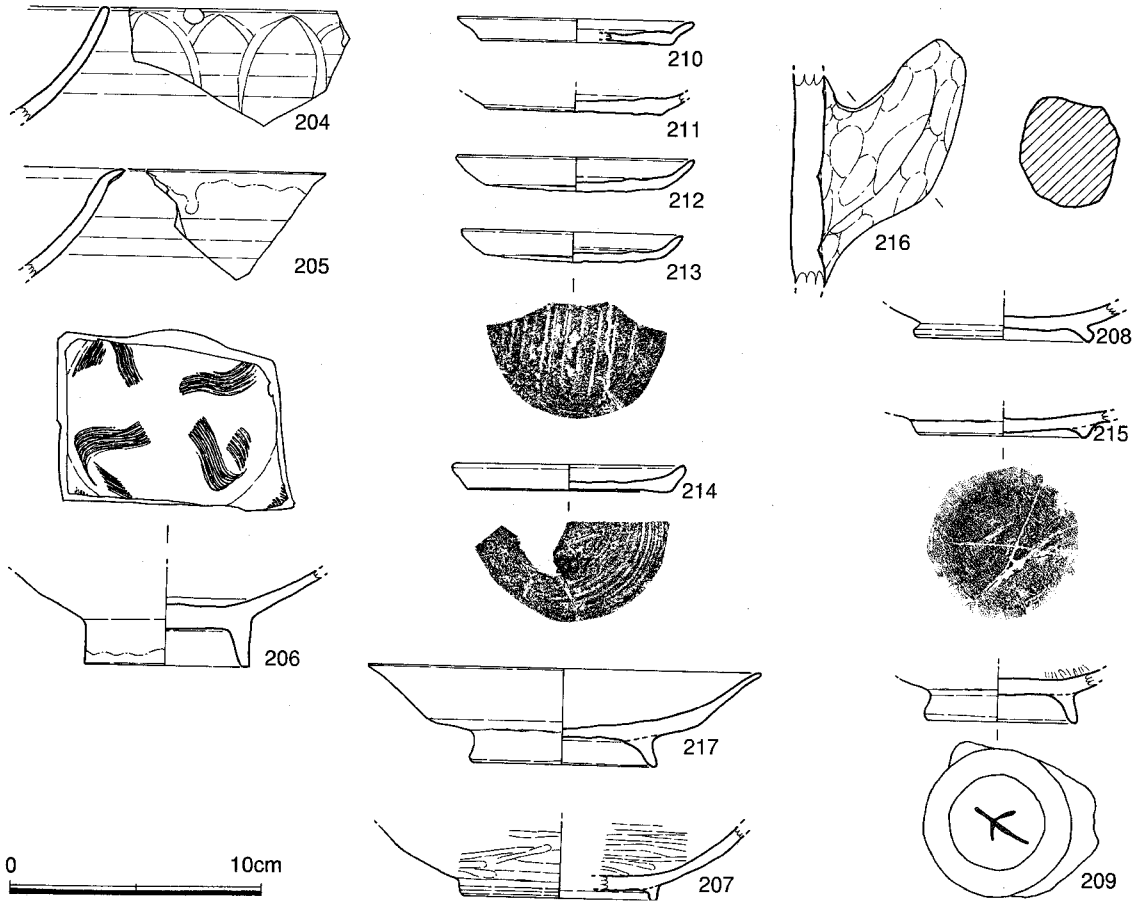


Fig.48　Ⅰ区SK19土壙出土土器実測図（1/3）

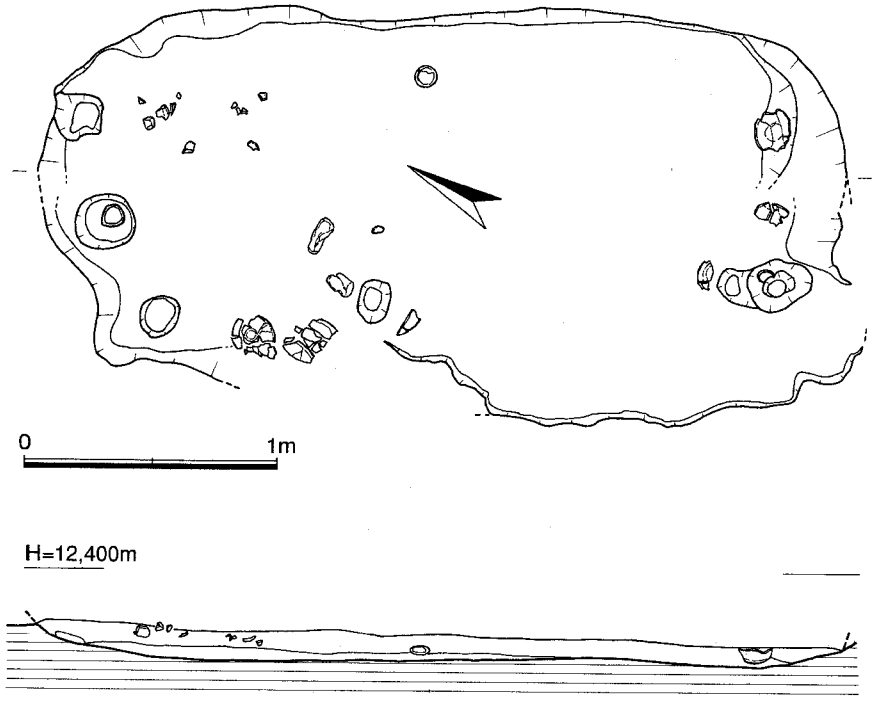


Fig.49　Ⅰ区SK20土壙検出状況実測図（1/30）

丸方形を呈し、凹凸は少なく、平坦である。埋土は、暗褐色シルト質土である。詳しい堆積状況は、現場では明らかにしえなかった。

遺物は、須恵器・土師器が出土したが、細片のため図化し得なかった。

SK26土壙（Fig.51）

Ⅰ区東半部、調査区東壁近くで検出した。SD19を切る。長軸を東西に向け、19°南に偏する。やや不整な楕円形の平面プランを呈し、長径1.12m・短径80cm・深さ30～40cmを測り、西側が深くなる。底面は、不

整な楕円形を呈し、西側が広いダルマ形となる。断面形は、隅丸台形を呈する。埋土は、暗灰色シルト質土の単層である。

遺物は、須恵器・土師器・黒色土器片が出土したが、細片のため図化し得なかった。

SK27土壙（Fig.51）

Ⅰ区東半部中央、SD16とSD19に挟まれた部分で検出した。長軸を北西―南東に向け、やや不整な楕円形の平面プランを呈する。長径1.12m・短径50cm・深さは、削平のため本来の数値ではないが、12cmを測る。南側隅部にテラスを有する。底面は、やや不整な楕円形を呈する。

遺物は、須恵器・土師器・瓦器・白磁・陶器が出土したが、いずれも細片のため図示し得なかった。

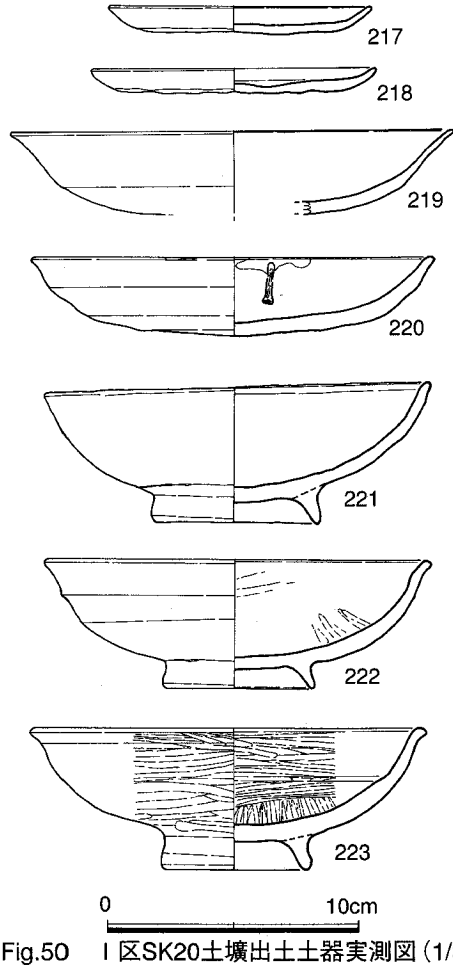


Fig.50　Ⅰ区SK20土壙出土土器実測図（1/3）

④　炉跡（Fig.53・PL.4）

SX01（Fig.53）

Ⅰ区東半部、調査区南壁に接して検出した。このため遺構の南側は、調査区外となり調査できなかった。埋土は地山と同じ黄褐色シルトであったが、炭化物片の分布から平面プランを推定した。長径2.2m・短径1.7m以上・深さ46cmを測る。すり鉢状にくぼんだ底部に、不整円形の窪みを掘り込む。この部分から、底部より浮いた状態で木質が出土した。遺物は、縄文土器の細片が１点出土した。

⑤　柱穴（Fig.8）

柱穴から出土した土器には細片が多いが、図化できた以下の遺物を示す。完形品が出土する柱穴もあり、その柱穴に関しては廃絶時の祭祀的行為が想定できよう。

出土土器（Fig.54）

陶磁器：227は、SP038出土の白磁Ⅴ類碗である。底部から体部にかけての破片で、底径は、復元で6.4cmを測る。釉調は透明感ある淡緑色を呈する。胎土は精良堅緻で、焼成は良好である。

瓦器：229は、埦である。口縁から底部まで残存しており、1/5個体残存する。口径14.5cm・器高5.8cm・底径6.0cmに復元できた。底部には低い高台が貼り付けられる。胎土は精良である。SP140出土。

土師器：228は、SP252から出土した坏である。ほぼ完形で出土した。口径14.5cm・器高3.2cm・底径10.0cmを測る。底部には回転糸切り痕が残り、板状圧痕が観察される。

⑥　遺構検出面出土の遺物（Fig.57）

陶磁器：230・231は、白磁Ⅵ類皿である。230は、2/3個体残存する口縁から底部にかけての破片で、口径10.8cm・器高2.5cm・底径3.8cmに復元できた。231は、3/4個体残存し、口径10.4cm・器高2.8cm

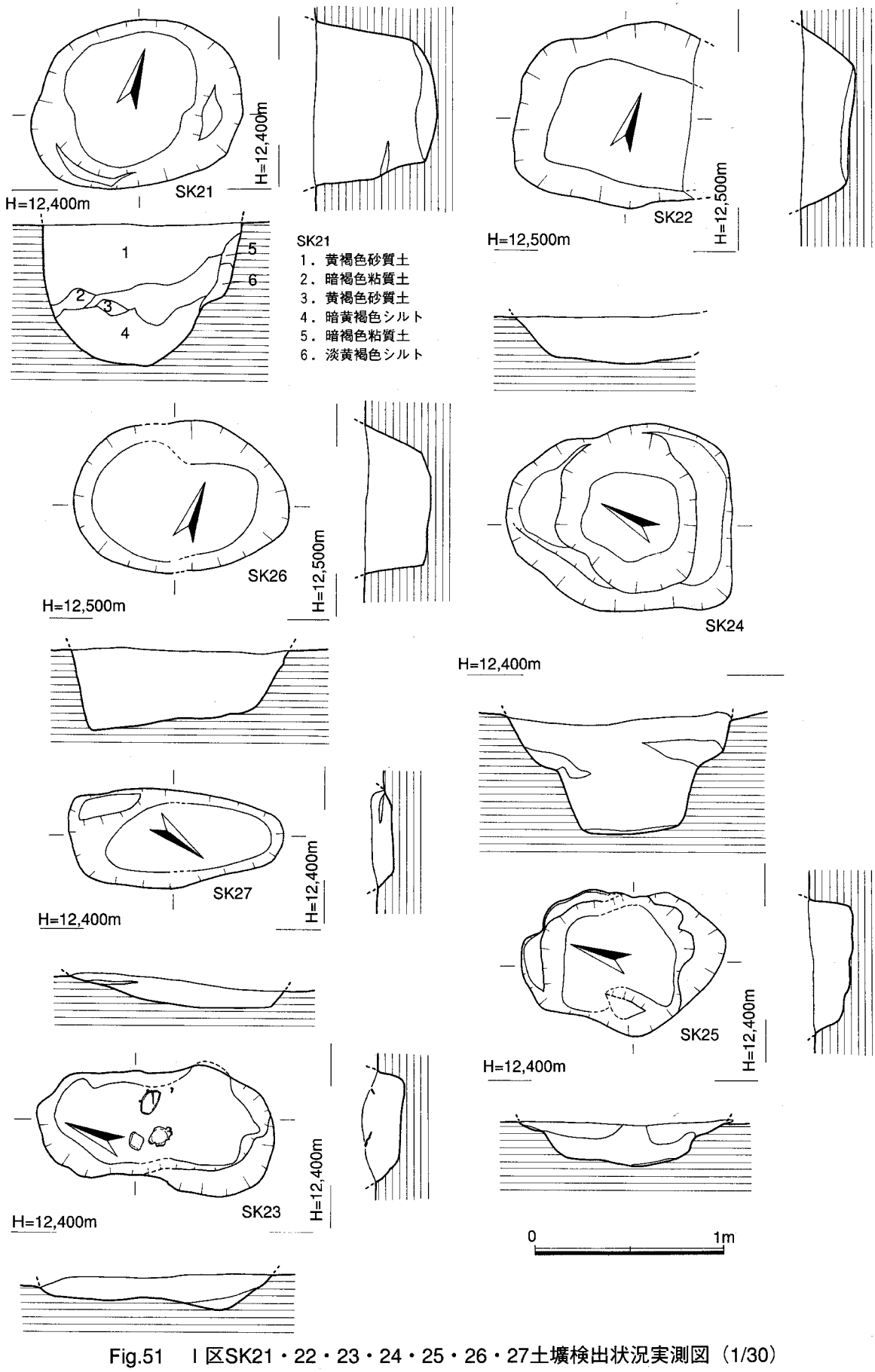


Fig.51　Ⅰ区SK21・22・23・24・25・26・27土壙検出状況実測図（1/30）

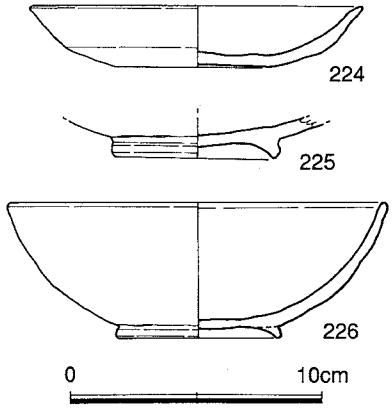


Fig.52　Ⅰ区SK23土壙出土土器実測図（1/3）

・底径3.6cmに復元できた。やや内傾する口縁を有する。230・231とも、内面に段を有し、底部はやや上げ底状に内側にくり込んでいる。釉調は透明感ある淡黄緑色を呈する。232は、白磁Ⅳ類碗である。口縁から底部にかけての破片で、1/6個体残存する。口径17.6cm・器高5.3cm・底径5.8cmに復元できた。口縁部外面に小さな玉縁を作り出す。体部外面まで施釉され、高台部は露胎とする。釉調は透明感ある黄緑色を呈する。

瓦器：241は、皿である。口縁部から底部にかけての破片で、口径9.0cmに復元できる。回転ナデ調整で成形され、ヘラミガキは観察されない。底部には回転ヘラ切り痕が残り、板状圧痕が観察される。全体に瓦器というよりはむしろ土師皿に近い作りである。

須恵器：233・234は、坏蓋である。233は、口縁部を欠失する破片で、2/3個体残存する。体部外面に1条の稜を有し、天井部は左回りの回転ヘラ削りを施す。口縁部は内面に段を有すると思われる。234は、口縁から体部にかけての破片で、1/6個体残存する。口径13.4cmに復元でき、天井部は右回りの回転ヘラ削りを施す。235・236・237は、杯身である。235は、口縁から体部にかけての小片で、胎土は精良堅緻、焼成は良好である。236は、3/4個体残存する破片で、口径10.2cm・器高3.8cmを測る。外底面は右回りの回転ヘラ削り、内底面は不定方向ナデ、それ以外の部分は回転ナデ調整で成形される。胎土は精良堅緻、焼成は良好である。237は、底部の破片で、底径は復元で8.6cmを測る。外側に踏ん張る高台を貼り付け、体部は外面に稜をつけて強く屈曲させる。

土師器：238・239・240は、皿である。238の底部には、回転糸切り痕が残る。239の底部には回転ヘラ切り痕が残り、板状圧痕が観察される。240は、4/5個体残存し、口径10.0cm・器高1.2cmを測る。底部には板状圧痕が残る。242は、手捏ねのミニチュア土器である。口縁部を欠失し、土師質である。

243は、土錘である。器長3.8cmを測る。胎土は精良で、雲母片を少量含む。244は、埦である。底部の破片で、底径6.8cmに復元できた。内面には炭化物が付着する。

245は、弥生土器である。甕の底部で、底径3.6cmを測る。内外両面ともハケメが見られ、底部はやや上げ底状に作る。胎土は精良で、焼成は良好である。

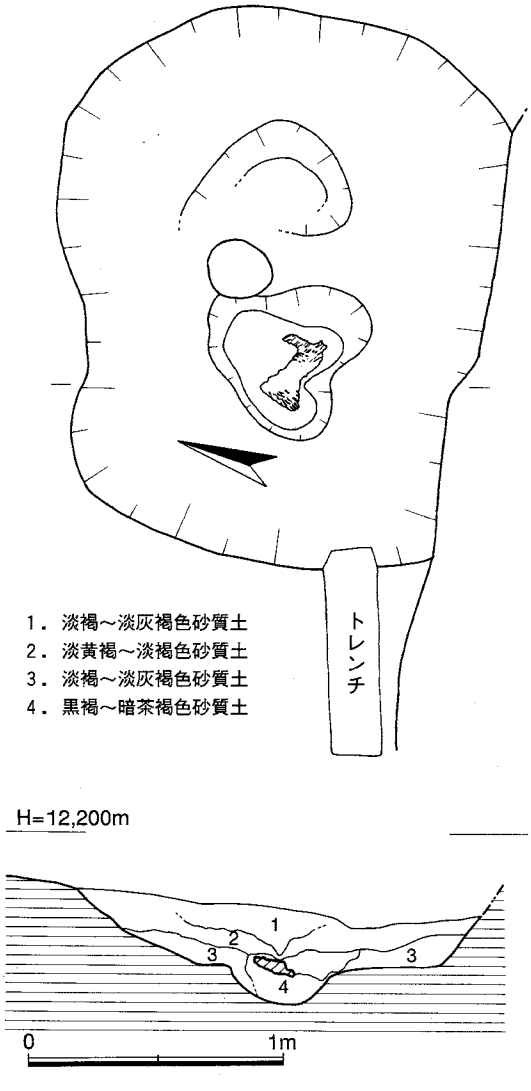


Fig.53　Ⅰ区SX01炉跡検出状況実測図（1/30）

⑦Ⅰ区出土の石製品（Fig.54・56・58）

246は、滑石製小玉である。1/3を欠失し、片面から穿孔する。外径6mm・孔径2mm・器厚2mmを測る。247は、滑石製権である。SP216より出土。器高5.3cm・最大径4.0cm・底径3.2cmを測る。頂部にドーム状の鈕が削り出され、水平方向及び垂直方向に穿孔される。一部にイレギュラーな削り痕が見られる。制作時の重量調整であろうか。248は、滑石製有孔円盤である。1/5程度を欠失する。外径2.6cm・孔径2mm・器厚4mmを測る。表裏両面に擦痕が観察される。249は、扁平片刃石斧である。器長5.8cm・刃部幅3.2cmを測る。片側から刃を研ぎ出す。250は、蛇紋岩製太形蛤刃石斧である。基部を欠失する。最大幅6.2cmを測る。表裏両面に擦痕を有する。251は、

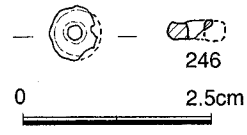


Fig.54　Ⅰ区出土玉類実測図（1/1）

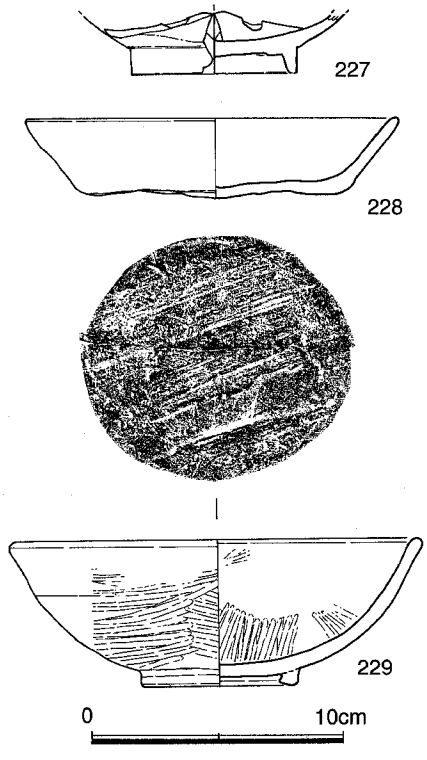


Fig.55　Ⅰ区SP柱穴出土土器実測図（1/3）

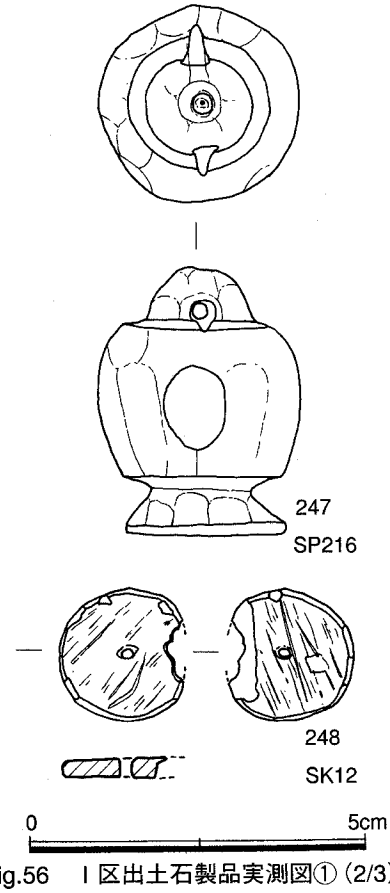


Fig.56　Ⅰ区出土石製品実測図①（2/3）

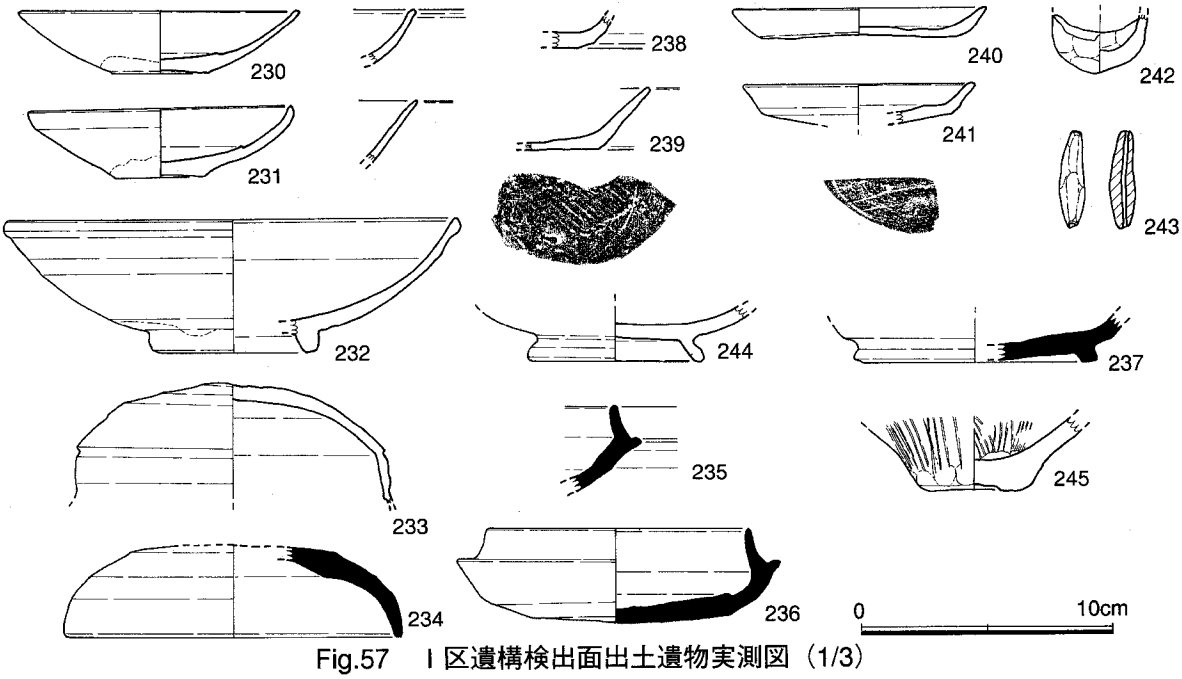


Fig.57　Ⅰ区遺構検出面出土遺物実測図（1/3）

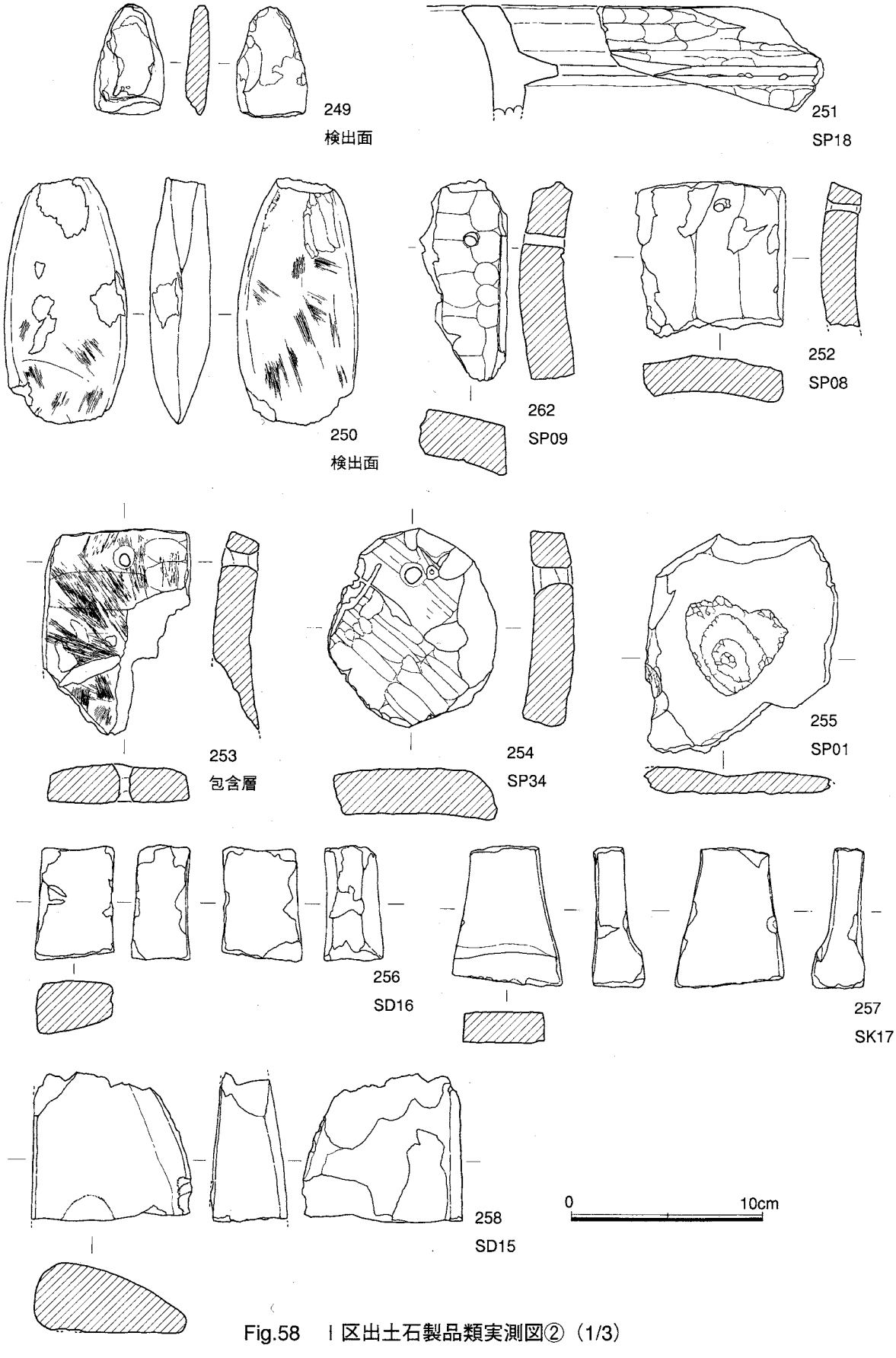


Fig.58　Ⅰ区出土石製品類実測図②（1/3）

滑石製石鍋である。口縁部の小片である。252・253・254・262は、滑石製石鍋の転用品である。破片の端部に穿孔し、「温石」としての用途が考えられる。255は、凹石である。打痕が観察される部分のみ出土した。256・257・258は、砥石である。すべて砂岩製で、欠損する部分をのぞきすべての面を使用している。259は、黒曜石製石槍である。縦長剥片を用い、細かい剥離を加えて両側に刃部を作り出す。器長8.2cm・器幅3.2cm・器厚9mmを測る。260は、黒曜石製縦長剥片である。全長6.2cmを測る。

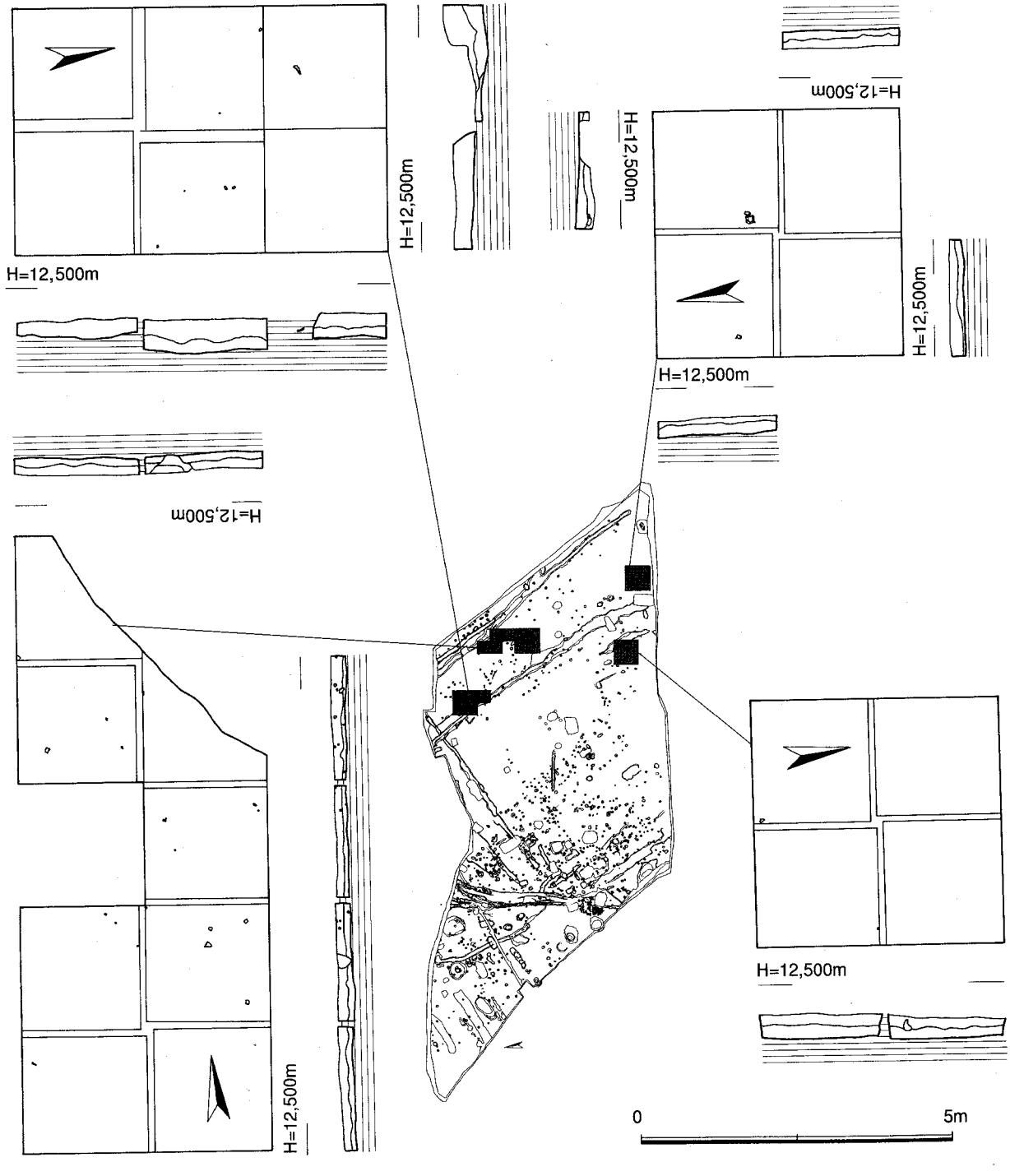


Fig.59　Ⅰ区グリッド調査状況実測図（1/100）

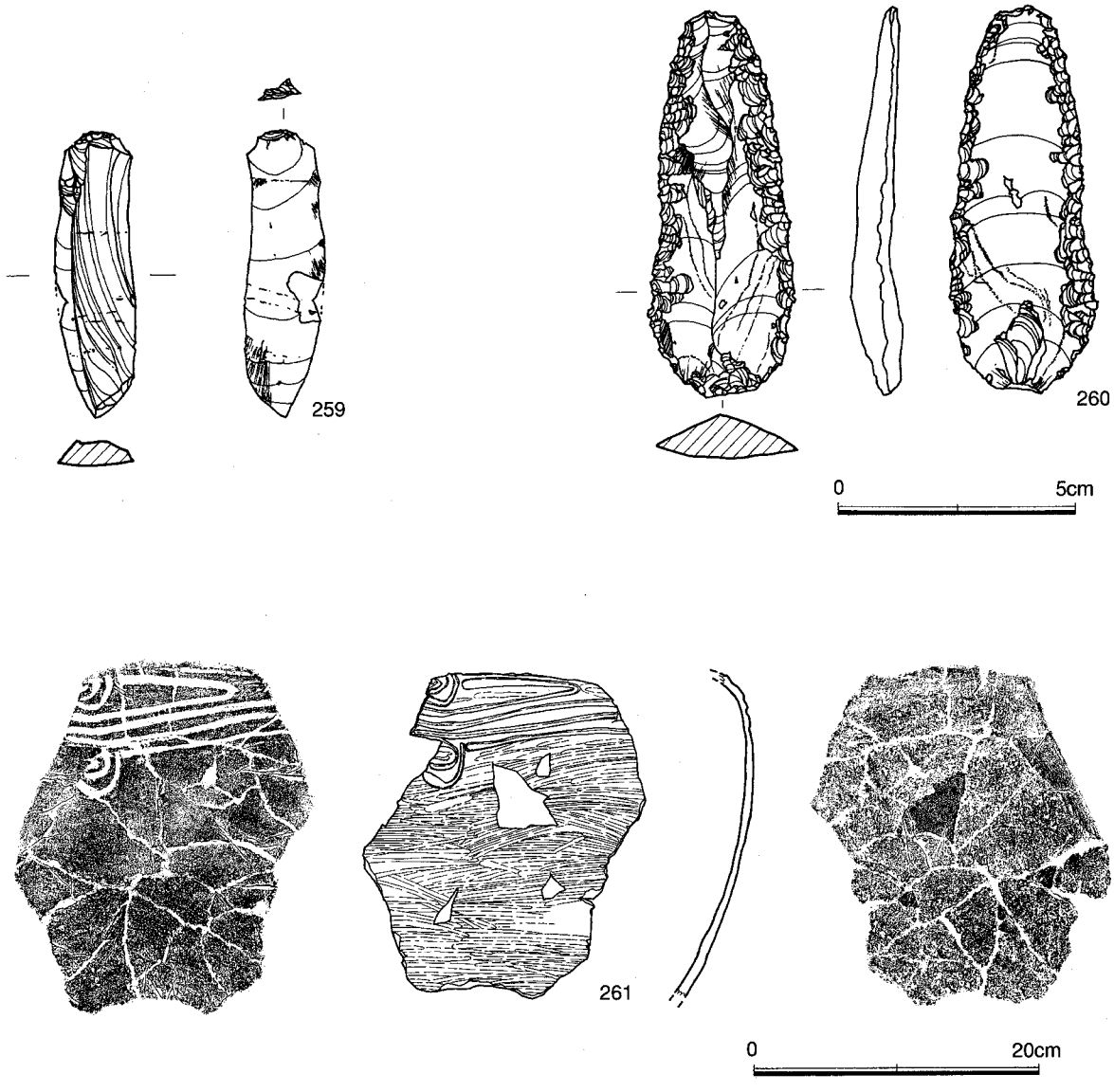


Fig.60　第Ⅰ区出土打製石器・縄文土器実測図（2/3・1/5）

⑧Ⅰ区出土の縄文土器（Fig.60・PL.10）

261は、鐘ヶ崎式と思われる深鉢である。肩部から胴部にかけての破片で、胴部で1/6程度の破片である。残存部分で22.5cmを測り、大形の個体の一部であろう。SD08溝の壁面に一部が露出していた。肩部外面に凹線で渦状文が施され、他の部位には横位の密なヘラミガキが施される。内面はナデ調整にて仕上げられる。胎土は暗褐色を呈し、細砂粒が全体に多く混入する。焼成は良好である。

⑨　小結

Ⅰ区では、中世段階においては11世紀前半から遺構が見られるが、溝の遺物から、本格的な集落は、12世紀後半から13世紀前半まで営まれ、その後一旦活動の痕跡が途絶えた後、14世紀末から15世紀初頭に再度集落の痕跡が認められる。また、古墳時代末の溝が検出され、当該期の集落が付近に存在する可能性がある。それ以前の遺構としては、縄文時代にさかのぼると思われる炉跡が検出され、当該期の遺構は、日佐地域では稀少であり注目される。

3．第Ⅱ区の調査

調査概要

本調査区では、掘立柱建物４棟・溝２条・土壙４基を検出した。遺構面は黄褐色シルト質土で、遺構の埋土は、黒褐色～暗灰色を呈するシルト質土であった。Ⅰ区同様遺構面は削平を受けていると思われるが、遺構の残存状況は比較的良好である。残土が搬出できなかったこともあり、調査区内で残土反転を行った。掘立柱建物・溝・土壙・柱穴の順で記述する。

①掘立柱建物（Fig.61～66・PL.5・6）

SB01建物（Fig.61）

調査区西半にて検出した。西側の柱穴列は、調査区西壁に接し、SB02に切られる。１間×２間の南北棟で、34°西偏する。柱間は、東西方向で2.3m、南北方向で1.9～2.1mを測る。柱穴の直径は、20cmを測り、深さは、15～40cmを測る。遺物は、柱穴の埋土から土師器が出土しているが、細片のため図示し得なかった。

SB02建物（Fig.63）

調査区西半にて検出した。２間×３間の総柱建物である。南北棟で、29°西偏する。SB01を切る。柱間に束柱が残る部分があり、残存状況は良好である。柱間は、東西方向で2.0～2.2m、南北方向で1.6～2.2mを測る。柱穴は円形または楕円形を呈し、直径は、18～40cmを測る。束柱の方がやや小径となる傾向を示す。深さは、15～40cmを測る。これも束柱の方が浅くなる傾向を示す。柱穴の埋土は、黒褐色のシルト質土で、焼土塊（焼けた壁土の可能性も考えられる）を含む。出土遺物は、Fig.64の265・Fig.76の313に示す。土師器坏である。底部は回転ヘラ切り。12世紀前半頃。

SB03建物（Fig.65）

調査区西半にて検出した。２間×５間の側柱建物である。南北棟で30°西偏する。北と東に庇を有する。一部束柱状に柱穴列を検出した。柱間は、柱痕の間隔で1.8～2.1mを測る。母屋と庇の間隔は、1.0mを測る。柱穴は、直径20～40cm、深さ10～40cmを測る。束柱の方が小径で浅くなる傾向を示す。埋土は、灰褐色シルト質土である。出土遺物は、Fig.64の263・Fig.76の312に示す。263は、土師器椀の口縁部である。12世紀前半。

SB04建物（Fig.66）

調査区中央部南側にて検出した。２間×３間の側柱建物である。南北棟であるが、方位は他の３棟と異なり、20°西偏する。柱間に束柱が残る部分があり、残存状況は良好である。柱間

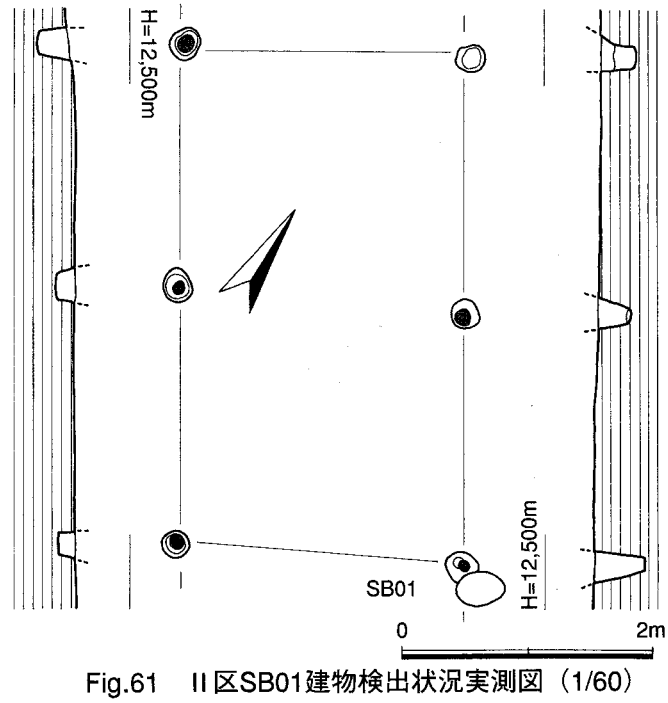


Fig.61　Ⅱ区SB01建物検出状況実測図（1/60）

Fig.62　II区全体図（1/250）

は、2.0～2.2mを測る。柱穴は、円形または不整な楕円形を呈し、直径20～40cmを測る。深さは、10～35cmを測る。SB04においても、束柱の方が小径で浅くなる傾向を示す。柱穴の埋土は、灰褐色シルト質土である。出土遺物は、Fig.64の264に示す。土師器椀の口縁部である。

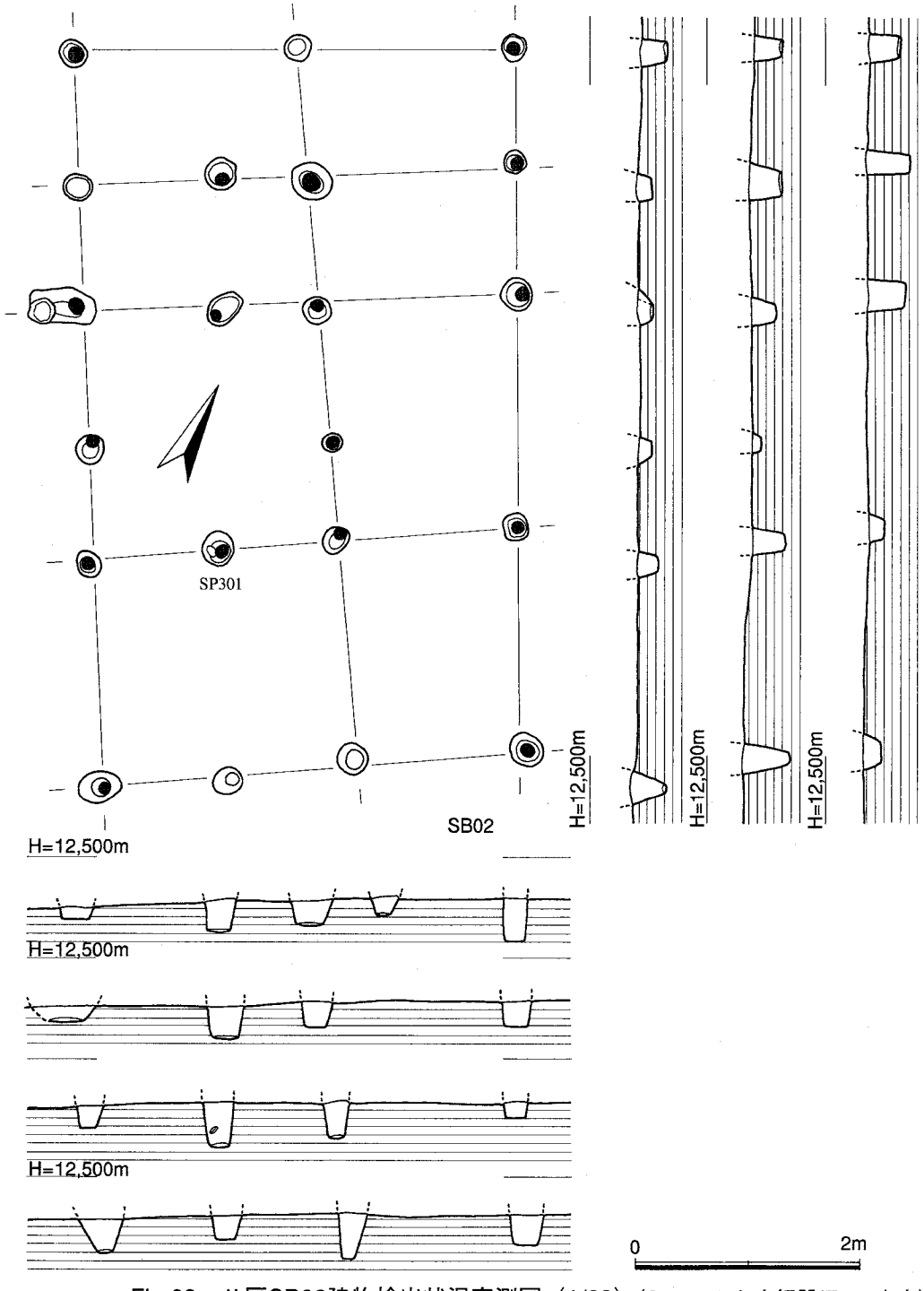


Fig.63　II区SB02建物検出状況実測図（1/60）（SP301から土師器坏313出土）

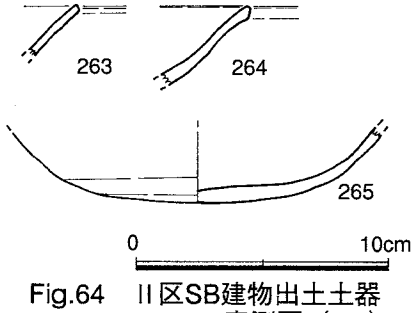


Fig.64　II区SB建物出土土器実測図（1/3）

②　溝（Fig.62・PL.5・7）

SD20溝（Fig.62）

II区中央部にて検出した。東西方向に掘削され、方位は15°北に偏する。西端は調査区内で立ち上がるが、遺構面全体が削平を受けているため、本来はさらに西方に伸びるものと思われる。2条あるが先後関係については、現場では確認し得なかった。出

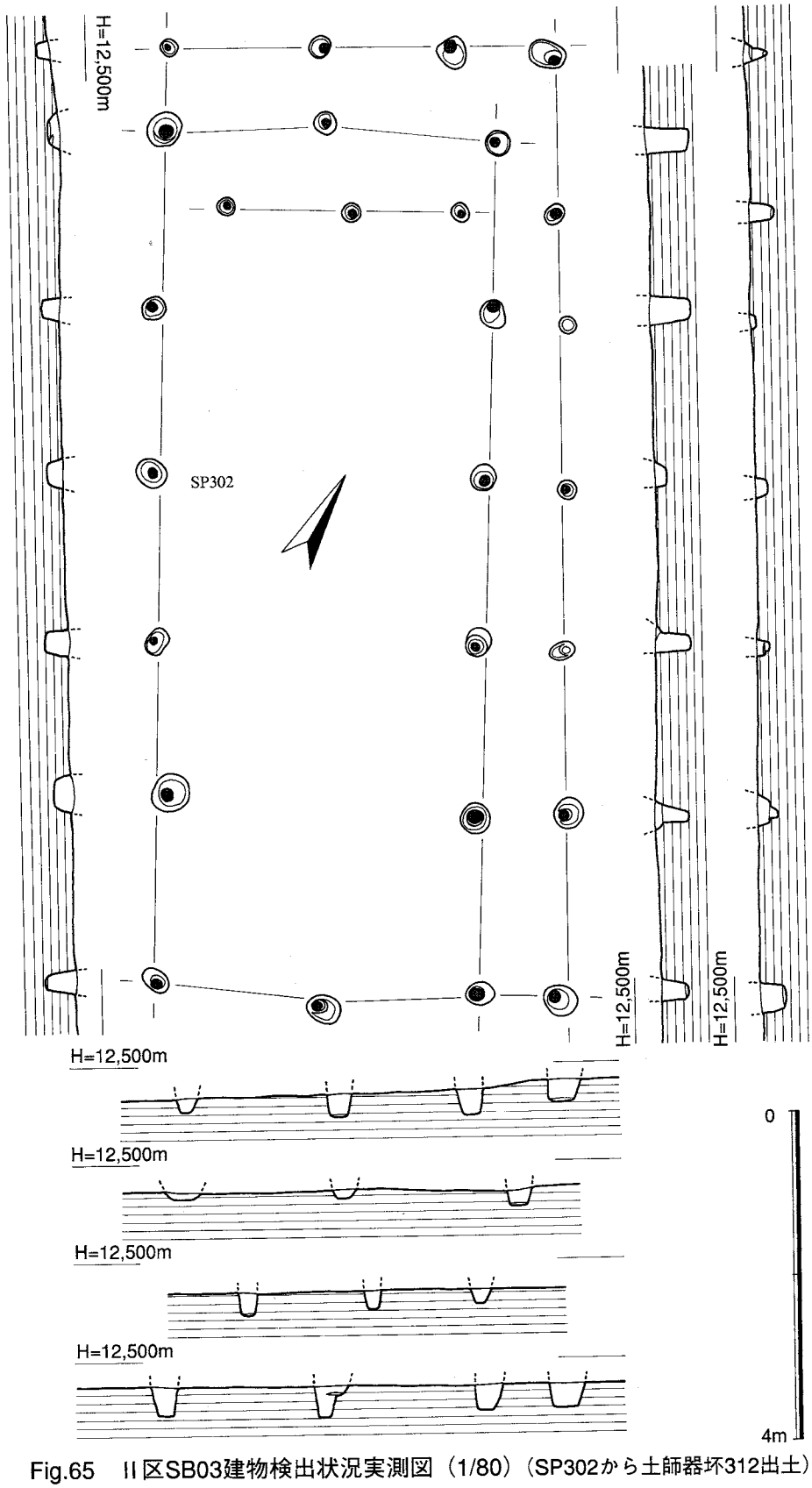


Fig.65　II区SB03建物検出状況実測図（1/80）（SP302から土師器坏312出土）

土遺物に時期的な差はほとんどなく近い時期に掘り直した痕跡である可能性が高い。検出長24.5m・幅1.3m・深さ43cmを測る。断面形は隅丸逆台形を呈する。底面は大きな凹凸がなくほぼ平坦であったが、西へ行くほどテラスを持ちながら浅くなる。遺物はもっともレベルが低い東半部から出土している。東半部は西半部より20cm低くなり、底面から5cm程度浮いた状態で円礫が投げ込まれている。円礫は拳大のものが大半で、一部人頭大の角礫も含まれていた。円礫の中には被熱したものも散見された。瓦類は大半がこの円礫に混じって出土した。埋土は暗褐色シルト質土である。流水の痕跡は認められなかったが、円礫の下層は黒褐色土が堆積しており、上層の埋土より粘性が高いため、円礫が投げ

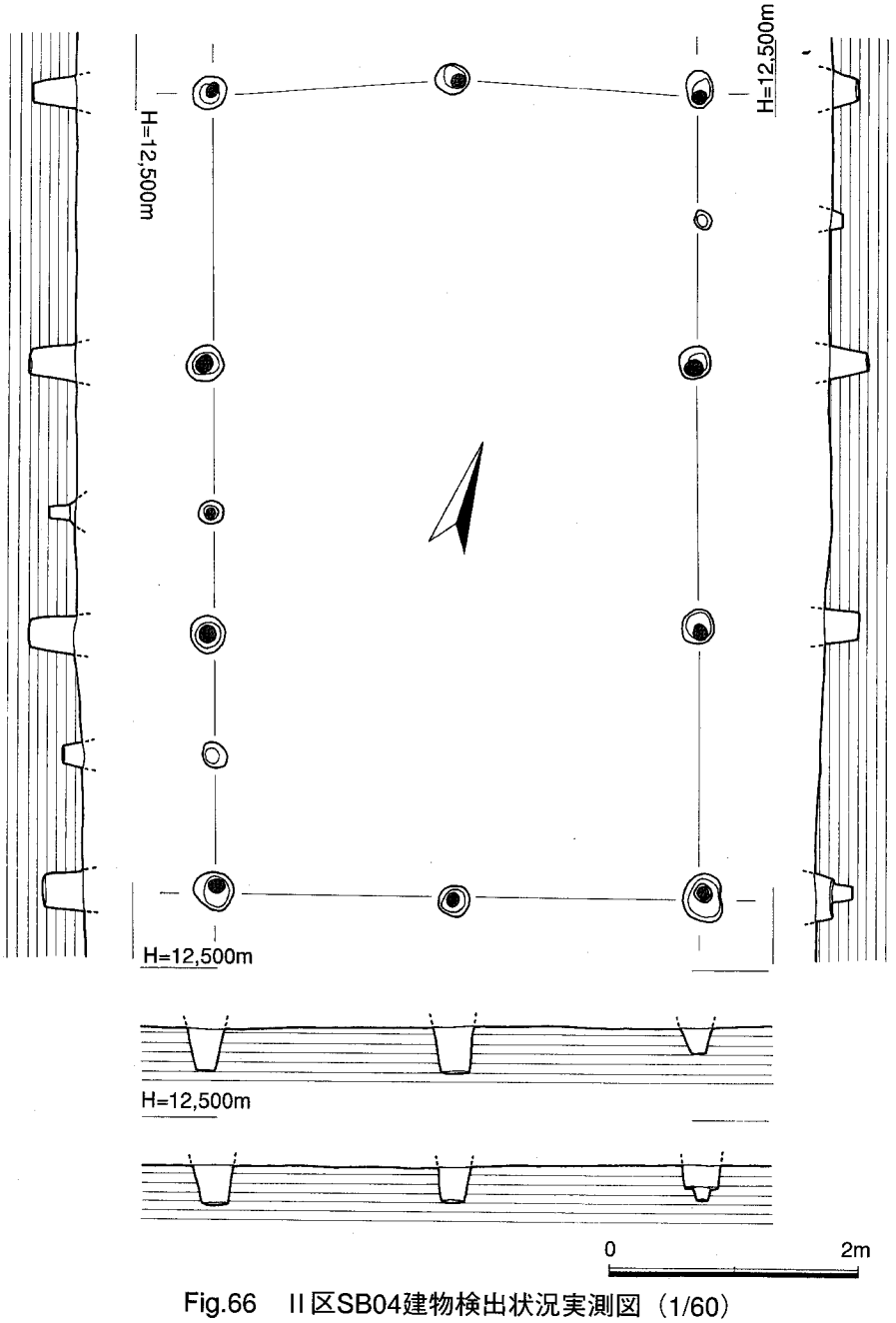


Fig.66　II区SB04建物検出状況実測図（1/60）

込まれるまでは、少なくとも東半には滞水していたと考えられる。

出土遺物（Fig.67・68・69）

陶磁器：266は、龍泉窯系青磁碗である。底部の破片で、底部のみほぼ完存する。底径4.9cmを測る。底部は厚く作り、内面見込みには劃花文が施文される。高台外面まで施釉され、畳付から内面は露胎とする。267・268は、同安窯系青磁碗である。267は、底部のみほぼ完存する破片で、底径4.4cmを測る。外底面は、中央部を突出させる。内面見込みは灰緑色の釉が施され、外面は露胎とする。268は、底部から体部にかけての破片で、1/8個体程度残存する。底径5.4cmを測る。内外両面とも黄緑色の釉が施釉されるが、高台部のみ露胎とする。胎土は精良堅緻で焼成は良好である。269は、青磁碗である。胎土から高麗青磁と思われる。底部から体部にかけての破片で、1/8個体程度残存する。底径は5.0cmに復元できた。全面に施釉され、高台部内面から畳付にかけて砂目痕が観察される。体部外面に鈍い稜を有する。胎土は直径1mm程度の砂粒を含み、釉は透明感ある黄緑色を呈する。焼成は良好である。270は、白磁Ⅶ類皿である。底部が1/2残存する破片で、底径4.8cmに復元できた。内面に段を有し、底部は上げ底状に削り込み、碁筒底とする。透明感ない青白色の釉が施され、外面下半は露胎とする。胎土は精良堅緻で、焼成は良好である。271・272・273・274・275は、白磁碗である。271は、底部が2/3残存する破片で、Ⅷ類に分類される。底径5.2cmに復元できた。透明感ある淡青緑色の釉を施釉し内面見込みには輪状に釉剥ぎを施す。胎土は

精良堅緻で焼成は良好である。272は、底部が完存する破片で、Ⅳ類に分類される。底径5.7cmを測る。高台は低く、そのまま平坦な台に置くと外底面が接地する。透明感ない黄緑色の釉が施釉され、外面は露胎とする。胎土は精良堅緻で、雲母片を少量含む。焼成は良好である。273は、底部が完存する破片で、Ⅴ類に分類される。底径は6.0cmを測る。透明感ない淡緑色の釉が施釉され、高台部は露胎とする。胎土は精良堅緻で、焼成は良好である。274は、底部が1/2残存する破片で、Ⅴ類に分類される。底径は6.0cmに復元できた。透明感ない青灰色の釉が施釉され、高台部は露胎とする。胎土は精良堅緻で、焼成は良好である。275は、底部が完存する破片で、Ⅳ類に分類される。底径は6.0cmを測る。透明感ない暗灰緑色の釉が施釉されるが、外面は露胎、内面にもほとんど釉はかからない。底部は他の出土白磁に比し、厚く作る。胎土は精良堅緻だが、焼成はやや不良で、陶器状の胎となる。

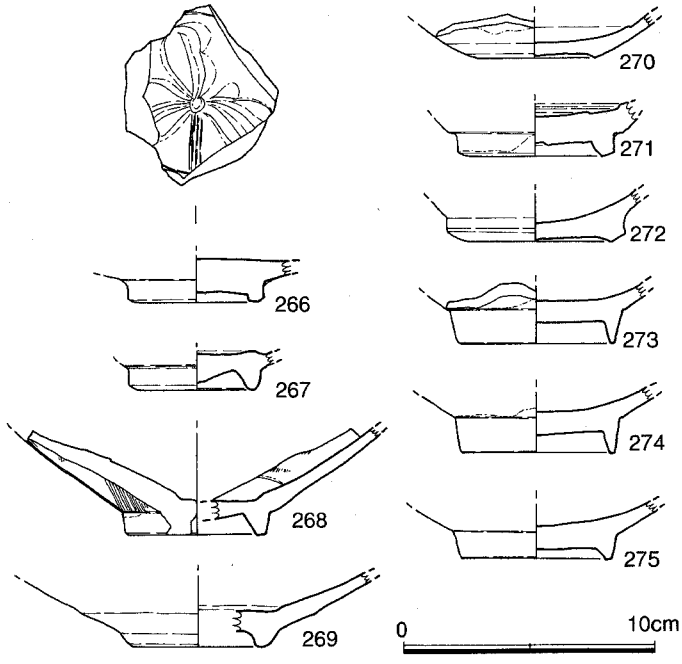


Fig.67　Ⅱ区SD20溝出土陶磁器実測図（1/3）

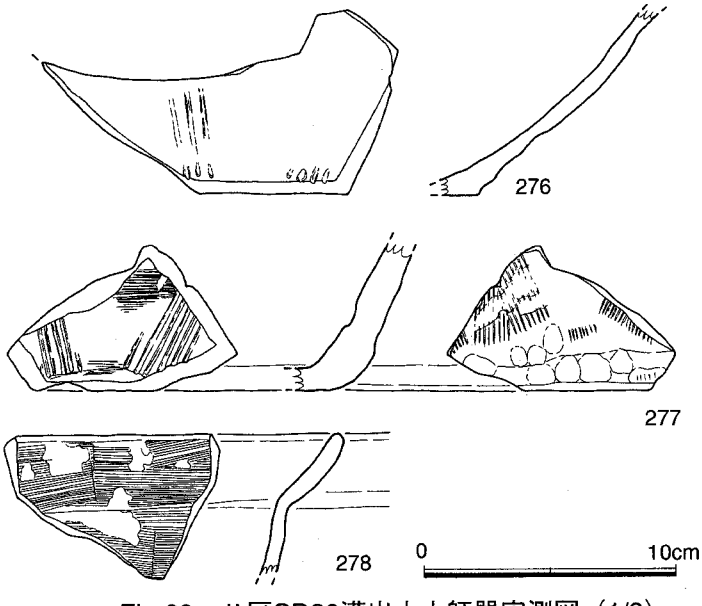


Fig.68　Ⅱ区SD20溝出土土師器実測図（1/3）

土師器：276・277は、擂鉢である。276は、底部から体部にかけての破片で、1/8個体程度残存する。全体に磨滅が進んでおり、外面調整ははっきりしないが、内面には４条を１単位とする擂り目が粗く施される。胎土は精良で、直径3mm程度の砂粒が含まれる。焼成はやや不良で軟質である。277は、底部から体部にかけての小片である。体部外面は一部剥落しているが、８条を１単位とする縦方向のハケメが観察される。下半部には指押さえ痕が残る。内面には横方向の細かいハケが施された後、６条１単位の擂り目が粗く施される。胎土は精良で、直径１～2mmの砂粒が含まれる。焼成は良好である。278は、鍋である。口縁部から体部にかけての小片で、内面には横方向の細かいハケメが施され、外面はナデ調整される。下端付近に炭化物の付着が認められる。胎土は精良で、雲母片を少量含む。焼成は良好である。

瓦類：279は、軒丸瓦である。丸瓦の部分を欠失し、瓦当部分のみ出土した。出土時は上下で２つに分かれており、接合の結果図のような形となった。面径は復元で17cm程度と推定される。磨滅が進んでおり、はっきりしないが、文様は複葉複弁の蓮華文で、外区に粗い珠文を施す。燻しは剥落したのか、観察できない。胎土は精良で明黄白色を呈し、焼成は良好である。280は、平瓦である。最大

厚は1.8cmを測る。内面には布目痕、外面には縦方向の縄目叩きが見られる。胎土は精良堅緻で焼成は良好である。281は、偏行唐草文系の軒平瓦である。外縁部に鋸歯文が施文される。側部・上部には外縁が見られず、剥落した痕跡がないため当初より存在しなかった可能性が強い。胎土は精良で焼成は良好である。282は、丸瓦である。外面は縦方向のナデ調整。胎土は精良で焼成は良好である。

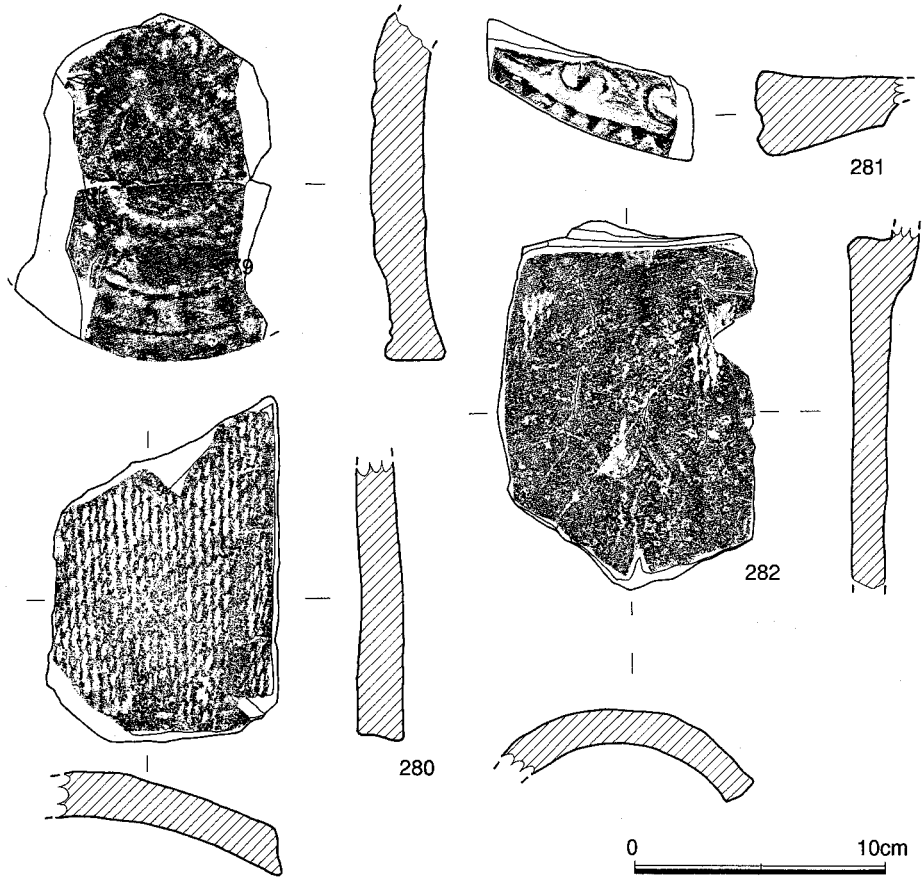


Fig.69　II区SD20溝出土瓦類実測図（1/3）

鉄滓（Fig.75）

283は、碗形鍛冶滓である。重量は210gを測る。

12世紀後半頃か。

SD21溝（Fig.62・PL.5）

II区中央部にて検出した調査区内を貫流する溝である。東西方向に方位を取り、15°北に偏する。SD20とほぼ並行し、やや北に向け蛇行している。幅は最広部で2.4m・最狭部で80cm、深さは20cm～30cmを測る。底部は凹凸がなく平坦であるが、東端部はテラスを持って1段高くなる。また、SD20と同じく、円礫が投げ込まれている部分が検出された。いずれも底部から5cm程度浮いており、大きく2カ所に分かれている。埋土は、暗灰色シルト質土で、流水・滞水の痕跡は、現場では確認できなかった。

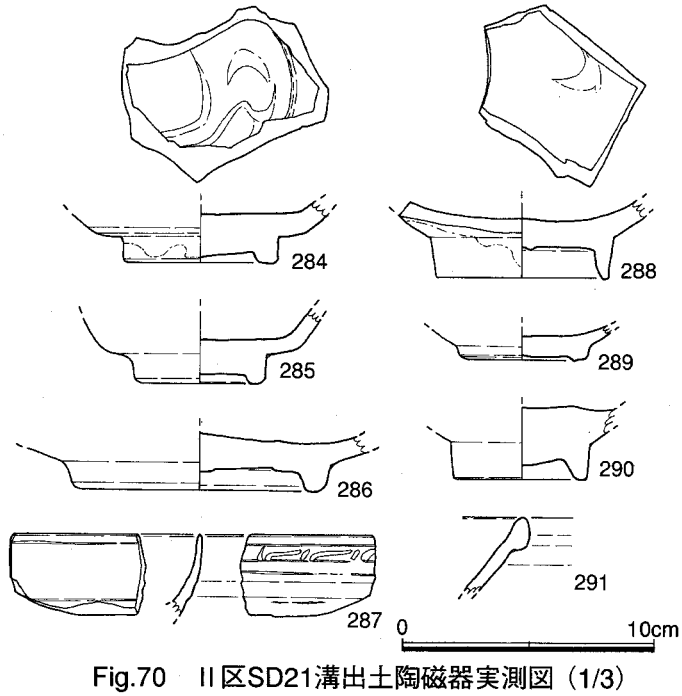


Fig.70　II区SD21溝出土陶磁器実測図（1/3）

出土遺物（Fig.70・71・72）

陶磁器：284・285は、龍泉窯系青磁碗である。底部の破片で、底径5.8cmに復元できた。底部は厚く作り、内面見込みには劃花文が施される。透明感ある黄緑色の釉が施釉されるが、畳付から外底面にかけて露胎とす

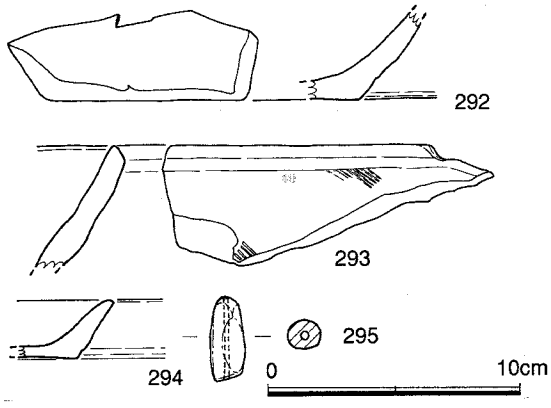


Fig.71　II区SD21溝出土土師器・土製品実測図（1/3）

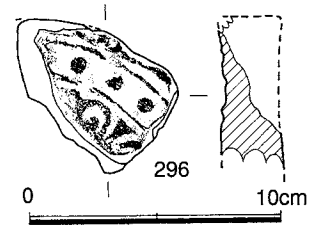


Fig.72　II区SD21溝出土軒丸瓦実測図（1/3）

る。胎土は精良堅緻で、焼成は良好である。285は、底部がほぼ完存する破片で、底径4.6cmを測る。透明感ある藍青色の釉が施釉されるが、畳付から外底面は露胎とする。胎土は精良堅緻で、焼成は良好である。286は、龍泉窯系青磁皿である。底部が1/6残存する破片で、底径9.4cmに復元できた。透明感ない黄緑色の釉が全面に施釉されるが、内面見込みおよび外底面に輪状の釉剥ぎを施す。露胎部分は赤変する。胎土は精良堅緻で焼成は良好である。287は、高麗青磁である。口縁部が1/6残存する碗の破片で、透明感ある暗灰青色の釉が施釉される。内外両面に白土による象嵌が施される。胎土は精良堅緻で、焼成は良好である。288は、白磁Ⅴ類碗である。底部が2/3残存する破片で、底径6.6cmに復元できる。透明感ある黄白色の釉が施釉されるが、高台部から外底面にかけ露胎とする。内面見込みに文様と思われる部分が見られるが、不明瞭で確認できない。胎土は精良堅緻で、焼成は良好である。289は、白磁Ⅳ類皿である。底部が2/3残存する破片で、低い高台を削り出す。底径4.0cmに復元できた。透明感ある淡黄緑色の釉が施釉されるが、外面は露胎とする。胎土は精良堅緻で、焼成は良好である。290は、同安窯系青磁碗である。底部がほぼ完存する破片で、底径は4.7cmを測る。内面見込みには透明感ある淡黄緑色の釉が施釉される。外面は露胎とし、外底面は下向きに突出させる。胎土は精良堅緻で、焼成は良好である。291は、白磁Ⅳ類碗である。口縁部から体部にかけての小片である。口縁外面には玉縁を作り出す。透明感ある淡緑色の釉が全面に施される。

土師器：292は、鉢である。底部から体部にかけての小片であるが、磨滅が著しく外面調整は不明である。胎土は精良で、焼成は良好である。293は、鍋である。口縁部から体部にかけての小片で、注口部分がわずかに残る。外面は斜め方向のハケメが観察される。内面には炭化物が付着する。胎土は精良で、焼成は良好である。294は、坏の小片である。器高2.3cmを測る。外底面には回転糸切り痕が残る。胎土は精良で、雲母片を含む。焼成は良好である。295は、土錘である。下半を欠失する。残存長3.3cm・最大径1.3cm・孔径2mmを測る。外面はナデ調整。胎土は精良で、焼成は良好である。

瓦類：296は、軒丸瓦である。瓦当部分の小片で、複弁の蓮華文が観察される。外区には珠文が施される。珠文の間隔はSD20出土の瓦当とほぼ同じである。

鉄滓：297は、碗形鍛冶滓である。重量は120gを測る。

以上の遺物から、SD21の時期は、14世紀末から15世紀初頭頃と思われる。

③土壙（Fig.73）

SK28土壙（Fig.73）

Ⅱ区中央部にて検出した。上部を削平され、底部から8cm程度残存するのみである。長軸は北東ー南西方向を向き、不整な楕円形の平面プランを呈し、長径48cm・短径36cmを測る。

出土遺物（Fig.74）

瓦器：299は、椀である。口縁から体部にかけての小片で、調整は磨滅が進んでいるため不明である。

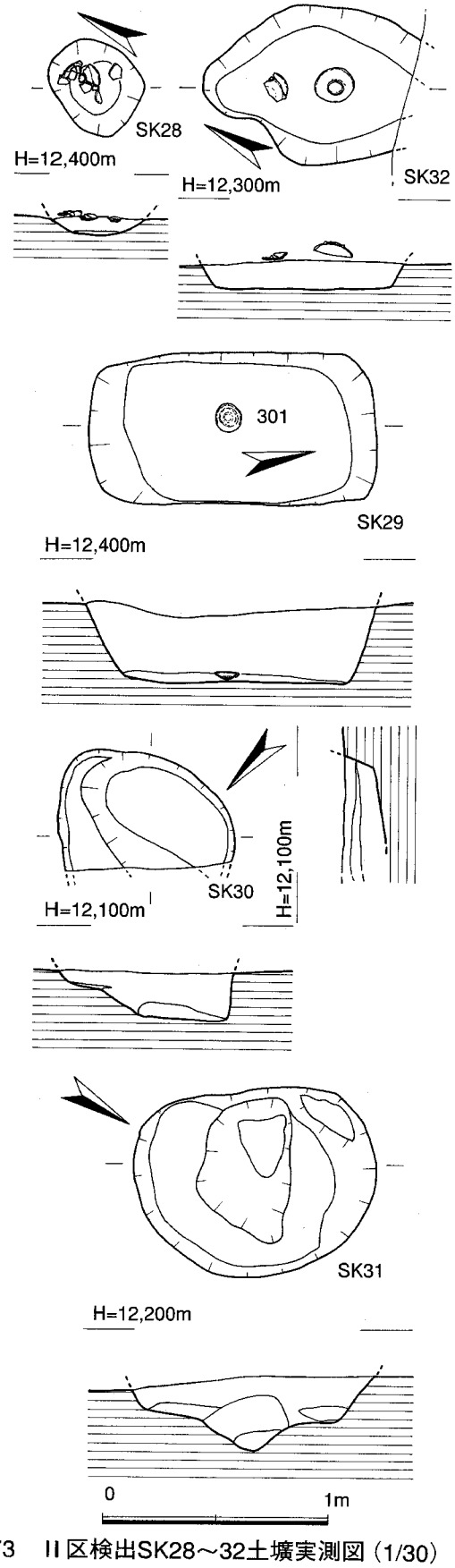


Fig.73　II区検出SK28～32土壙実測図（1/30）

土師器：298は、埦である。底部が4/5残存する破片で、底径5.2cmに復元できた。胎土は精良で焼成は良好である。300は、坏である。2/3個体残存する破片で、口径15.9cm・器高3.1cmに復元できた。内底面は不定方向のナデ。外底面には回転ヘラ切り痕が残存し、板状圧痕が観察される。胎土は精良で焼成は良好である。12世紀前半頃。

SK29土壙（Fig.73）

Ⅱ区中央部北寄りにて検出した。長軸をほぼ北に向け、平面プランは隅丸長方形を呈する。長辺1.3m・短辺66cmを測る。断面形は隅丸逆台形を呈し、深さ48cmを測る。底面からやや浮いて土師皿が出土したが、その間層には炭化物が多く含まれていた。炭化物が少ないが第１次・２次調査で検出されたものと同様の火葬墓の可能性が高い。

出土遺物（Fig.74）

301は、坏である。ほぼ完形で出土した。口縁部がやや焼けひずむが、口径12.7cm・器高3.0cm・底径8.0cmを測る。外底面には回転糸切り痕が観察される。胎土は精良で焼成は良好である。13世紀中葉か。

SK30土壙（Fig.73）

Ⅱ区中央部北側、SD21に切られる形で検出した。平面プランは不整な円形を呈し、長径76cm・深さ20cmを測る。東側にテラスを有する。遺物は出土しなかった。

SK31土壙（Fig.73）

Ⅱ区東半、調査区北東隅にて検出した。長軸を南北方向に向け、30°西偏する。平面プランは不整な楕円形を呈し、長径1.08m・短径80cm・深さ32cmを測る。

出土遺物（Fig.74）

陶磁器：302は、白磁Ⅴ類碗である。底部が完存する破片で、底径4.6cmを測る。透明感ない淡緑色の釉が施釉され、高台部から下は露胎とする。胎土は精良堅緻で、焼成は良好である。

瓦器：303・304は、埦である。1/6個体残存する破片である。低い高台を貼り付け、内面は水平方向のヘラミガキを施す。304は、1/4個体残存する破片である。口径16.5cm・器高5.9cm・底径5.8cmに復元できた。内外両面とも水平方向、内底面のみ垂直方向のヘラミガキを施す。胎土は精良堅緻で、焼成は良好である。

土師器：305は、皿である。ほぼ完形で出土した。口径7.1cm・器高2.2cm・底径5.7cmを測る。内底面は不定方向のナデ、外底面には回転糸切り痕が残る。胎土は精良で、焼

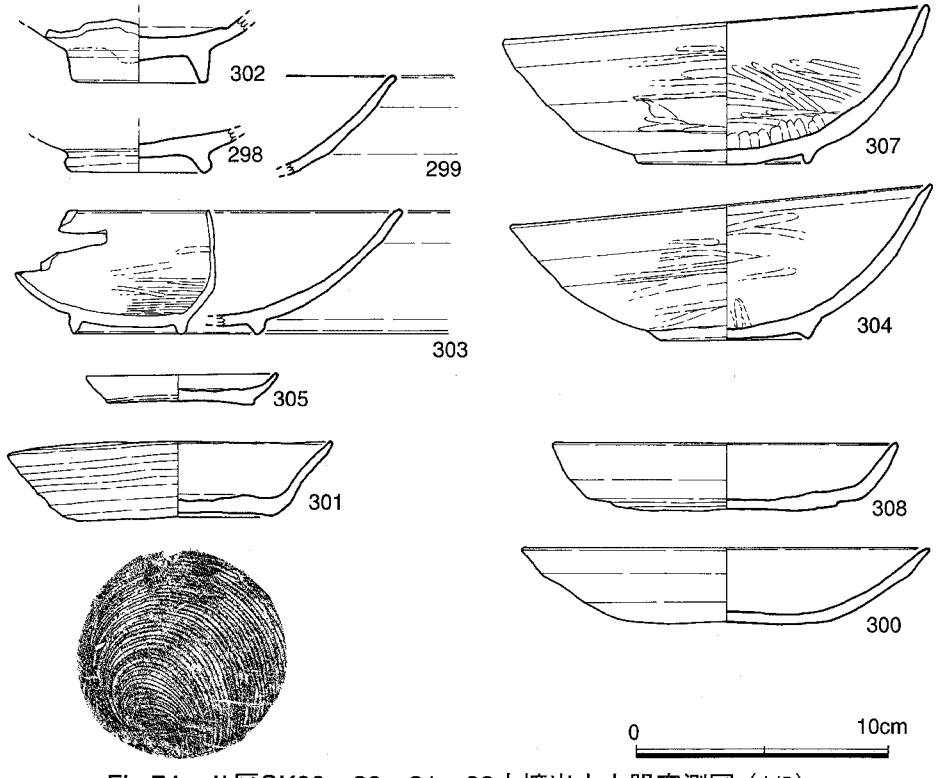


Fig.74　II区SK28・29・31・32土壙出土土器実測図（1/3）

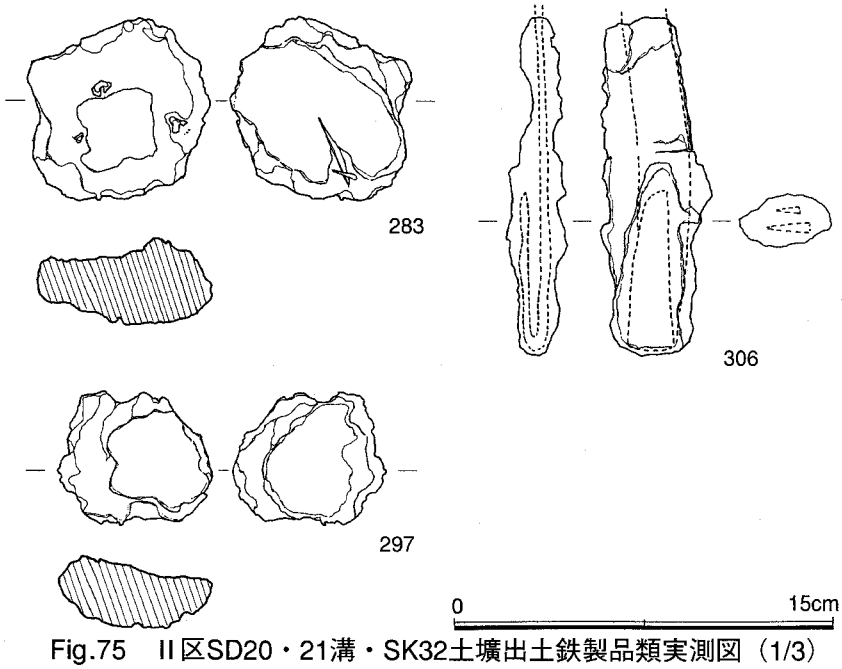


Fig.75　II区SD20・21溝・SK32土壙出土鉄製品類実測図（1/3）

成は良好である。

鉄製品：（Fig.75）306は、短刀である。茎部を欠失する。全体に銹化するが、X線にて撮影したところ、鋒を折り曲げていることがわかった。刃部幅2.8cmを測る。12世紀後半頃か。

SK32土壙（Fig.73）

II区北東隅にて検出した。土壙南壁は、調査区東壁にかかるため調査し得なかった。平面プランは不整な楕円形を呈し、長軸を南北方向に取り29°西偏する。短径70cm・深さ20cmを測る。

出土遺物（Fig.74）

瓦器：307は、椀である。土壙の底面から14cm浮き、伏せた状態で出土した。ほぼ完形である。口径16.7cm・器高5.9cm・底径6.6cmを測る。高台が低いため、平坦な台に置くと外底面が接地し非常に不安定である。外面は水平方向の疎なヘラミガキで、外面の稜の部分を中心にみがいている。稜を消そうとしたのであろうか。内面は体部が水平方向・底面が垂直方向の密なヘラミガキが施される。胎土は精良で、焼成は良好である。

土師器：308は、坏である。1/4個体残存する破片で、口径13.4cm・器高2.6cm・底径10.8cmに復元できた。内底面は不定方向のナデにて仕上げられる。外底面には回転糸切り痕が残存する。胎土は精良で、雲母の小片を含む。焼成は良好である。

以上の遺物から、SK32の時期は、12世紀後半～末頃と思われる。土壙墓か。

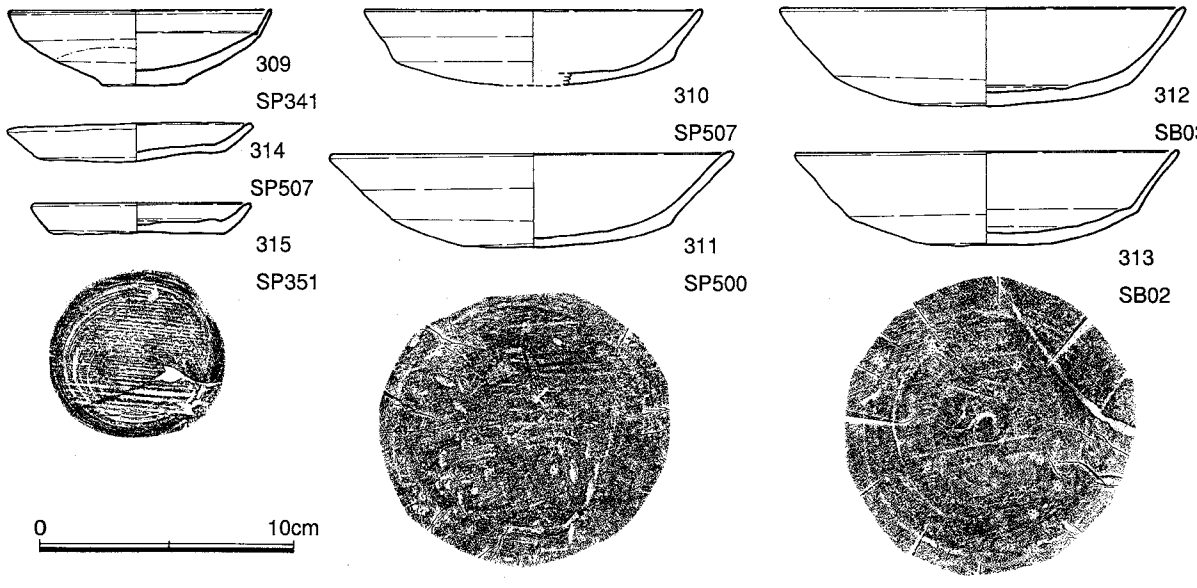


Fig.76　II区検出SP柱穴出土土器実測図（1/3）

④柱穴（Fig.76）

II区にて検出した柱穴は、4棟の掘立柱建物を構成するもの以外にも多く存在し、その多くが柱痕をもつ深いものである。本稿で示した以外にもさらに建物が拾えるのであろうが、今回は時間の制約・現場での検出漏れ等でそれはかなわなかった。柱穴の内部から完形の遺物が出土した例が複数存在し、以下にそれを含む、図示し得る遺物を挙げる。

陶磁器：309は、白磁皿である。森田分類のIV類に当たると思われるが、国産の陶器である可能性も考えられる。柱穴内埋土中、底面から浮いた状態で出土した。ほぼ完形である。口径10.2cm・器高3.0cm・底径3.3cmを測る。透明感ある黄緑色の釉を施釉し、口縁部を釉剥ぎし露胎とする。外面過半は露胎。胎土は精良で焼成は良好である。SP341出土。

土師器：310・311・312・313は、坏である。310は、口縁部から体部にかけての破片で、1/8個体残存する。口径13.2cmに復元できた。底部には回転ヘラ切り痕が残る。SP507出土。311は、4/5個体残存する破片で、口径15.7cm・器高3.8cmを測る。全体に磨滅が進む。底部には回転ヘラ切り痕が残り、板状圧痕が観察される。SP500出土。312は、柱穴内埋土中、底面から浮いた状態で出土した。ほぼ完形である。口径15.8cm・器高3.9cmを測る。底部には回転ヘラ切り痕が残り、板状圧痕が観察される。SB03出土。313は、柱穴内埋土中、底面から浮いた状態で出土した。ほぼ完形である。口径15.1cm・器高3.8cmを測る。底部には回転ヘラ切り痕が残り、板状圧痕が観察される。SB02出土。314・315は、皿である。314は、2/3個体残存する破片で、口径9.4cm・器高1.4cm・底径7.4cmに復元できた。内底面は不定方向のナデにて仕上げられる。底部には回転ヘラ切り痕が残る。SP507出土。315は、ほぼ完形である。口径8.4cm・器高1.2cm・底径6.8cmを測る。内底面は不定方向のナデ調整、外底面には回転糸切り痕が残り、板状圧痕が観察される。SP351出土。

⑤遺構検出面出土の遺物（Fig.77・78・79）

遺構検出面からは以下の遺物が出土した。遺構の埋土に含まれる遺物が取り上げられたものもあるが、遺構面の黄褐色シルト質土に含まれる縄文土器が数点出土している。弥生土器は注目され、今回

の調査では弥生時代に属する遺構が検出されなかったため、調査区外に当該期の遺構が残存している可能性が考えられる。

陶磁器：316・317は、白磁である。316は、Ⅳ類の碗で、底部が4/5残存する破片である。底径は5.8cmを測る。底部は厚く作る。内面見込みに櫛描文を有する。透明感ある淡黄緑色の釉が施釉されるが、高台部以下は露胎とする。317は、Ⅴ類の碗である。底部の破片で、底径6.2cm。318は、茶褐釉陶器有耳壺である。口縁から胴部にかけての破片で、肩部に角張った耳が貼り付けられている。透明感ない暗オリーブ褐色の釉が全面に施釉される。焼成は良好で、胎土は精良堅緻である。

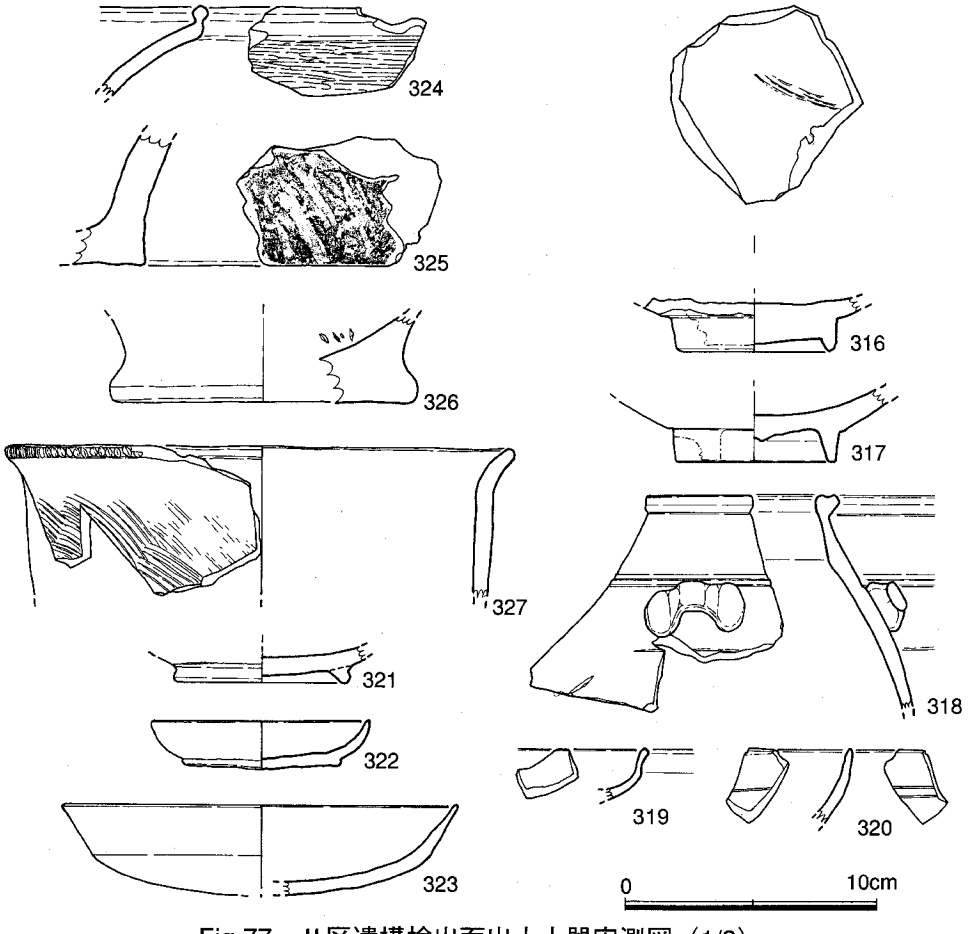


Fig.77　Ⅱ区遺構検出面出土土器実測図（1/3）

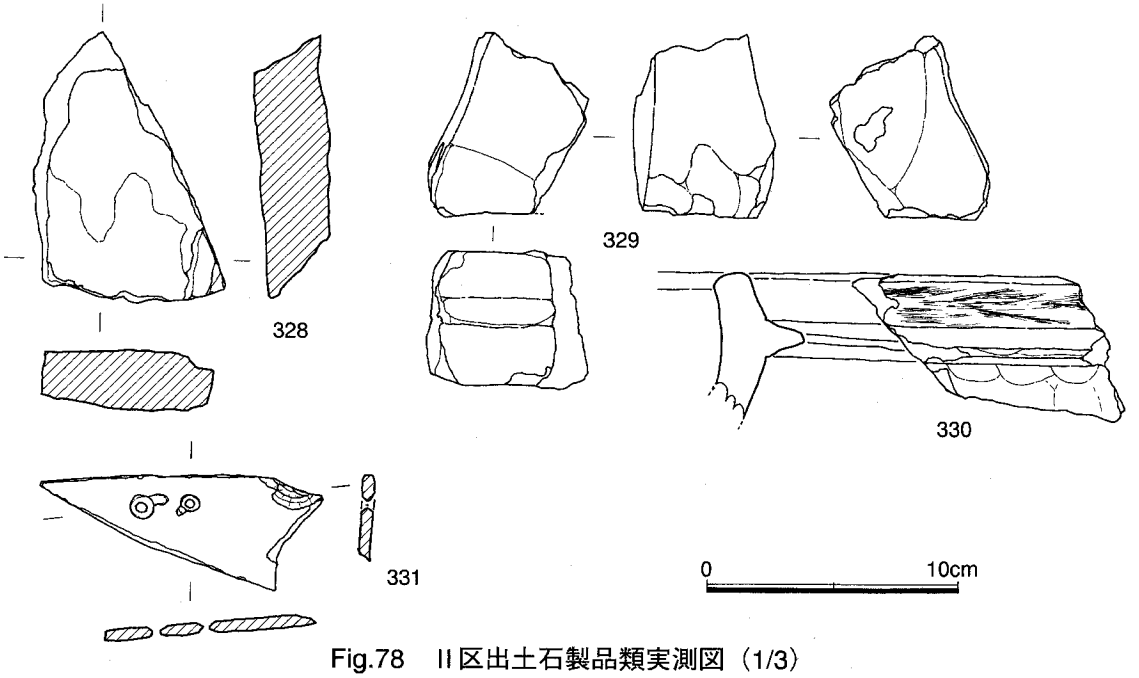


Fig.78　Ⅱ区出土石製品類実測図（1/3）

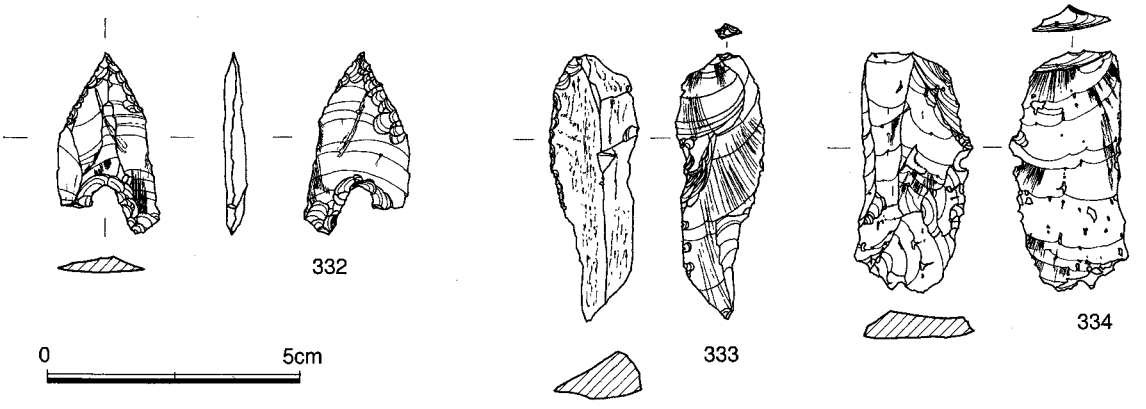


Fig.79　第II区出土打製石器類実測図（2/3）

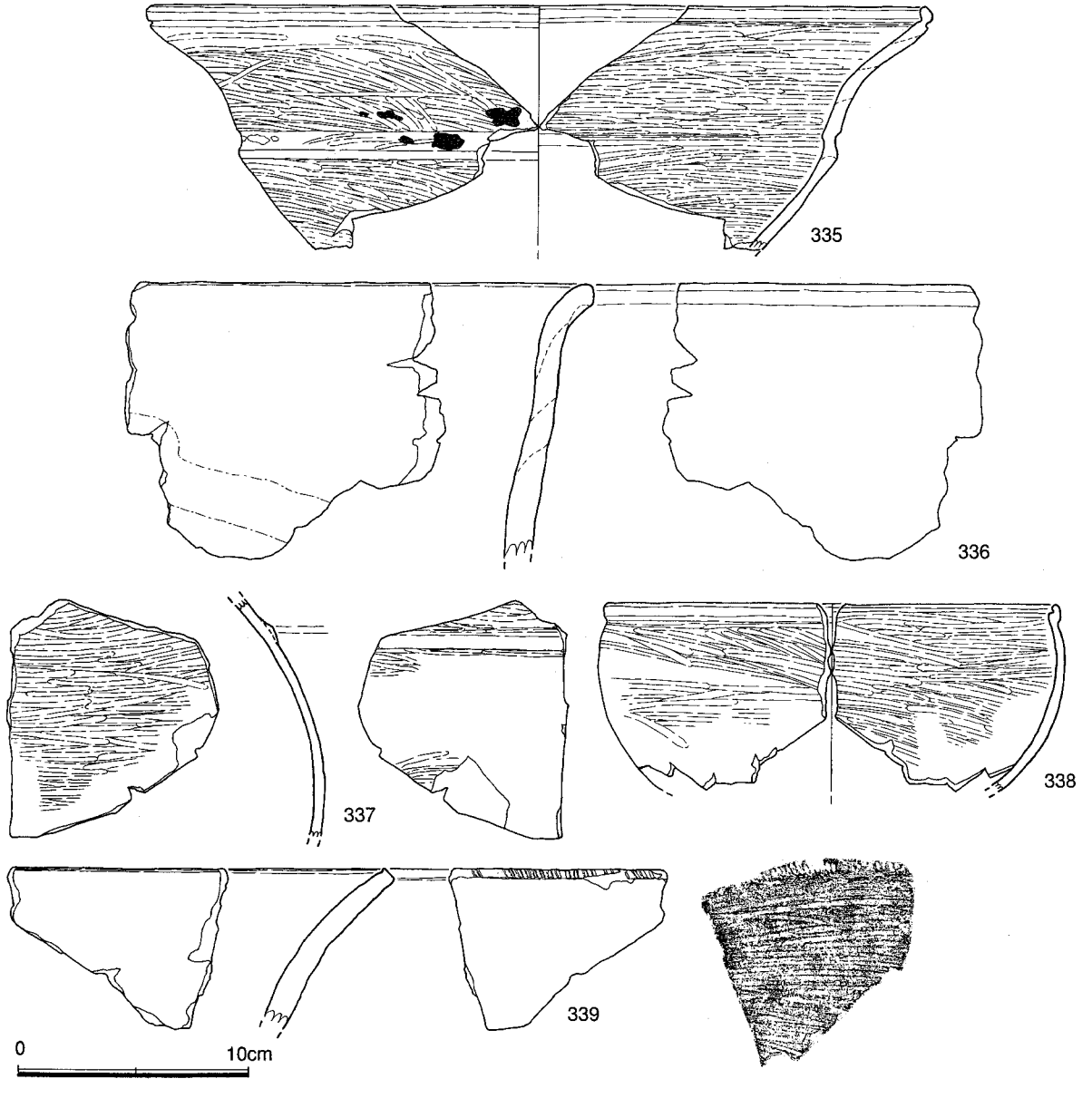


Fig.80　II区出土縄文土器実測図（1/3）

319は、緑釉陶器である。口縁部の小片であるが、機種の特定はできなかった。釉調は透明感ある優美な淡緑色で、氷裂が入る。外面に１条の稜を持つ。胎土は精良で、焼成は良好である。320は、高麗青磁である。口縁部の小片で、外面に２条・内面に１条の白土による象嵌の界線を持つ。

土師器：321は、埦である。底部の破片で、底径6.6cmを測る。胎土は精良で雲母片を少量含む。焼成は良好。322は、皿である。1/2個体残存する破片で、口径8.4cm・器高2.0cm・底径6.0cmを測る。底部は回転ヘラ切り。323は、坏である。1/3個体残存する破片で、口径15.4cmに復元できた。底部は回転ヘラ切り。

縄文土器：324は、黒川式系の精製浅鉢である。口縁部の小片で、体部外面には横位の密な研磨が施される。325は、深鉢形土器である。底部の小片で、外面には条痕文が施される。326は、底部の破片である。深鉢か。底径11.4cmに復元できた。内面には断面Ｖ字形の擦痕を有し、外底面は黒化する。炭化物か。

弥生土器：327は、板付Ⅱ式の甕である。如意形口縁を持つ破片で、口縁端部に刻み目を有する。外面調整は斜め方向の刷毛目。胎土は精良で焼成は良好。

石製品類（Fig.78）：328・329は、砂岩製の砥石である。328は裏面が剥落する。329は２面を欠失するが、それ以外の面すべてを使用する。１つの面は溝状にくぼむ部分を持つ。330は、滑石製石鍋である。口縁部の小片。張出部から下は炭化物が付着する。331は、粘版岩製石製穂摘具である。大半を欠失し、剥落が著しい。両面から穿孔される中心間2cmの縄縛固定孔をもち、背部分に紐による擦痕が観察される。

打製石器類（Fig.79）：332は、黒曜石製剥片鏃で、主要剥離面が残る。器長3.5cm・器幅1.7cm・器厚3.0cmを測る。333は、黒曜石の加工痕ある剥片である。片面にPebble面を残し、縁辺に二次加工を施す。最大長5.3cm・最大幅1.8cm・最大厚9mmを測る。334は、黒曜石縦長剥片である。下半部を欠失する。残存長4.8cm・最大幅2.2cm・最大厚6mmを測る。

グリッド調査に伴う出土遺物（Fig.80）

335は、黒川式系の精製浅鉢である。口縁部から体部にかけての破片で、口径34.2cmに復元できた。内外両面とも体部には横位の密な研磨で仕上げられる。口縁部はナデ調整。断面には右上がりの粘土紐の巻き上げ痕が観察される。外面には炭化物が付着する。本個体の用途は煮沸用か。胎土に径1mm程度の赤色粒が観察された。このことから産地は早良平野方面の可能性が考えられる。胎土は精良で焼成は良好である。336は、縄文土器の粗製深鉢である。口縁部から体部にかけての破片で、断面には右上がりの粘土紐の巻き上げ痕が観察される。胎土には２～3mmの砂粒が多く含まれ、焼成は良好である。337は、胴部の破片である。内外両面とも横位の密な研磨が施される精製の土器である。断面形は丸みを帯び、外面に１条の突帯を貼り付ける。胎土は精良で焼成は良好である。338は、埦形精製土器である。口径19.6cmに復元できた。内外両面とも横位～斜位の密な研磨が施される。339は、口縁部の小片である。深鉢か。口縁に刻み目を有し、外面には貝殻条痕文を持つ。

⑥小結

Ⅱ区では、12世紀前半頃の良好な掘立柱建物を検出した。掘立柱建物を構成する柱穴の中には、埋土に焼土塊が混じるものが含まれていた。すべての柱穴に焼土を含む建物が存在し、この建物は、火災のため消失した屋敷を建て直したものの可能性が高い。これにより第Ⅱ区の建物群は大きく2期に分類することが可能であろう。SB01・03が先行する。この2棟は主軸をほぼ並行にしていることから、

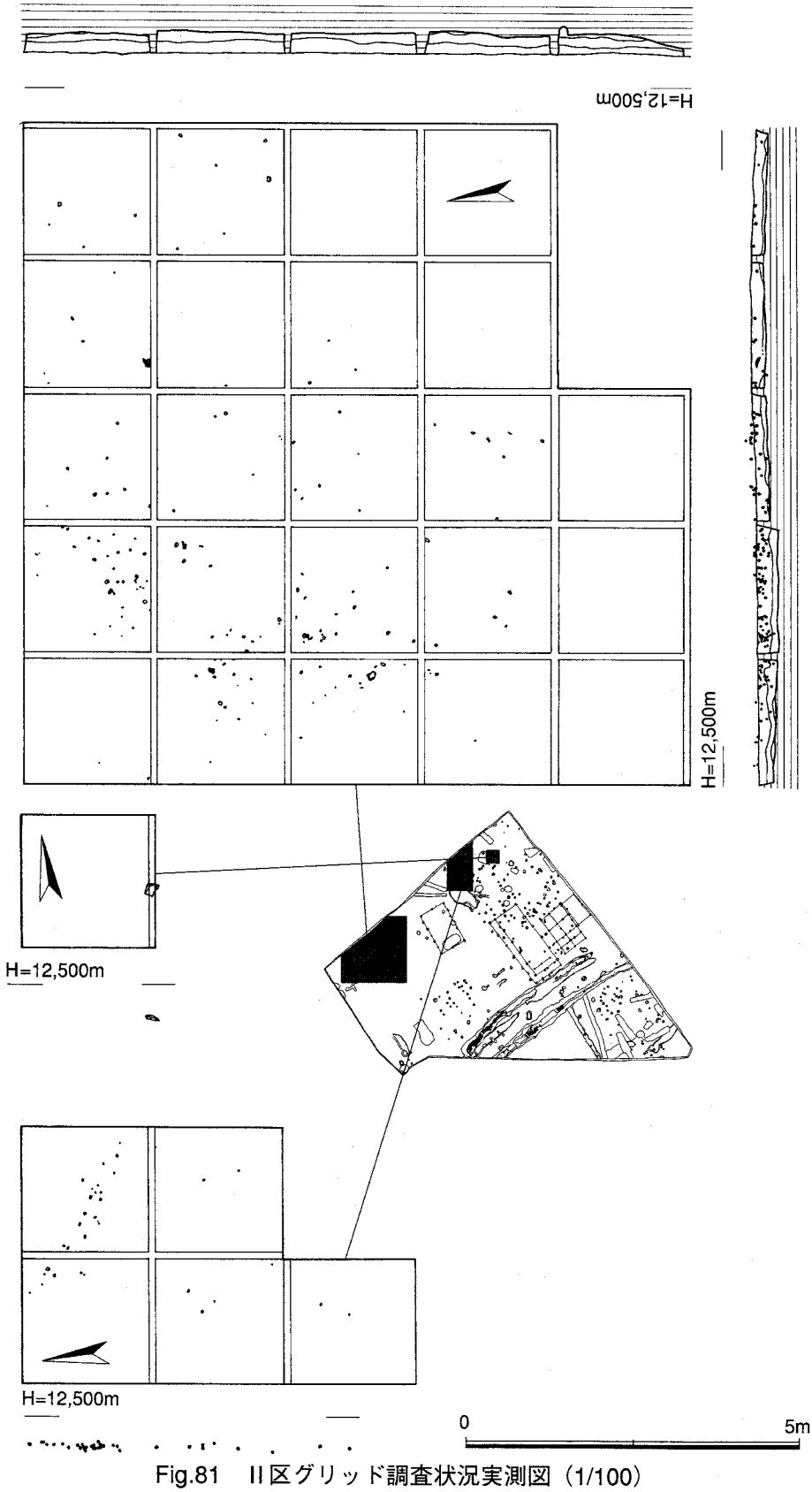


Fig.81　II区グリッド調査状況実測図（1/100）

同時に存在していた可能性が高い。これらの焼失後SB02が建てられたものと思われる。SB04は柱穴の埋土に焼土が含まれておらず、SB02よりは先行する可能性が高いが、SB01・03とは主軸をやや異にしており、併存していたかどうかはわからない。ただ、柱穴の規模・柱間の間隔から、そう時期が離れることはないと思われる。また、これら建物と直行する溝は、時期が建物とはややずれており、SB03と近接しすぎていることからも、これが屋敷地の区画溝であったとは考えられない。I区のSD19が第II区の方向に屈曲するが、これに接続するのは出土遺物からみてSD21であろう。遺構面の黄褐色シルト質土は縄文後期から晩期の良好な包含層となっており、II区では黒川式系の精製浅鉢・椀形土器など、多くの遺物が出土した。

4．第Ⅲ区の調査

調査概要

溝・土壙・柱穴・その他の順で記述する。本調査区では、溝２条・土壙16基を検出した。遺構面は黄褐色シルト質土で、遺構の埋土は、黒褐色～暗灰色を呈するシルト質土であった。Ⅰ区同様遺構面は削平を受けていると思われるが、遺構の残存状況は比較的良好である。調査区の北～北西は、調査区西側を北流する五十川川の氾濫原となり、遺構の密度は急激に落ちる。

①溝（Fig.82・83、PL.8）

SD30溝（Fig.82）

調査区東端にて検出した。南東～北西方向に掘削される溝で、ほぼ現在の里道に平行する。南東端は調査区外となり調査できなかった。幅1.9m・深さ74cmを測る。西側に長さ5m・幅50cmのテラスを有する。北端部は急激に立ち上がり、これ以上大きく北に伸びる可能性は低い。南端はⅠ区方向に伸びており、遺物の時期からSD09と接続する可能性が考えられる。

出土遺物（Fig.83）

陶磁器：340は、白磁Ⅳ類碗である。底部が4/5残存する破片で、底径6.0cmに復元できた。内面に片彫りによる文様が施され、透明感ある灰青色の釉が施釉される。高台下半から外底面にかけ露胎とする。胎土は精良堅緻で、焼成は良好である。341は、龍泉窯系青磁碗である。口縁から体部にかけての小片で、外面には片彫りによる雷文が施される。透明感ある青緑色の釉が施釉される。

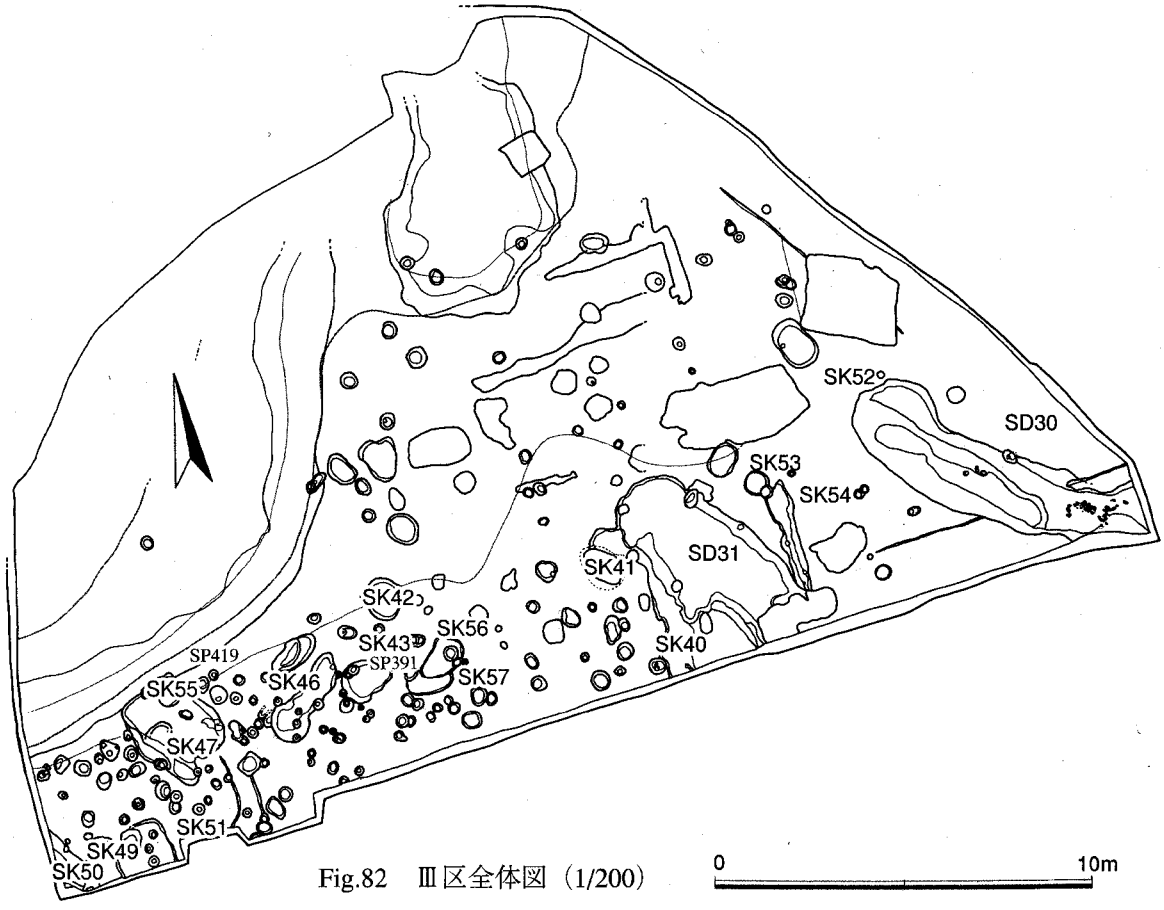


Fig.82　Ⅲ区全体図（1/200）

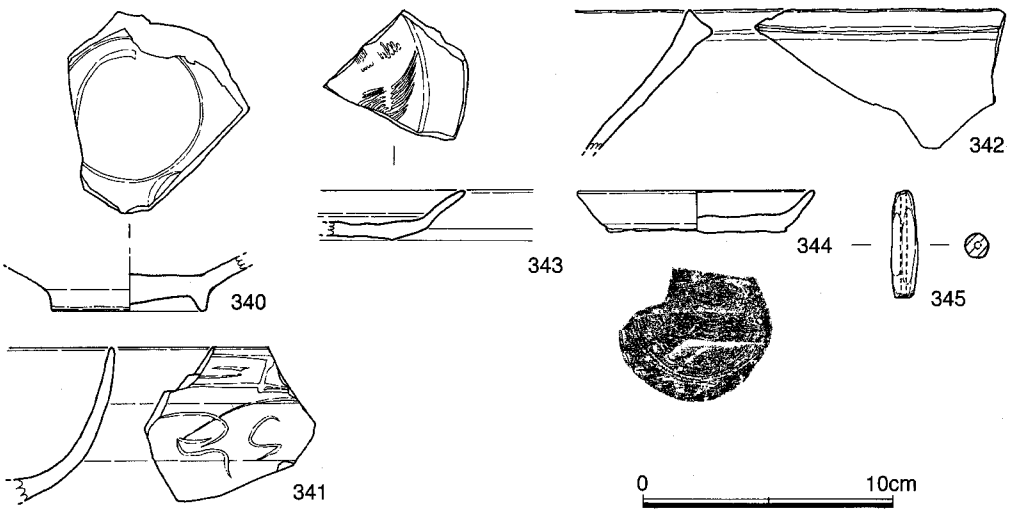


Fig.83　Ⅲ区SD溝出土遺物実測図（1/3）

土師器：342は、鉢である。口縁部から体部にかけての小片で、口縁外面を緩く突出させる。内外両面ともナデ調整にて仕上げる。胎土は精良で、焼成は良好である。

これらの遺物から、SD31の時期は、15世紀初頭～前半頃と思われる。

SD31溝（Fig.82）

調査区南端、SD30と隣り合うように検出した。SK40を切る。SD30とほぼ並行し、幅3m・深さ24cmを測る。底部はほぼ平坦で、断面形は逆台形を呈する。流水・滞水の痕跡は、確認できなかった。

出土遺物（Fig.83）

陶磁器：343は、龍泉窯系青磁皿である。1/8個体程度残存する破片で、内面見込みには文様が観察される。透明感ある黄緑色の釉が施され、体部下半から外底面にかけ露胎。

土師器：344は、皿である。1/2個体程度残存し、口径9.2cm・器高1.7cm・底径6.0cmに復元できた。外底面に回転糸切り痕が残り、板状圧痕が残存する。345は、土錘である。器長4.2cmを測り、外面はナデ調整。

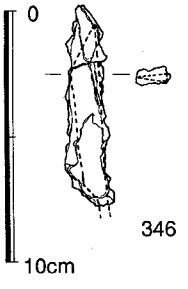


Fig.84　Ⅲ区SK40出土鉄製品実測図（1/3）

②土壙（Fig.85～89、PL.7・8）

SK40土壙（Fig.85）

Ⅲ区南端、SD31に切られる形で検出した。SD31に流入する溝の可能性も考えられるが、流水および滞水の痕跡が現場で観察されなかったこともあり、ここでは暫定的に土壙とする。南端を調査区外とするため平面プランはよくわからないが、不整な長方形～楕円形を呈すると思われる。幅78cm・深さ14cmを測る。南北方向に方位を取り、18°西偏する。断面形は逆台形を呈し、埋土は、暗灰色シルト質土である。

出土遺物（Fig.86）

陶磁器：348は、龍泉窯系青磁碗である。口縁から体部にかけての小片で、内面に劃花文が施される。

土師器：366・371は、坏である。366は、ほぼ完形で出土した個体で、口径14.1cm・器高3.1cm・底径10.0cmを測る。内底面に不定方向のナデ、外底面に回転糸切り痕および板状圧痕が観察される。371は、4/5個体残存する破片で、口径14.9cm・器高3.2cm・底径9.8cmを測る。内底面に不定方向のナデ、外底面に回転糸切り痕および板状圧痕が観察される。胎土は精良で雲母片を含み、焼成は良好である。360・365・367・368・369は、皿である。360は、口径8.8cm・器高1.0cm・底径7.0cmを測り、外底面に回転糸切り痕。365は、1/2個体残存し、口径9.4cm・器高1.3cm・底径8.0cmに復元できた。

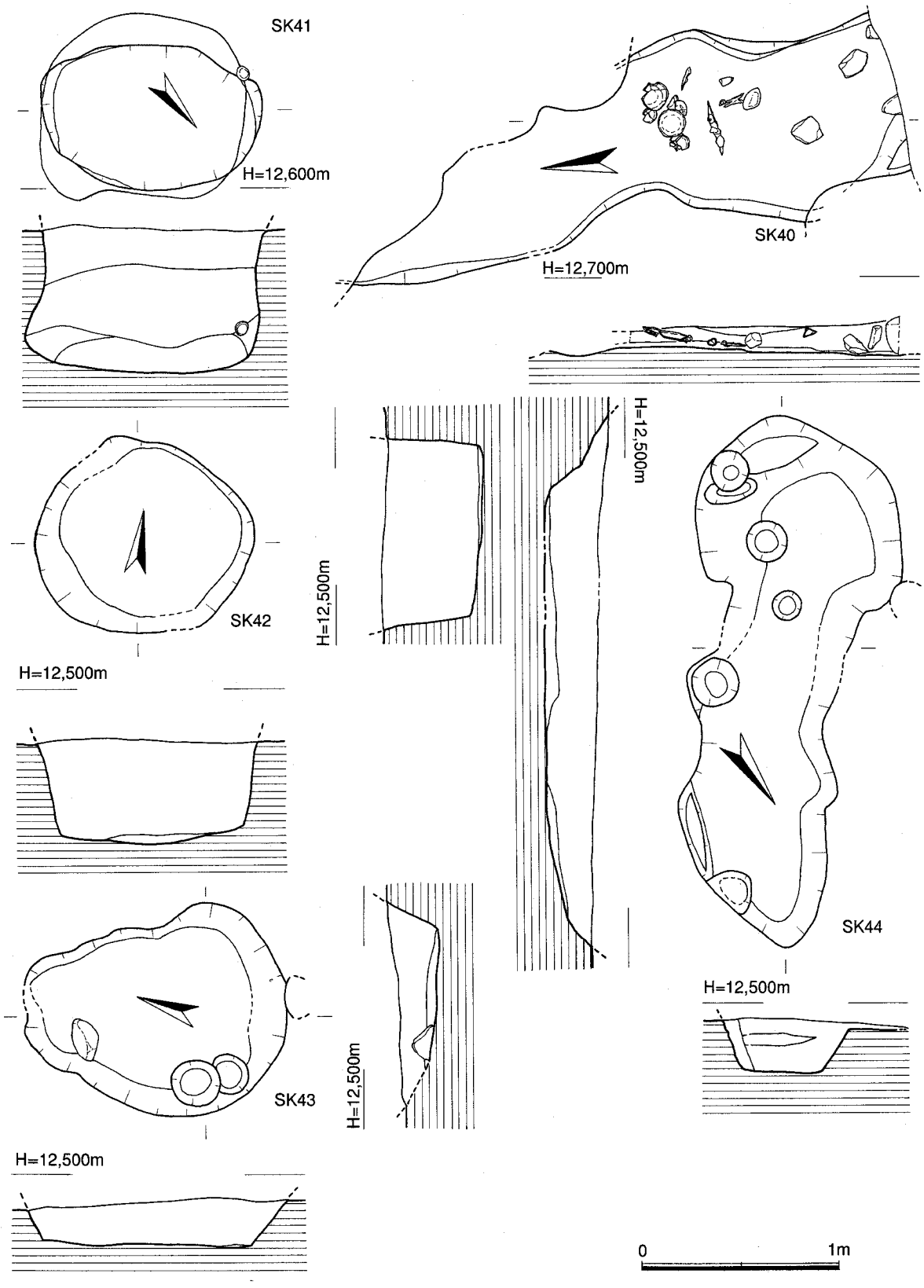


Fig.85　III区SK40・41・42・43・44土壙検出状況実測図(1/30)

外底面には回転糸切り痕および板状圧痕が残る。367は、1/3個体残存する破片で、口径8.4cm・器高1.1cm・底径7.2cmに復元できた。外底面に回転糸切り痕を有する。胎土に雲母片を少量含む。368は、4/5個体残存する破片で、口径8.3cm・器高1.0cm・底径7.0cmを測る。外底面に回転糸切り痕を有する。

369は、ほぼ完形で出土した個体である。口径8.0cm・器高1.6cm・底径5.6cmを測る。外底面に回転糸切り痕および板状圧痕を有する。

鉄製品：346は、刀子の身部と思われる。全体に銹化し、残存長8.0cmを測る。

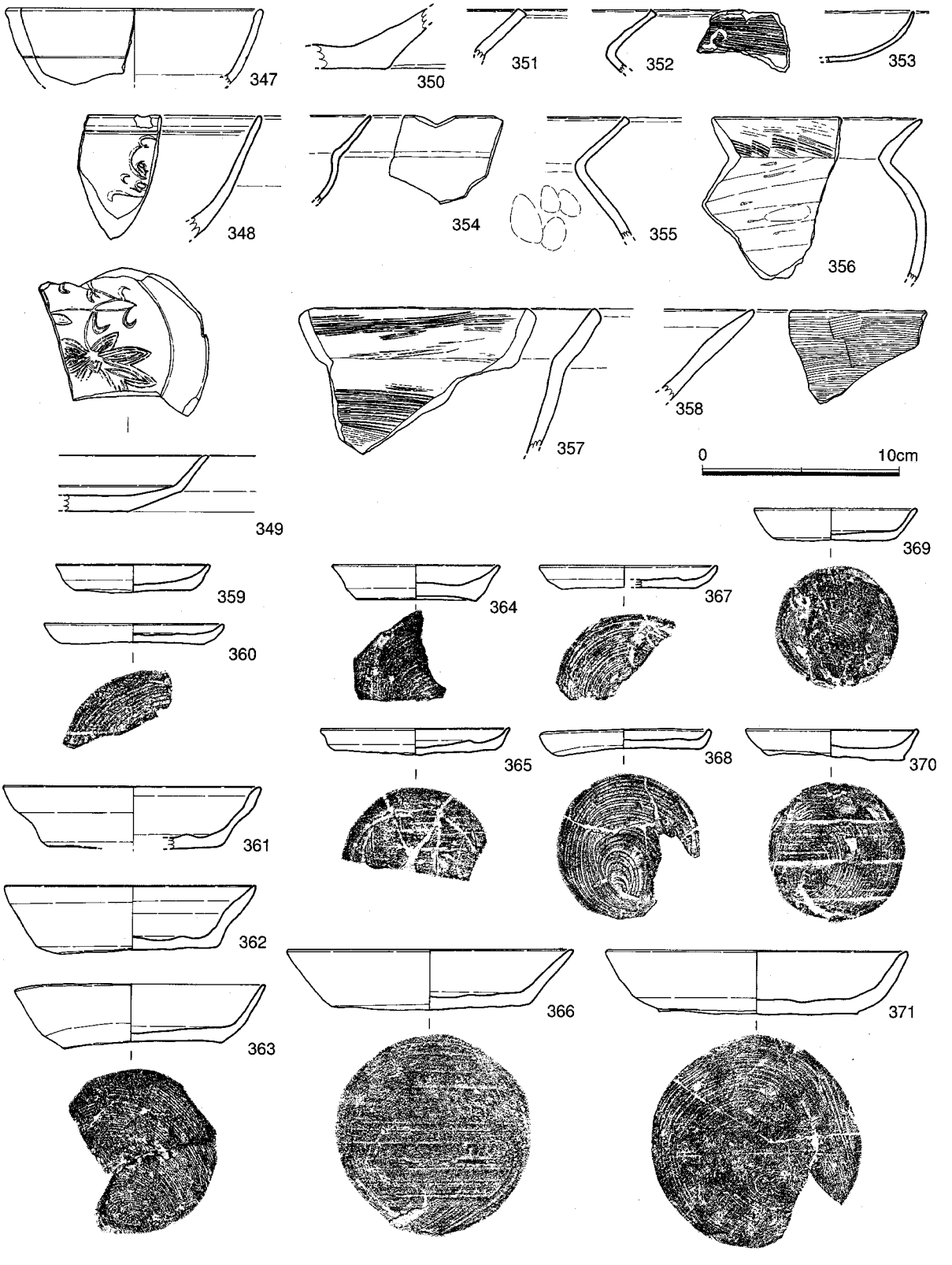


Fig.86　Ⅲ区SK40～43・45・47・49・51～53・56土壙出土土器実測図（1/3）

以上の遺物から、SK40土壙の時期は13世紀初頭～前半頃と思われる。

SK41土壙（Fig.85）

Ⅲ区中央南寄りの地点にて検出した。SD31を切る。南東－北西方向に長軸を持ち、52°東偏する。平面プランはやや不整な小判形を呈し、長径1.12m・短径72cm・深さ72cmを測る。堀方上面はオーバーハングし、断面形は袋状を呈する。

出土遺物（Fig.86）

329は、土師皿である。底面から浮いてではあるが、ほぼ完形で出土した個体である。口径8.0cm・器高1.6cm・底径5.6cmを測る。外底面に回転糸切り痕および板状圧痕を有する。胎土は精良で、焼成は良好である。

以上の遺物から、SK41土壙の時期は、13世紀前半頃と思われる。

SK42土壙（Fig.85）

Ⅲ区中央部、河川氾濫原付近にて検出した。不整な円形の平面プランを持ち、長径1.1m・短径98cm・深さ52cmを測る。断面形は、隅丸長方形を呈する。

出土遺物（Fig.86）

土師器：352は、布留系の甕である。口縁部の小片で、内面に横位のハケメを有し、炭化物の付着が認められる。胎土は精良で雲母片を少量含む。焼成は良好。354は、坩である。口縁から体部にかけての小片で、頸部が大きく外に開く。358は、壺または高坏と思われる。口縁部の小片で、内外両面に横位のハケメが施される。

これらの他に、青磁片・焼土塊が出土している。時期は中世前半か。

SK43土壙（Fig.85）

Ⅲ区西半部にて検出した。長軸を南北方向に向け、20°西偏する。不整な楕円形の平面プランを呈し、長径1.4m・短径1.04m・深さ22cmを測る。

出土遺物（Fig.86）

陶磁器：347は、龍泉窯系青磁碗である。口縁から体部の破片で、口径12.6cmに復元できた。
その他、土師器・瓦質土器の細片が出土している。12世紀前半頃か。

SK44土壙（Fig.85）

Ⅲ区西半部、SK43土壙の西側に位置する。東西方向に長軸を向け、36°北に偏する。不整な楕円形の平面プランを呈し、長径2.7m・短径1.02m・深さ26cmを測る。

遺物は、須恵器・土師器・白磁・青磁が出土したが、いずれも細片のため図示し得なかった。

SK45土壙（Fig.87）

Ⅲ区西半、SK44の北に隣接して検出した。長軸を南東－北西方向にとる。不整な楕円形の平面プランを持ち、長径1.38m・短径70cm・深さ34cmを測る。

出土遺物（Fig.86）

370は、土師皿である。ほぼ完形で出土した個体である。口径8.4cm・器高1.6cm・底径6.9cmを測る。外底面には回転糸切り痕及び板状圧痕が残る。胎土は雲母片を少量含む。

その他、青磁・瓦質土器が出土したが、細片のため図示し得なかった。13世紀前半か。

SK47土壙（Fig.88）

Ⅲ区西半にて検出した。検出当初は竪穴住居とも考えたが、主柱穴・炉跡または竈・床面が検出されなかったため、土壙とした。北半部は、河川氾濫原にかかる。不整な長方形の平面プランを呈し、長軸を南東－北西にとる。長辺2.5m・短辺2.2m・深さ20cmを測る。

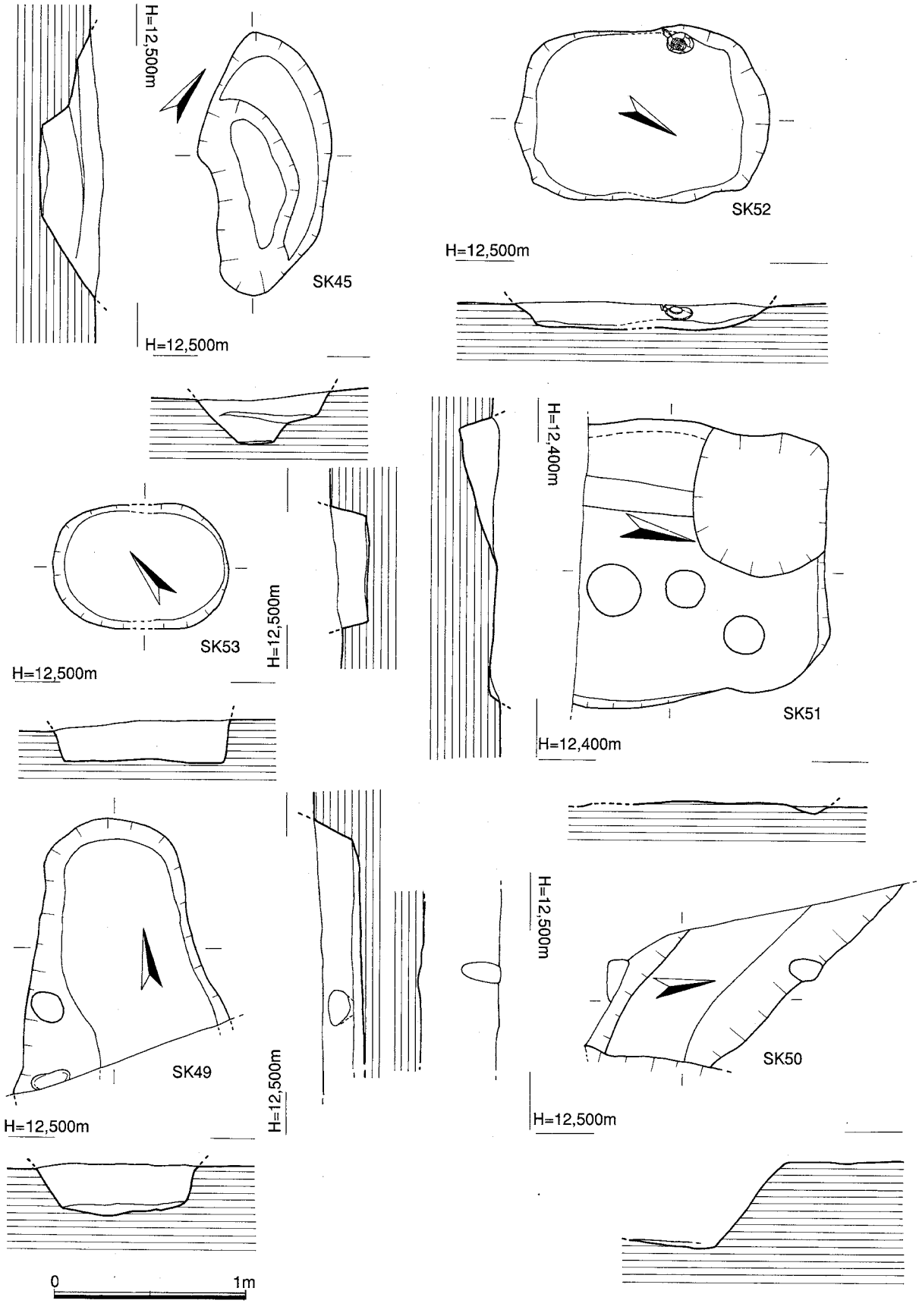


Fig.87　III区SK45・49・50・51・52・53土壙検出状況実測図（1/30）

出土遺物（Fig.86）

陶磁器：349は、白磁である。1/4個体残存するⅧ類の皿で、内面見込みに劃花文を有する。透明感ある黄緑色の釉が施され、外底面は露胎。

土師器：359は、皿である。1/4個体残存し、口径7.6cm・器高1.5cm・底径5.8cmに復元できた。外底面に回転糸切り痕及び板状圧痕が残る。

弥生土器：350は、壺である。底部の小片。混入であろう。土壙の時期は、13世紀前半か。

SK49土壙（Fig.87）

Ⅲ区南西端部にて検出した。長軸を南北に向ける。南半は、調査区外となり調査できなかった。不整な楕円形の平面プランを呈すると思われ、短径は最大1.14m、深さ26cmを測る。

遺物は、東播系須恵質土器・白磁・瓦器いずれも細片が出土。時期は12世紀代か。

SK50土壙（Fig.87）

Ⅲ区南西端部にて検出した。遺構の大部分を調査区外とするため、プラン・法量は不明。深さ42cmを測る。出土遺物は、須恵器・土師器・白磁があり、いずれも細片。時期は中世前半か。

SK51土壙（Fig.87）

Ⅲ区南西端部にて検出した。遺構の南半部は調査区外となり調査できなかった。やや不整な隅丸方形の平面プランとなろう。短辺1.48mを測る。ほとんど削平され、深さは最大18cm。

出土遺物（Fig.86）

土師器：357は、鍋である。口縁から体部にかけての小片で、外面に炭化物が付着する。361は、坏である。ほぼ完形。外底面に回転糸切り痕が残る。口径12.4cm・器高3.5cm・底径8.0cmを測る。13世紀前半から中葉頃。

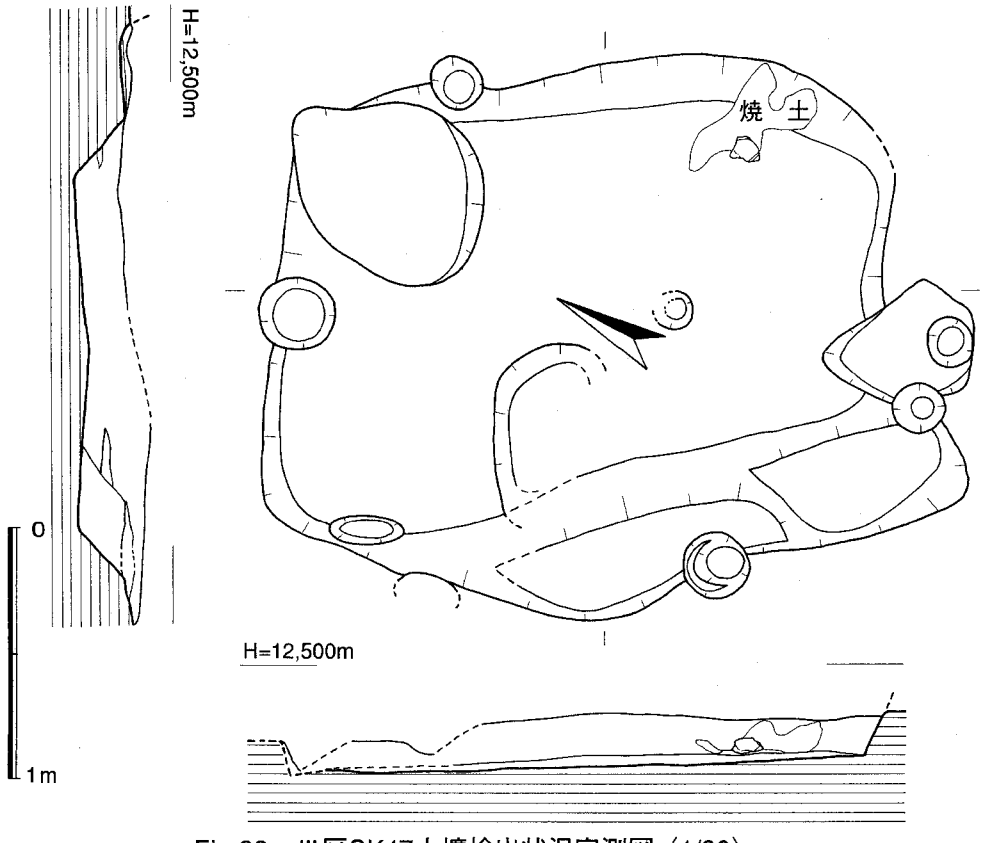


Fig.88　Ⅲ区SK47土壙検出状況実測図（1/30）

SK52土壙（Fig.87）

Ⅲ区東半にて検出。不整な隅丸長方形の平面プランを持つ。長辺1.34m・短辺86cm・深さ14cmを測る。

出土遺物（Fig.86）

364は、土師皿である。口径8.4cm・器高1.8cm・底径6.0cmを測る。外底面に回転糸切り痕を持つ。13世紀前半か。

SK53土壙（Fig.87）

Ⅲ区東半部にて検出した。楕円形の平面プランを呈し、長径80cm・短径64cm・深さ20cmを測る。

出土遺物（Fig.86）

361は、坏である。1/8個体程度残存する破片で、口径12.9cm・底径8.3cmに復元できた。外底面に回転糸切り痕および板状圧痕が残る。その他、青磁細片が出土。13世紀前半頃か。

SK54土壙（Fig.89）

Ⅲ区東半、SK52土壙の南に隣接する。円形の平面プランを持ち、直径68cm・深さ16cmを測る。遺物は、土師器・陶磁器・瓦器の細片が出土した。中世前半。

SK55土壙（Fig.89）

Ⅲ区西半にて検出。SK47に切られる。不整な楕円形の平面プランを持ち、底部は東に大きくオーバーハングする。長径90cm・短径68cm・深さ88cmを測る。遺物は出土しなかった。

SK56土壙（Fig.89）

Ⅲ区西半、調査区南壁近くにて検出。不整な楕円形を呈し、長径1.34m・短径90cmを測る。

出土遺物（Fig.86）

土師器：363は、坏である。3/4個体残存する破片で、口径12.4cm・器高2.9cm・底径8.0cmを測る。

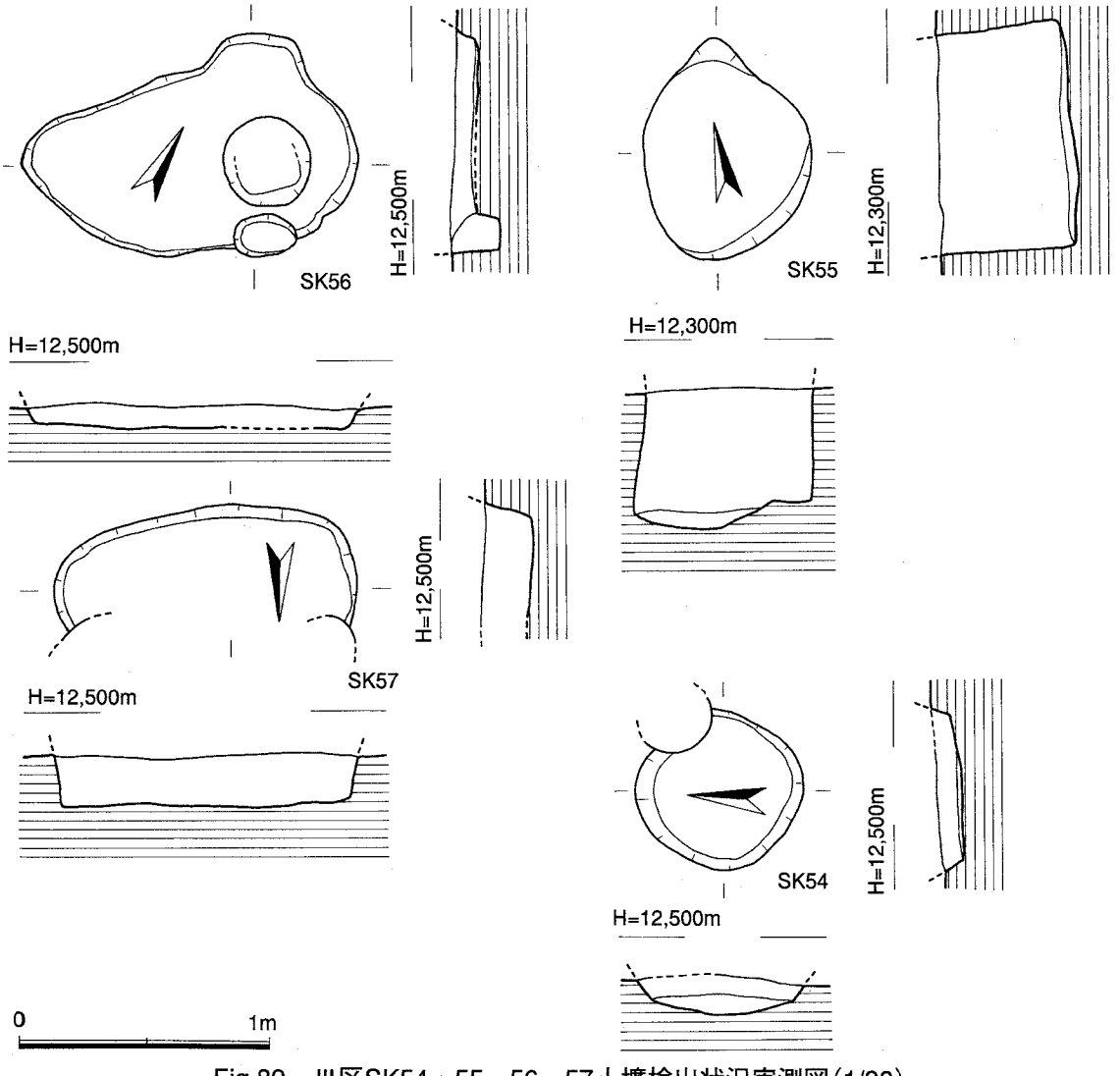


Fig.89　Ⅲ区SK54・55・56・57土壙検出状況実測図（1/30）

外底面には、回転糸切り痕を有する。これ以降は、混入と考えられる。351は、甕である。口縁部の小片。353は、坏である。口縁から体部にかけての小片で、器壁は全体に薄づくり。355・356は、甕である。355は、内面に指押さえ痕が残る。356は、頸部内面に横位のハケメ、胴部内面にヘラ削り痕が残る。その他、白磁細片が出土した。13世紀前半から中葉頃か。

SK57土壙（Fig.89）

Ⅲ区西半にて検出した。SK56に切られる。不整な楕円形を呈すると思われ、長径1.2m・深さ20cmを測る。遺物は、須恵器・土師器・白磁が出土したが、いずれも細片のため図示し得なかった。

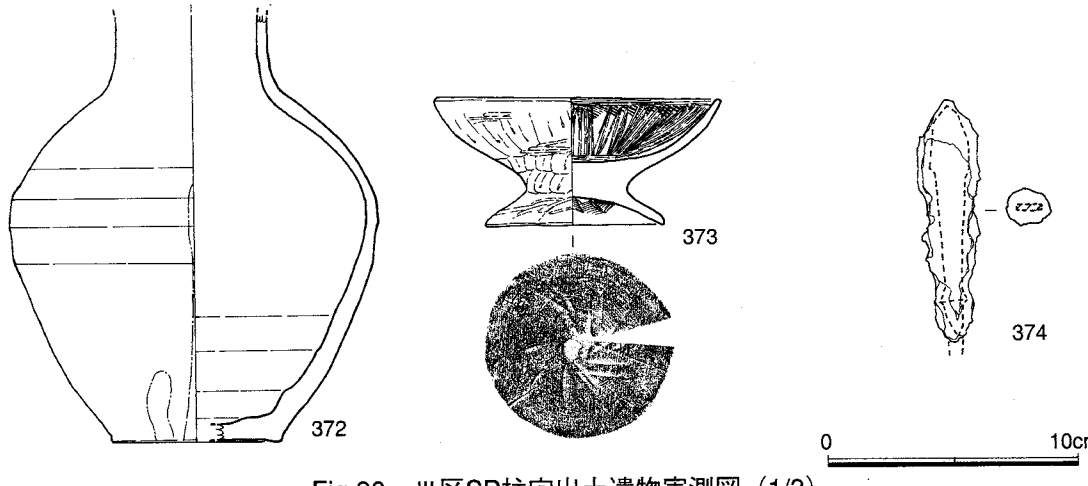


Fig.90　Ⅲ区SP柱穴出土遺物実測図（1/3）

③柱穴（Fig.90・PL.9）

Ⅲ区検出の柱穴は、規模から中世のものが大半であるが、掘立柱建物は、図上でも検出できなかったが、氾濫原際に柱穴列状に並ぶものがあり、本来は建物が存在したのであろう。

陶磁器：372は、陶器壺である。1/3個体残存する破片で、頸部上半及び口縁部を欠失する。胴部径14.4cm・底径6.6cmを測る。SP319（Ⅱ区）出土。透明感ない黒褐色の釉が底部まで施される。胎土は精良堅緻で白色を呈し、焼成は良好である。

土師器：373は、脚付坏である。SP391から完形で出土した。4世紀前半頃か。口径11.1cm・器高5.1cm・底径6.9cmを測る。体部外面は縦位のヘラ削り、脚部外面及び坏部内面はヘラミガキが施される。口縁内面は斜位のハケメ。外底面は左回りのハケメが施される。

鉄製品：374は、鏃である。SP419から出土した。茎部を欠く。残存長9.2cmを測る。

④遺構検出面出土の遺物（Fig.92）

遺構検出面からは、中世の遺物に混じって、遺構面直上の包含層が残っていたため古墳時代後期の遺物が出土している。また、龍泉窯系青磁碗Ⅲ類が出土しているが、この時期の遺構は検出されておらず、氾濫限からの出土であることから、河川からの流入であると思われる。

陶磁器：376は、龍泉窯系青磁碗である。底部の破片で、底径は復元で4.2cmを測る。全面に施釉されるが、畳付部分は釉剥ぎされる。外面には鎬蓮弁文が施文される。釉薬は透明感ある青緑色を呈し、2度掛けされる。

須恵器：377は、坏身である。1/3個体残存する破片で、口径10.9cm・器高4.9cmを測る。外底面に左回りの回転ヘラ削りが施される。

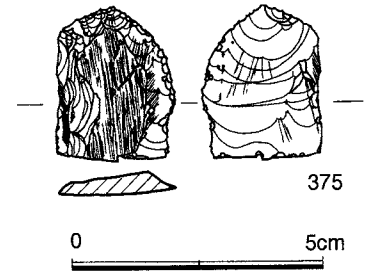


Fig.91　Ⅲ区出土打製石器実測図（2/3）

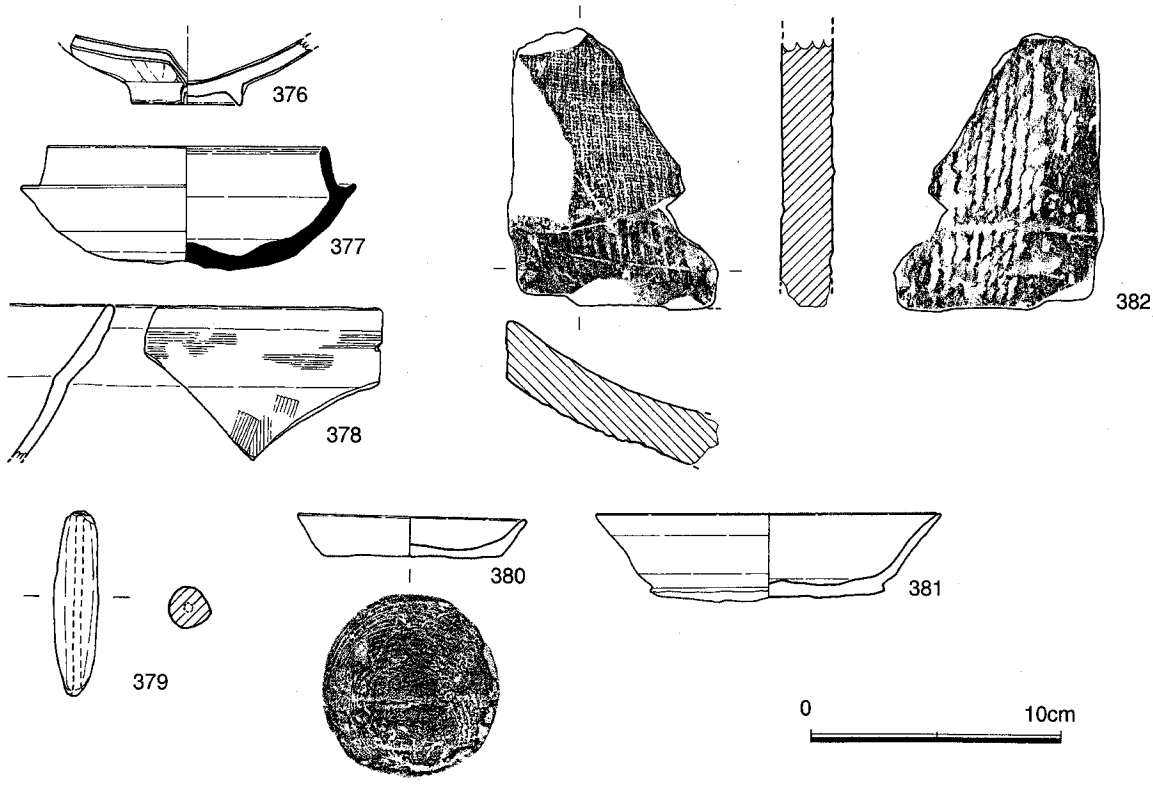


Fig.92　Ⅲ区遺構検出面等出土遺物実測図（1/3）

かえり部内面に段を有する。胎土は精良で、焼成は良好である。

土師器：378は、鍋である。口縁から体部にかけての小片で、外面に炭化物が付着する。379は、土錘である。ほぼ完形で出土した個体である。器長4.9cm・器幅1.2cm・孔径2mmを測る。外面はナデ調整。380は、皿である。4/5個体残存する破片で、口径8.9cm・器高1.7cm・底径6.8cmを測る。内底面は不定方向のナデにて仕上げられる。外底面には回転糸切り痕および板状圧痕を有する。胎土は精良で、焼成は良好である。381は、坏である。1/3個体残存する破片で、口径13.6cm・器高3.5cm・底径8.7cmに復元できた。内底面は不定方向のナデ。外底面には回転糸切り痕及び板状圧痕が残る。

瓦類：382は、平瓦である。長辺方向に端面が残存する破片で、外面に布目痕がのこり、下端に模骨痕が観察される。内面には縦位の縄目叩き痕が残る。燻しはほとんど剥落する。

石器類：375は、黒曜石製の、加工痕ある剥片である。片面にPebble面を残す縦長剥片を加工し、下半を欠失する。中央に孔があり、そこから折れたのであろう。一方の端面に２次加工を施す。残存長3.1cm・器幅2.3cmを測る。

⑤小結

Ⅲ区では、主に中世前半代の遺構が検出された。調査区北半が河川の氾濫原であるため、遺構の分布は北側ほど薄くなる。溝の端部が検出されるなど、集落の縁辺部であったと思われる。SK47には、壁面に焼土塊がまとまって検出されており、何か特殊な機能を有していたとも考えられる。西半部では、氾濫原が遺構の際まで迫っており、おそらく氾濫により遺構面のかなりの部分が削られた可能性が考えられる。また、古墳時代前期のピットが検出されており、当該期の集落が、北は河川の氾濫原のため、おそらく調査区の南側に存在すると思われる。

第Ⅳ章　おわりに

曰佐遺跡群第３次調査の成果については以上の通りである。本調査地において検出したのは、縄文後期から中世後半におよぶ遺構・遺物である。遺構面である黄褐色粘質シルトは削平を受けているものの、全体的に良好な遺構が検出された。縄文後・晩期は、鐘ヶ崎から黒川式併行期の遺物が遺構検出面のシルトから検出された。暫定的に地床炉とした遺構が検出され、縄文期の遺構としたが、遺物僅少のため詳細は不明である。弥生時代および古代の遺構はほぼ皆無で、遺物のみわずかに出土したにとどまる。古墳時代後期は、溝２条・土壙１基を検出。中世前半にはいると遺構の密度は一気に増加する。Ⅰ区・Ⅱ区検出の建物群は、区画溝に囲繞され、輸入陶磁器類を豊富に持つことから中世小名主層の居館跡と見なすことができよう。13世紀後半から14世紀代にかけて遺構・遺物とも激減するが、14世紀末から15世紀にかけて新たに溝・土壙がつくられる。以下では、本調査区において検出した遺構を出土遺物に基づきⅠ～Ⅲ期の３時期に区分し、時期別に周辺の関連遺跡について述べる。

①**第Ⅰ期**（Fig.93）

検出遺構は、SD01・12溝、SK13土壙が挙げられる。出土遺物は、溝から須恵器・土師器、土壙から土師器が出土した。このうち溝からTK209併行期の高坏が３個体、底面から浮いた状態で検出された。溝の廃絶に伴う祭祀的行為の産物か。SK13土壙からは、土師器甑が完形で出土している。これらの遺物から、第Ⅰ期は古墳時代後期、６世紀末頃に位置づけられる。なお、遺構検出面直上の遺物包含層から当該期の遺物が多く出土しており、削平前はさらに多くの遺構が存在していたと思われる他、第３区検出のピットから古墳前期の脚付坏、中世の遺構の埋土に混入する形で古式土師器が少なからず出土した。調査区南側、とりわけ第Ⅲ区の南方に古墳時代の遺構が眠っている可能性が強い。

②**第Ⅱ期**（Fig.94）

検出遺構は、SB01～06建物・SD02～11・13～18・20溝・SK01～12・14～57土壙である。その他、今次調査検出のピットもそのほとんどが該期の所産であろう。主な出土遺物は、青磁碗・皿、白磁碗・皿、陶器梅瓶・鉢、土師器坏・皿・土師質土器椀、須恵質土器椀・鉢、瓦器椀、黒色土器である。

青磁は、龍泉窯系の劃花文を有するものおよび外面に鎬蓮弁文を有するものの２種で、Ⅰ類に分類されるものである。その他、同安窯系の碗が少数出土している。龍泉窯系青磁碗の劃花文タイプが12世紀中葉から後半、同安窯系青磁碗が12世紀後半、鎬蓮弁文が施文される龍泉窯系青磁Ⅰ類は13世紀前半とされる。白磁は、森田分類のⅢ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅶ・Ⅷ類が出土する。11世紀後半から12世紀前半とされる。陶器は、茶褐釉陶器梅瓶などが挙げられる。その他は小片が多く、器種は、四耳壺または無釉陶器鉢となる。茶褐釉陶器は長期間制作されるため時期の特定は困難であるが、おおよそ中世前半代となろう。土師器は、坏類がヘラ切り底と糸切り底の２種類出土しており、ヘラ切り底から糸切り底への過渡期にあたると思われる。

Ⅰ区出土の坏は、口径８～12cm前後で、ヘラ切り・糸切りともほぼ同数量の出土である。Ⅱ区は、完形品が多く柱穴から出土した。口径13～15cm、体部が屈曲しヘラ切り底の個体が多い。Ⅲ区は、口径12～14cm、小皿で8cm前後を測り、すべて糸切り底である。土師質土器椀は、器形から12世紀代

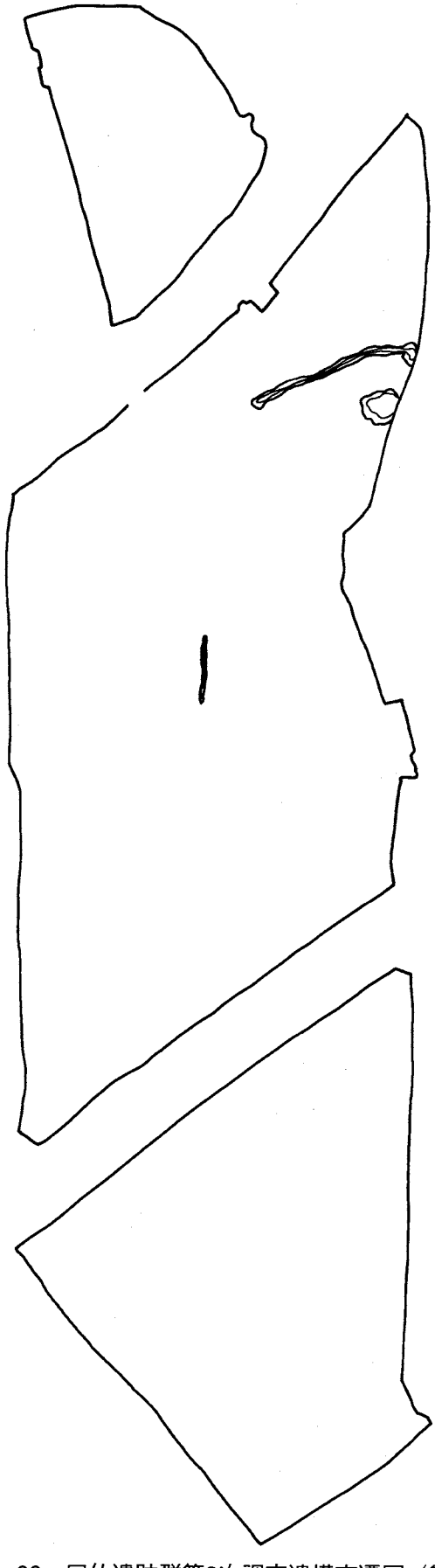


Fig.93　日佐遺跡群第3次調査遺構変遷図（第Ⅰ期）

と思われる。土師器では、おおよそ11世紀後半から13世紀中葉までの幅が考えられるが、その中でⅡ区の建物群が古く、Ⅰ区が中間、Ⅲ区の土壙が新しいということができよう。

須恵質土器は、東播系の椀・鉢が少数出土した。椀が11世紀末～12世紀初頭、鉢類がおおよそ12世紀代の範疇に入るものである。瓦器は、畿内系の搬入品がみられず、在地の製品が主体をしめる。高台が低平であり12世紀中葉から後半であろう。黒色土器は、前述の土器よりはいささか時期がさかのぼる。SK20土壙から内黒・両黒とも一括して出土しており、在地の製品で11世紀初頭以降であろう。共伴する土師器坏から、遺構の年代は12世紀前半代と思われる。

これらの遺物から、第Ⅱ期の年代は、一部に11世紀後半の遺物が混じるものの、主体となる時期は12世紀前半からであり、白磁Ⅸ類・龍泉窯系青磁Ⅲ類の遺構に伴うはっきりした出土例がみられないことから、13世紀中葉頃までとする。

さて、次に当該の時期に含まれる遺構について検討してみよう。先に居館跡であるとした建物群であるが、SB01～06の6棟を復元している。これらのほかにも建物になりそうな柱穴がみられるが、対応する柱穴がないなどの理由で建物にはしていない。おそらく遺構面直上の遺物包含層を除去しきれなかったため、すべての柱穴を検出できなかったのであろう。建物の方位は、ほぼすべて同一である。SB04建物のみ若干長軸を東方に振っており、時期差が考えられるが、遺物からは明確にしえなかった。SB02建物の柱穴埋土にのみ焼土・炭化物が多く含まれており、既存の建物焼失後新たに建て直された建物の可能性が強い。SB01・03建物との間隔が狭小にすぎるため、おそらくこの2棟の廃絶後、それほど

間をおかずに建てられたのであろう。

次に溝である。居館の主な構成要素として、掘立柱建物とそれを囲繞する溝があげられるわけだが、それと思われる溝の出土遺物は、出土遺物からみれば建物群より若干後出する。が、これらの遺物は溝の埋没した時期を示すものであり、建物に平行・直行することからこれらの溝は本来建物群に伴っていたと考えるのが妥当であろう。

SD16・20溝とも居館の周囲を区画する溝とは考えにくく、居館内の建物群を区画する溝であった可能性が強い。SD08溝もそれに当たろう。SD02・03・13・15は、埋土や底面の状況から水路と思われる。居館に伴う遺構とは考えにくいが、先後関係はよくわからない。

土壙は、Ⅰ・Ⅱ区では、井戸と思われるSK02土壙・墳墓と思われるSK29・31・32土壙をのぞき、機能はよくわからない。Ⅲ区では、SK41・42・52・53・54土壙など、遺物の出土状況から墳墓と思われるものが多く、河川氾濫原に面したこの周囲が、墓地としての役割を与えられていた可能性が高い。このことから、12世紀前半代は、居館内に墳墓を作り、13世紀に入ってからは、特に墓地を設定し、そこに埋葬をするように埋葬形態が変化したとも考えられる。では、13世紀代には、居館はどこへ行ったのだろうか。

結果的に該期の居館跡は、調査区内では検出できなかった。しかし調査区内に墓域がかかることからそう遠いところに移ったとは考えにくく、今後周囲の調査を行うときは注意を要する。居館内に墳墓を設ける形態は、曰佐遺跡群の既往の調査においても検出されており、第Ⅱ期の特徴といえよう。ただ、SK31土壙には、埋土に焼土・炭化物が含まれ、現地火葬墓の可能性もあるが、骨片が検出されず、遺物量も多いことから、はっきりとは断定していない。

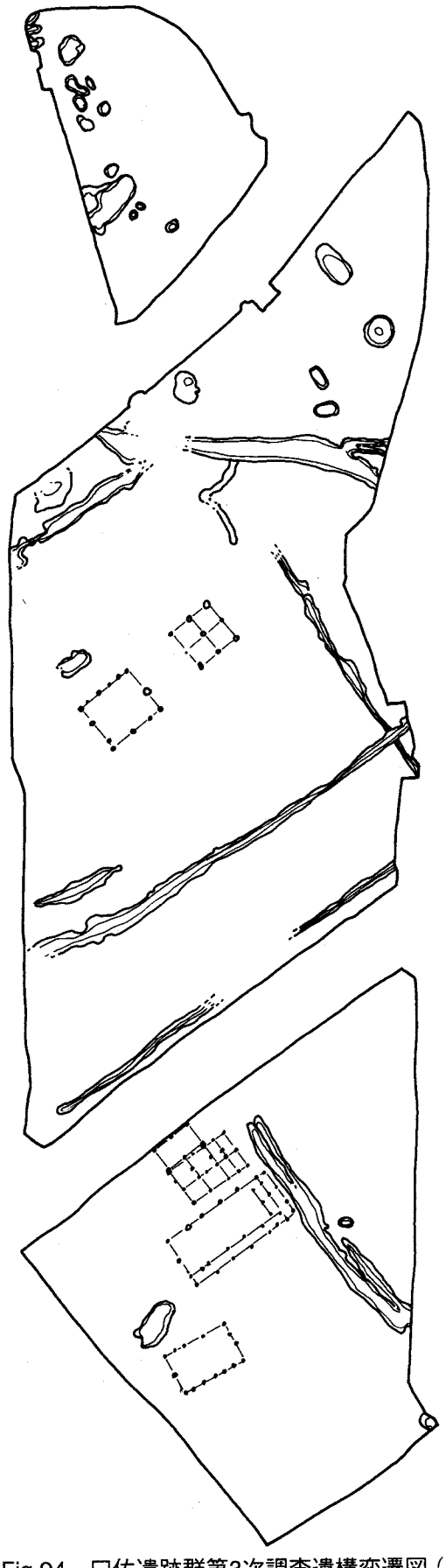


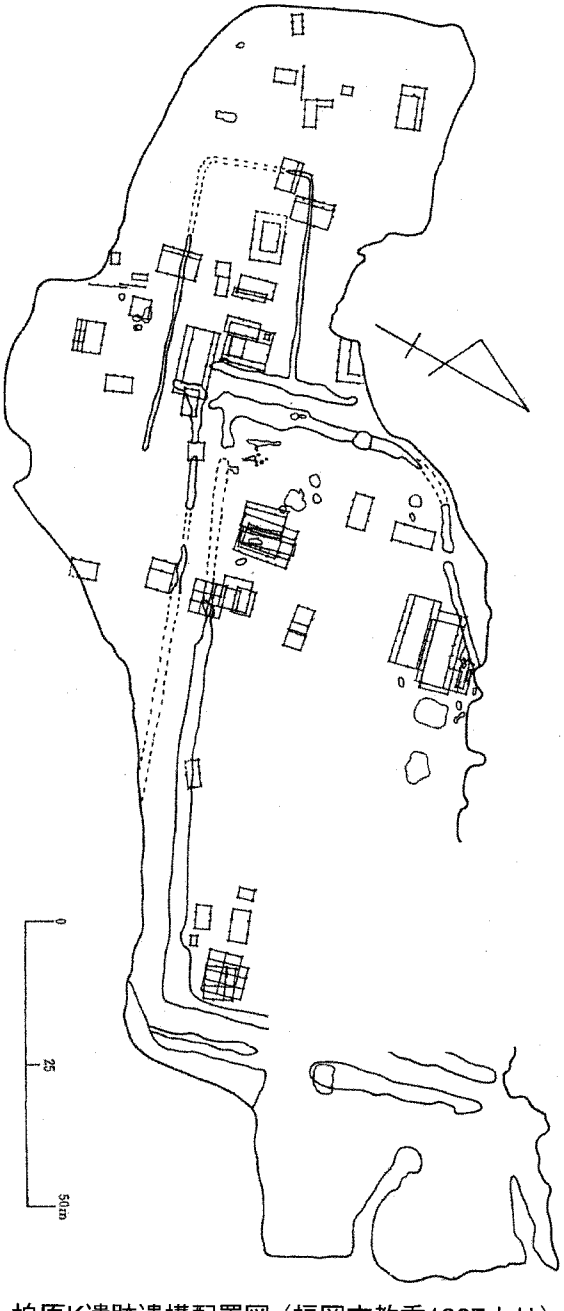
Fig.94　曰佐遺跡群第3次調査遺構変遷図（第Ⅱ期）

以上、第Ⅱ期に含まれる12世紀代の居館跡・13世紀前半から中葉の土壙について検討を加えてきた。ここで、時期的に今次調査の第Ⅱ期に近い、周辺地域の類例について概観したい。

第Ⅱ期にあたる12世紀前半から13世紀中葉頃に時期的に最も近い居館跡と思われるのが、柏原K遺跡での調査結果である。

柏原K遺跡は、標高約600mを測る油山、同300mを測る片縄山に源を発する樋井川の上流域右岸、谷部沖積地奥の河岸段丘上に位置する。検出遺構は、方形の区画溝を構成する溝15条・掘立柱建物57棟・土壙墓・土器溜を含む土壙28基・井戸・製鉄遺構・柵列である。これらの年代は、13世紀後半から14世紀前半代と考えられている。

報告者は、これらの遺構を４期に区分している。第Ⅰ期は、方形の外区を有する２重の区画溝で地割りされた範囲とその周辺に、掘立柱建物21棟および柵列が広場を介して配置される。第Ⅱ期は、掘立柱建物14棟から構成される。区画溝は、外区は廃絶するものの、存続していた可能性が強いとされる。第Ⅰ期・第Ⅱ期とも門に関係するとされる建物が存在する。第Ⅲ期は、区画溝が埋没し、調査区西半に建物が10棟集中して配置される。第Ⅳ期は、第Ⅲ期の配置を踏襲し、建物15棟が配置される。



柏原K遺跡遺構配置図（福岡市教委1987より）

柏原K遺跡の居館跡は、処処に大規模な建物がみられ、初期には2重の区画溝で囲繞されるなど規模が大きく、薩摩国入来院に地頭職を有する渋谷氏の恩賞地として推定されていることから、武家の屋敷であることが考えられている。曰佐第3次調査検出の居館跡と直接比較するのは適切ではないが、ほかに類例を検索できなかったためここにあげた。今次調査では、居館を直接囲繞する区画溝は検出できなかったが、おそらく方形の区画溝が、建物と方位を一にして周囲を巡るものと思われる。既往の第１次・２次調査においても同時期の掘立柱建物が検出されているが、今次調査区からは遠く離れているため、同一の居館の一部になるとは考えにくい。複数の居館あるいは屋敷が散在していた景観が推定される。

③第Ⅲ期（Fig.95）

検出遺構は、SD09・19・21・30、SK17・18である。主な出土遺物は、青磁碗・白磁碗・土師器坏・皿、瓦質土器である。

青磁は、龍泉窯系の、内面見込みに4カ所の目跡を有する碗、外面に雷文帯を有する碗の2種類がみられる。白磁は、Ⅳ類・Ⅴ類がみられ、混入と思われる。土師器は、外底面に回転糸切り痕を有するの

が大半を占め、ヘラ切りの個体も少数含まれるが、混入と見なせる程度の数量・出土状況である。瓦質土器は、鉢が大半である。中世後半代であろう。詳しい時期を決定するには遺物が少ないが、遺構に伴う龍泉窯系青磁碗から、第Ⅲ期は、おおよそ14世紀末から15世紀代と考えられる。ここでも龍泉窯系青磁Ⅲ類・白磁Ⅸ類はほとんど出土していない。

さて、次に当該の時期に含まれる遺構について検討する。検出した遺構は、前述の通り溝と土壙である。

SD19溝はⅠ区半ばで東に屈曲する。おそらくⅡ区検出のSD21溝が、SD19溝の続きになると思われる。となると、SD19・21によって方形の区画溝が形成されることとなる。おそらく今次調査区北側に、14世紀末～15世紀代の居館跡が存在するのだろう。SD09溝は1区西壁の向こうに逃げていく。Ⅲ区南東隅からSD30溝が検出されており、おそらくこれがSD09溝の続きであろう。この溝には流水・滞水の痕跡はなく、機能は不明である。

土壙は、SK17土壙から茶褐釉陶器小口瓶が完形で出土している。底面は、シルト層を貫き、砂層まで達しており、現在湧水はみられないが井戸としての機能があったとも考えられる。SK18土壙の機能は不明である。

以上、第Ⅲ期に当たる遺構について若干の検討を行った。Ⅱ期に比べ遺構数が圧倒的に減少するため、当該期の明確なイメージはつかみにくいが、上記のほかに所見をいくつか以下にあげてみたい。溝には、途中で突如途切れる部分がみられた。漸移的に浅くなるのではなく、削平による消滅とは考えにくい。区画部分の出入り口の可能性が考えられる。井戸と思われる土壙が検出されるなど、建物こそ検出されなかったが、14世紀末～15世紀にかけて、今次調査

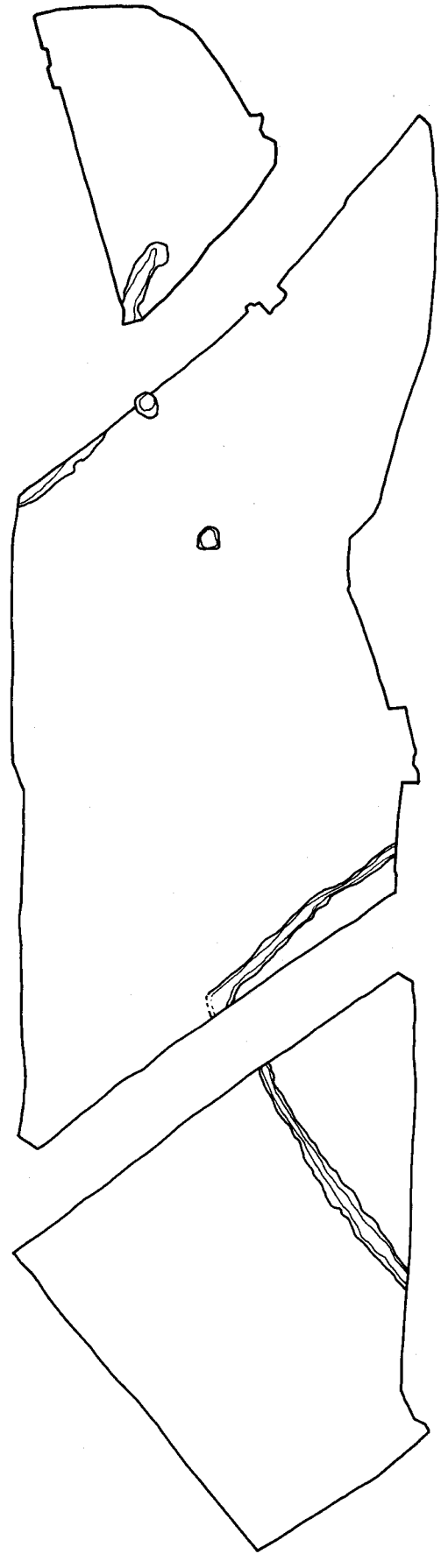


Fig.95　曰佐遺跡群第3次調査遺構変遷図（第Ⅲ期）

区周辺に居館跡が存在した可能性が強い。

ここまで、第Ⅲ期に含まれる14世紀末～15世紀代にかけての溝・土壙について検討を加えてきた。ここで、時期的に今次調査の第Ⅱ期に近い、周辺の類例について概観したい。

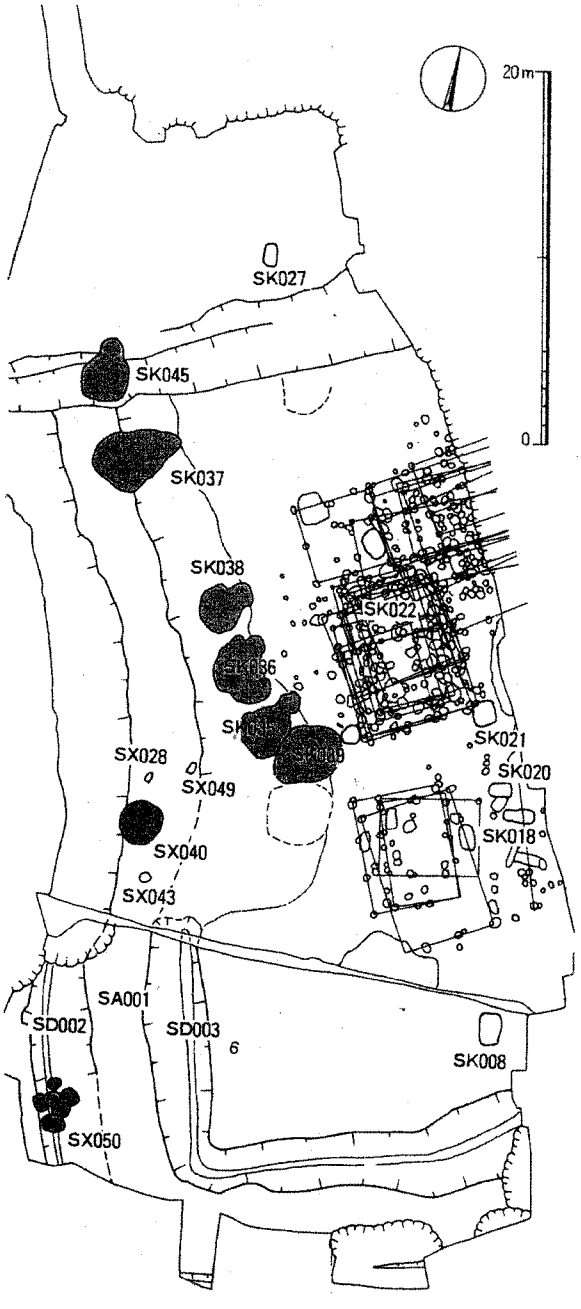
14世紀末～15世紀代という第Ⅲ期に時期的に近い類例は、諸岡遺跡14・17次調査、那珂川町所在平蔵遺跡、原遺跡9次調査があげられる。

諸岡遺跡は、那珂台地の東側600mの独立台地上に位置する。以前から14・17次調査区内には土塁が残存し、中世の居館跡（諸岡館址）の存在が予想されていた地点である。土塁は高さ1～2mを測り、東西約70m・南北約55mと推定されている。

検出された遺構は、掘立柱建物24棟・土壙・地下式土壙である。土塁の外周および内周には溝が回る。深さは1mほどである。報告者は、これらの建物を10期に分類し、変遷を論じている。館内建物は、1時期4～6棟程度と推定されている。

出土遺物は、在地土器のほか、元～明代の中国陶磁器・高麗～李朝の朝鮮陶磁などの構成比率が高いほか、美濃・東播・備前などの国産陶器もみられる。これらの遺物から、館は、14世紀後半に築造され、16世紀中葉前後まで存続したと報告されている。

諸岡館址は、台地の突端に築造され、土塁と溝を巡らすなど柏原K遺跡とは異なり、いうなればより防御的な、周辺村落とは隔絶した施設という感をうけた。本遺跡も武家の居館的な様相を呈し、位置も形態も村落に近い、曰佐遺跡3次調査検出の居館とは、いささか性格が異なるように感じる。

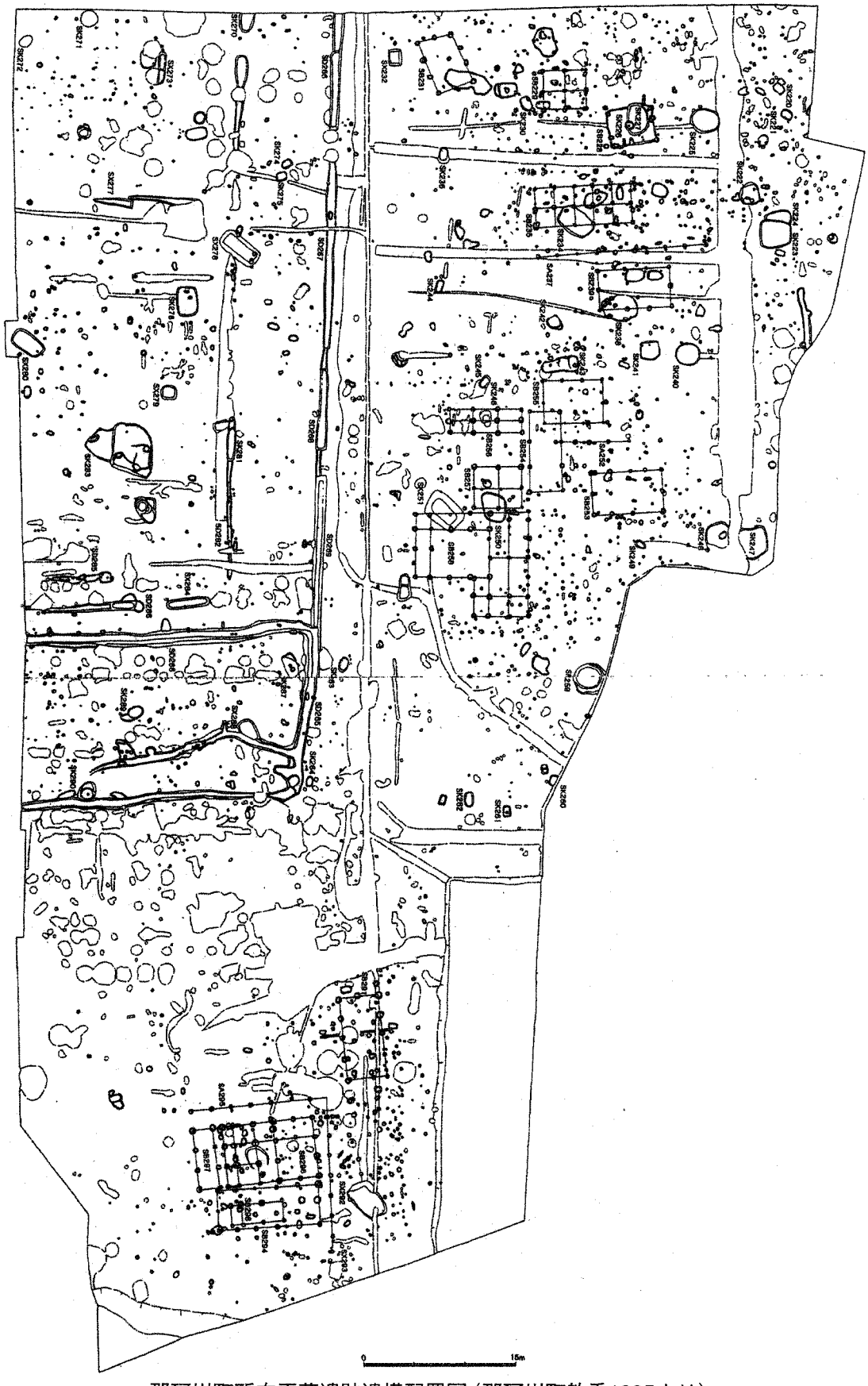


諸岡館址遺構配置図（福岡市教委1984より）

平蔵遺跡は、丘陵の先端部に位置し、北方に広がる平野部を見下ろす形になろう。検出された中世の遺構は、掘立柱建物18棟・溝8条・土壙41基・ほか、柵列である。

掘立柱建物は大きく3群に大別される。それぞれ大型の建物に小規模な建物が集まっており、柏原K遺跡のようなセット関係が成り立つのかもしれない。主軸は、東西方向と南北方向の2方向がみられるという。埋土が4種にわたるため、4時期に分類できるのかもしれない。溝は、1条をのぞき長大な土壙状を呈するとされる。

土壙は、そのうち9基が木棺墓とされ、1基をのぞいて溝状遺構で区画される部分に営まれている。この区画に建物は認められず、報告者は「何らかの空間的制約」の存在を示している。これらの遺構

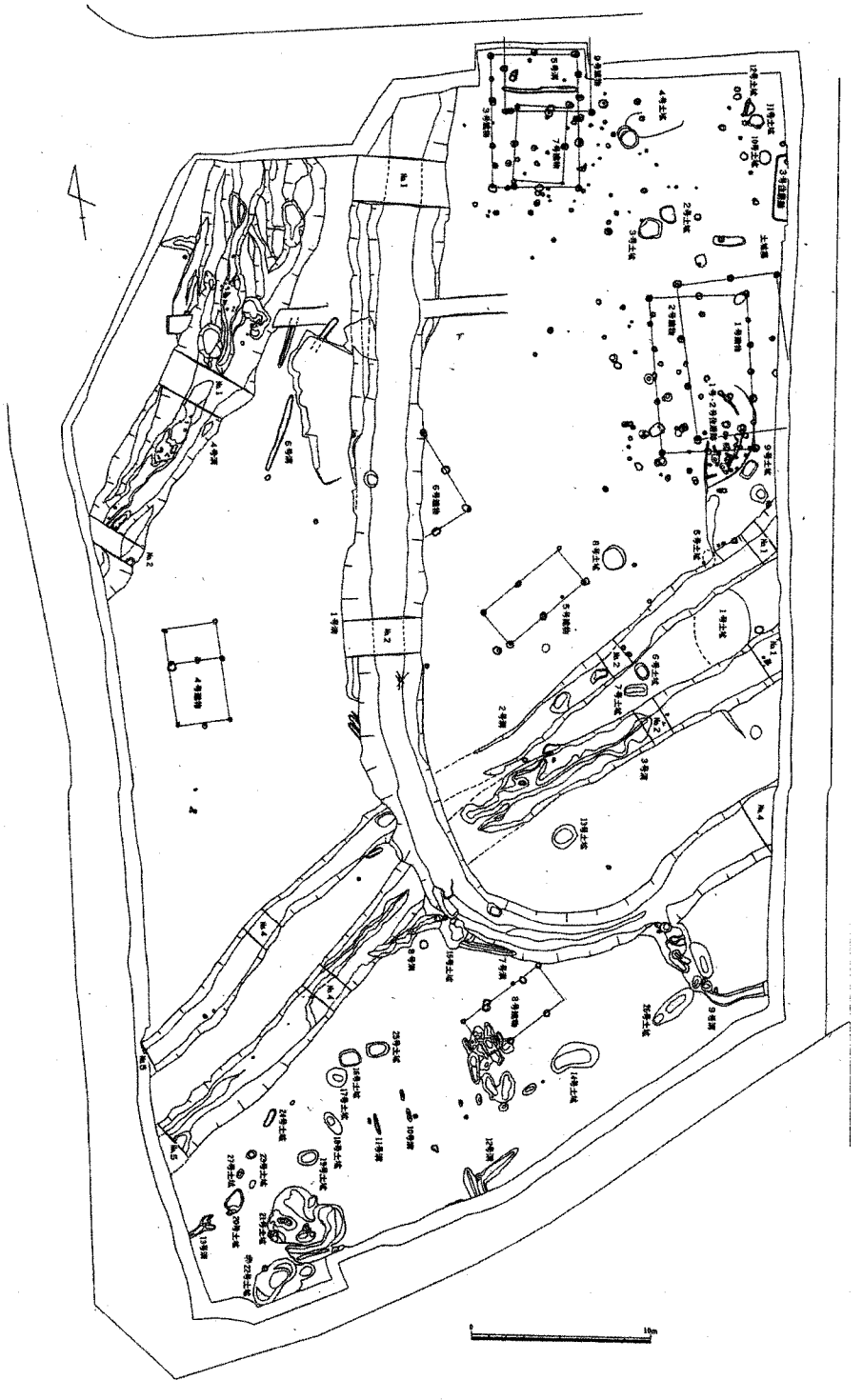


那珂川町所在平蔵遺跡遺構配置図（那珂川町教委1995より）

の時期は、1基の土壙をのぞき15世紀代とされる。また、溝の一部、いくつかのピットから染付が少量出土しており、やや時期が下るものも含まれるとされる。

原遺跡9次調査地は、金屑川東岸の沖積地に位置する。中世の検出遺構は、溝1条・掘立柱建物5棟などである。建物は南北方向に主軸を持ち、溝は矩形に巡る。出土遺物は、土師器・青磁・白磁・陶器・土師質土器・瓦質土器が検出されている。これらの遺物から、この館跡は、15世紀を前後する時期に成立した可能性が指摘されている。建物は最低3回の建て直しが認められ、溝には水が引かれていたと考えられている。出土遺物から、これは名主層の館跡とされている。

この例が、時期的にはⅢ期に近いが、今次調査検出の居館跡に最も近い様相を呈してい的施設であった可能性も考えられる。

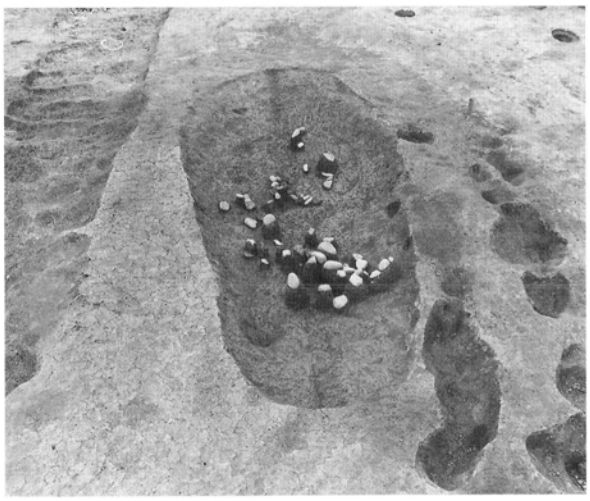


原遺跡9次調査遺構配置図（福岡市教委1986より）

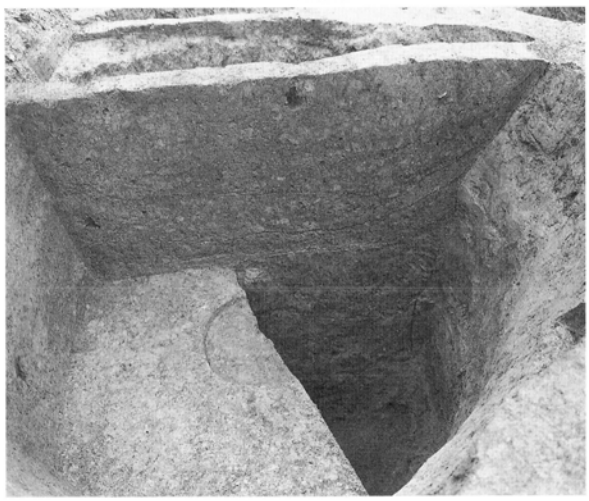
以上、各時期ごとに遺構の検討を行ってきたが、あらためて曰佐3次調査検出の溝や建物の方位をみると、現在の生活道路とほぼ並行・直交することが見て取れる。これは、12世紀に曰佐周辺の開発が開始された時に行われた地割りが、現在まで残存していることを示していると思われる。

図　　版
PLATES

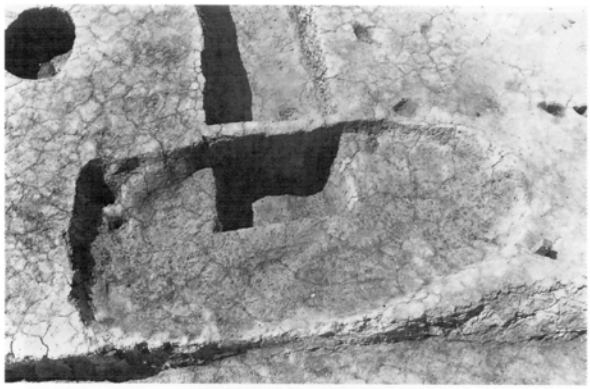
1　第Ⅰ区調査区全景（東から）



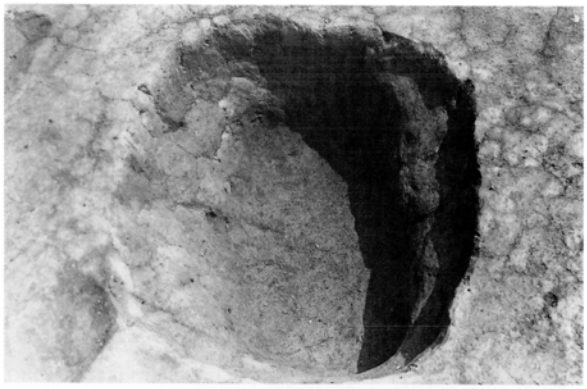
2　Ⅰ区SK01土壙出土状況（東から）



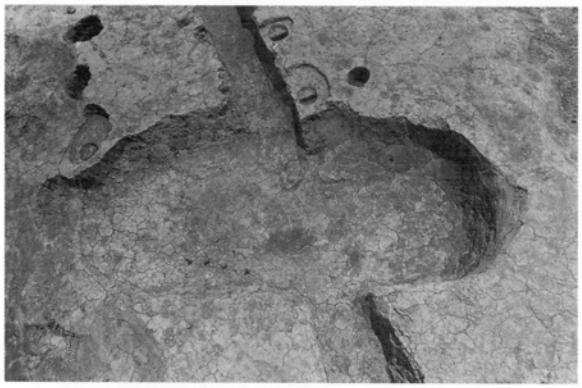
3　Ⅰ区SK02検出状況（西から）



1　Ⅰ区SK04土壙出土状況（南から）



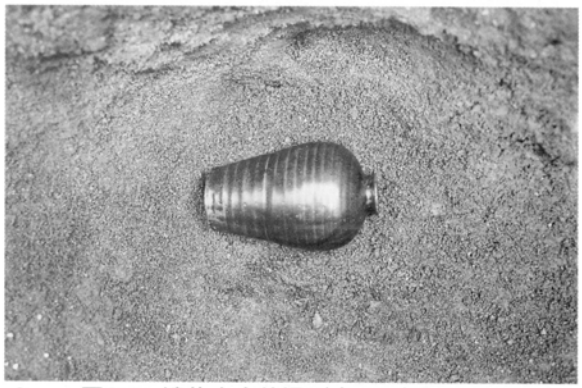
2　Ⅰ区SK07土壙出土状況（東から）



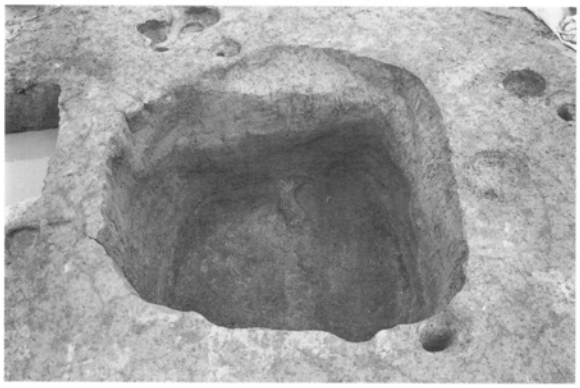
3　Ⅰ区SK12土壙出土状況（西から）

4　Ⅰ区SK14土壙出土状況（東から）

5　Ⅰ区SK17土壙出土状況（東から）

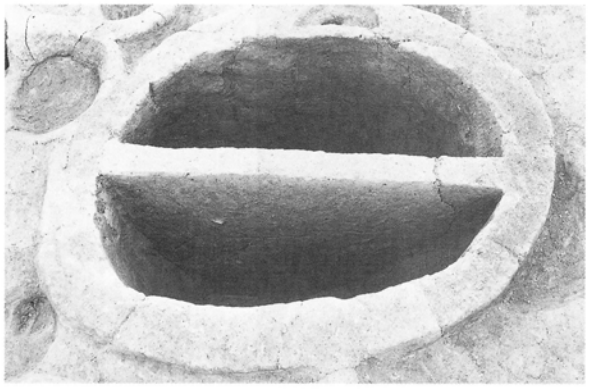


6　Ⅰ区SK17遺物出土状況（東から）

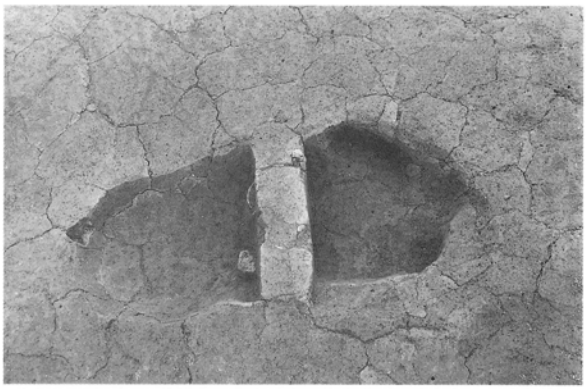


7　Ⅰ区SK18土壙出土状況（東から）

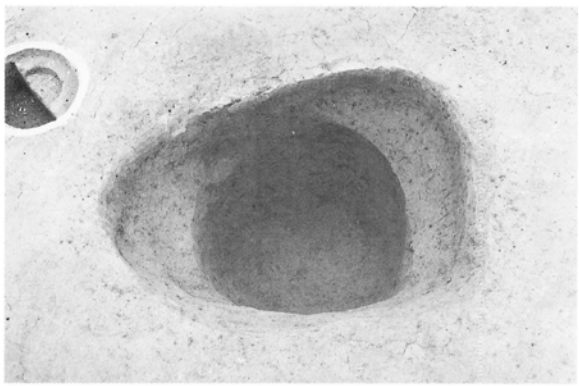
8　Ⅰ区SK20土壙出土状況（東から）



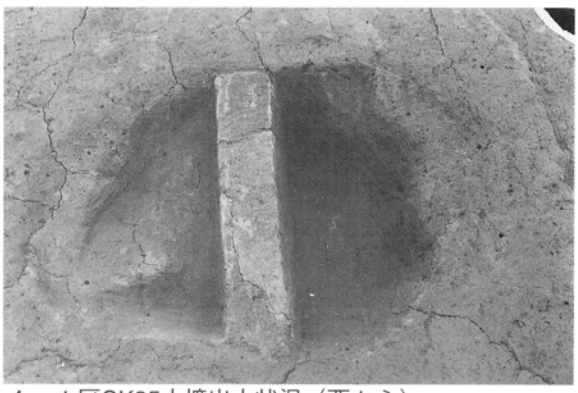
1　Ⅰ区SK21土壙出土状況（東から）



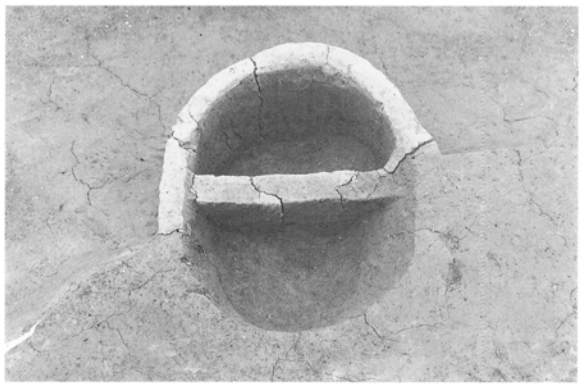
2　Ⅰ区SK23土壙出土状況（西から）



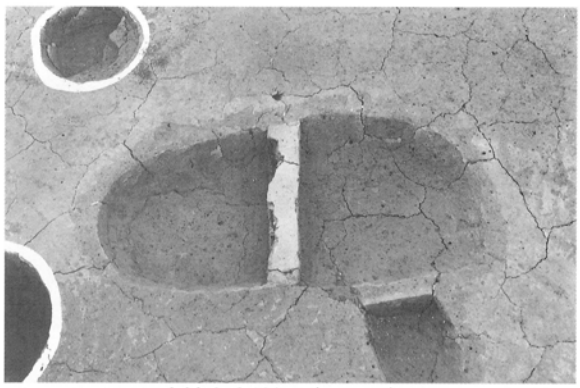
3　Ⅰ区SK24土壙出土状況（西から）



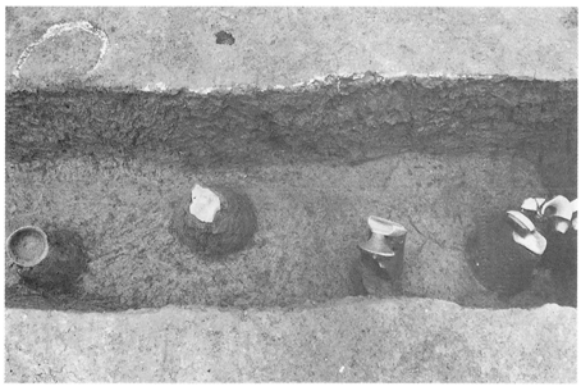
4　Ⅰ区SK25土壙出土状況（西から）



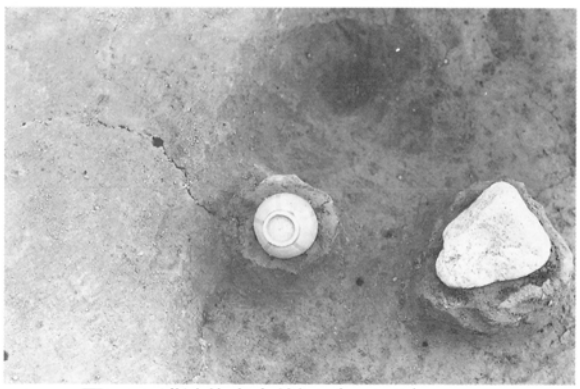
5　Ⅰ区SK26土壙出土状況（東から）



6　Ⅰ区SK27土壙出土状況（西から）

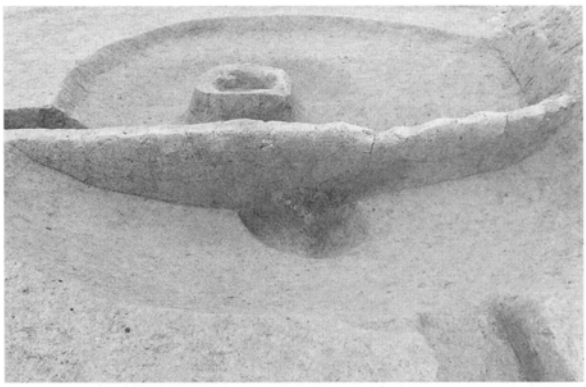


7　Ⅰ区SD01溝遺物出土状況（西から）

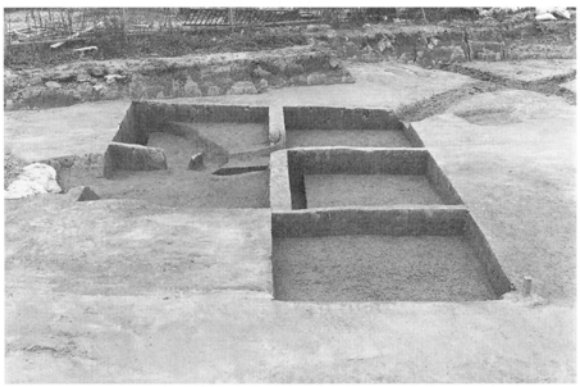


8　Ⅰ区SD04溝遺物出土状況（西から）

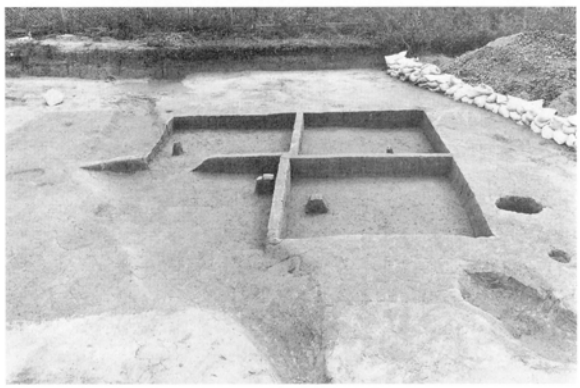
1　Ⅰ区調査区東部遺構全景（南から）



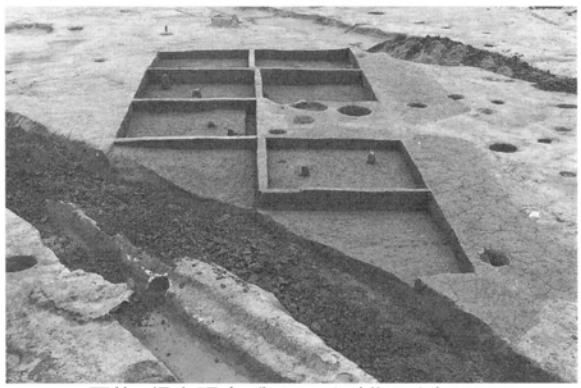
2　Ⅰ区南東側炉跡出土状況（西から）



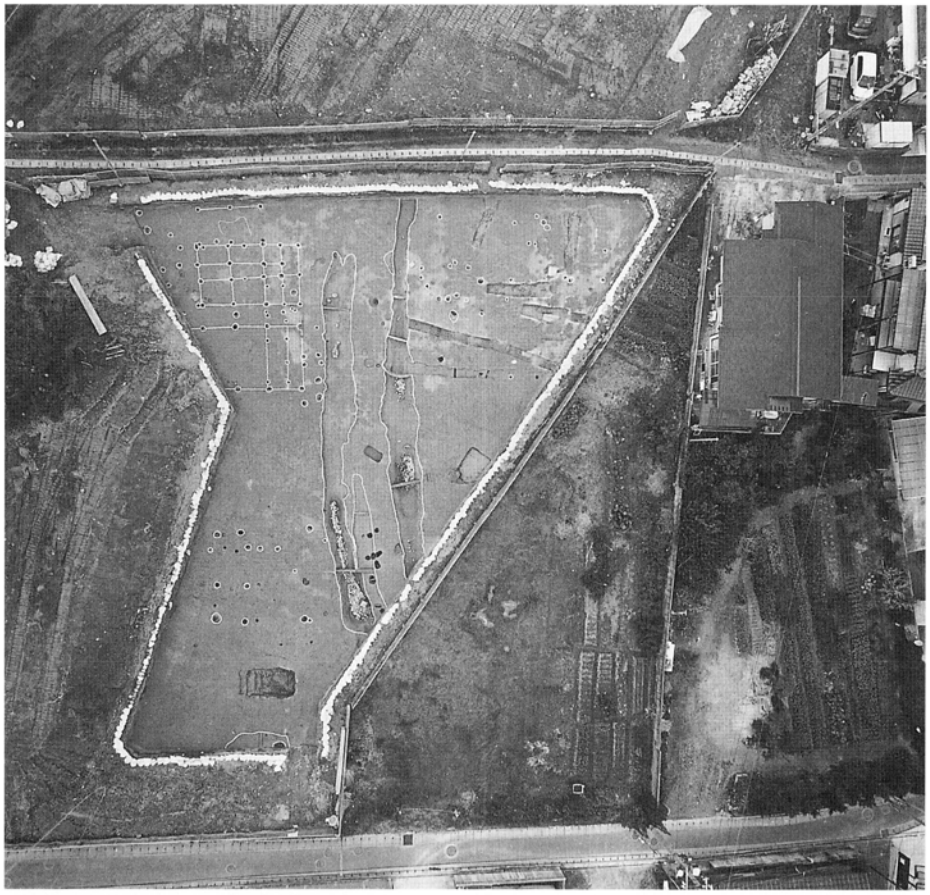
3　Ⅰ区第1縄文調査グリッド（南から）



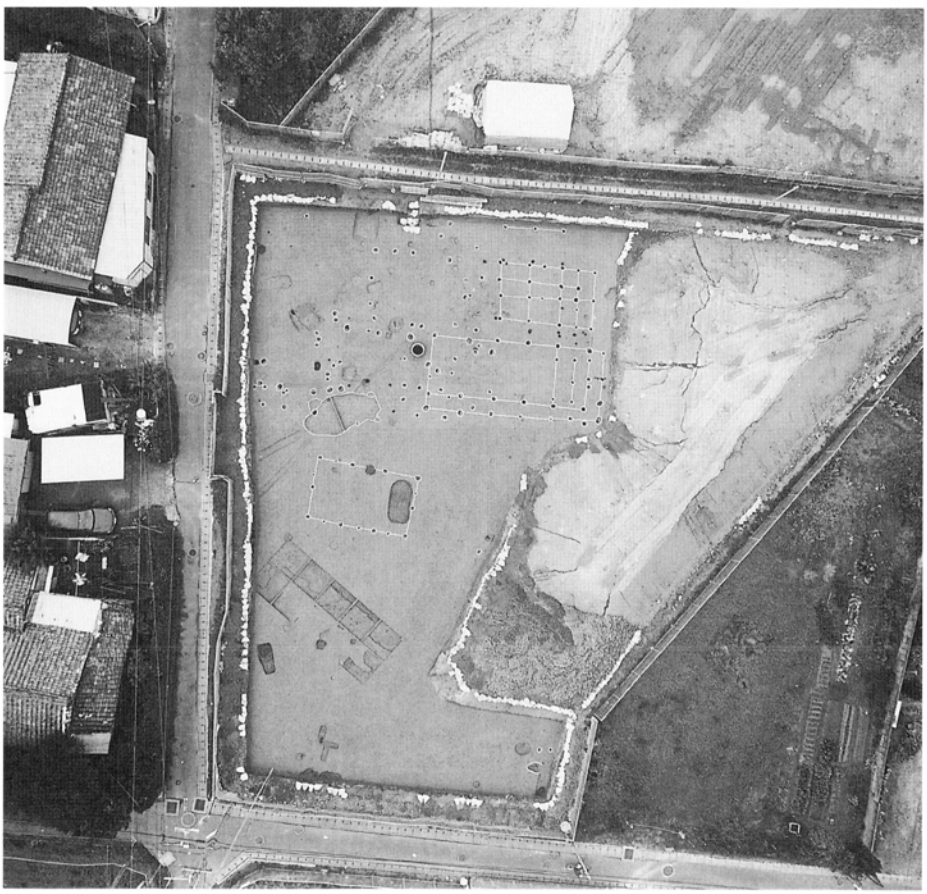
4　Ⅰ区第2縄文調査グリッド（北から）



5　Ⅰ区第4縄文調査グリッド（北から）



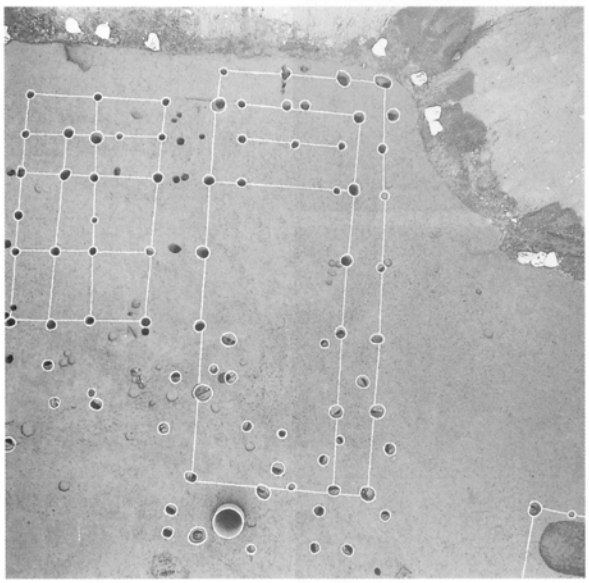
1　第Ⅱ区北半部遺構出土状況全景
（東から）



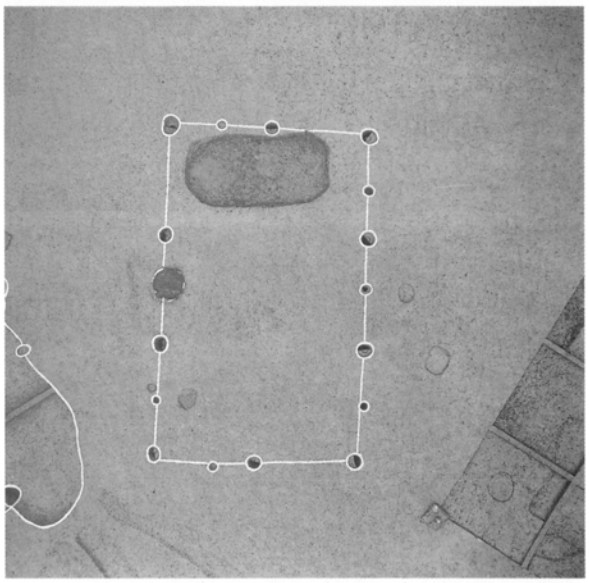
2　第Ⅱ区南半部遺構出土状況全景
（東から）

1　II区北半部遺構出土状況全景（東から）

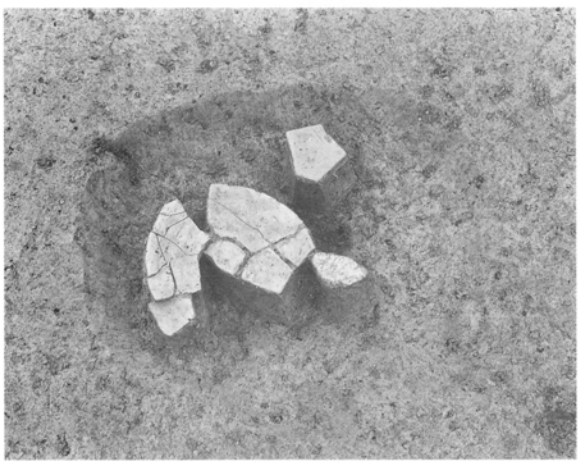
2　II区南半部遺構出土状況全景（南から）



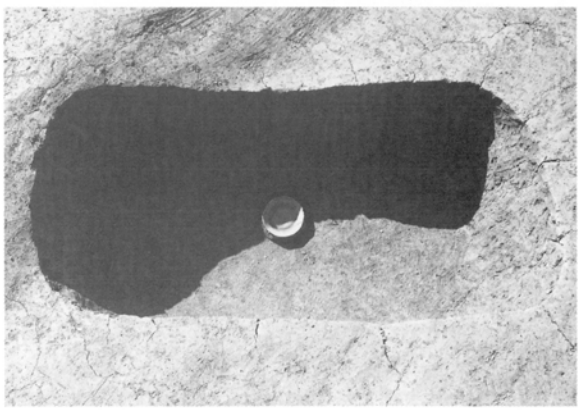
3　II区SB03建物出土状況（西から）



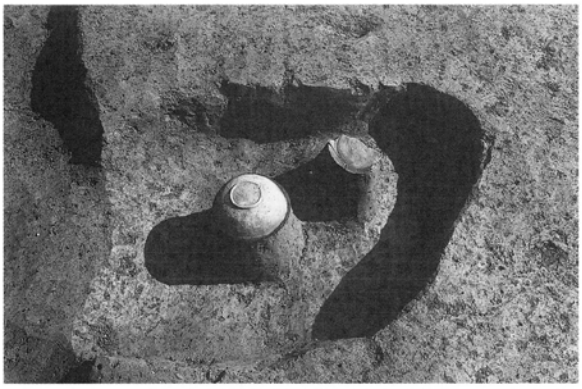
4　II区SB04建物出土状況（西から）



5　II区SK28土壙土師器出土状況



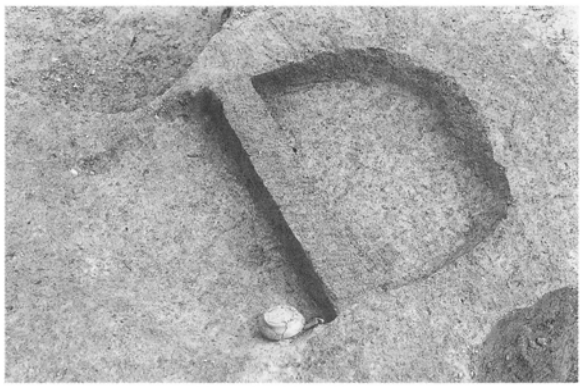
6　II区SK29土壙土師器出土状況



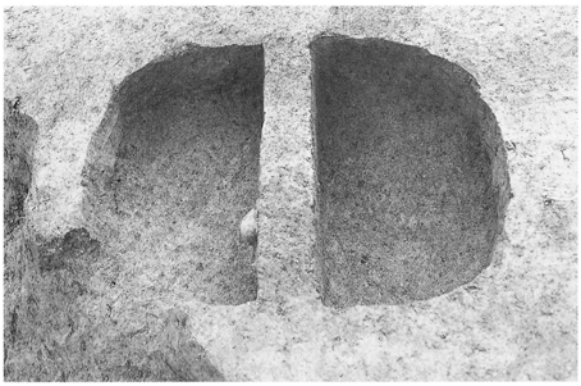
1　II区SK32土壙瓦器・土師器出土状況（北から）

2　II区SK32土壙遺物出土状況（西から）

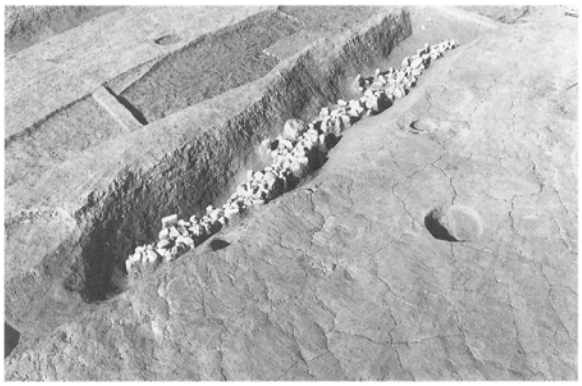
3　III区SK40土壙遺物出土状況（西から）



4　III区SK52土壙出土状況（西から）

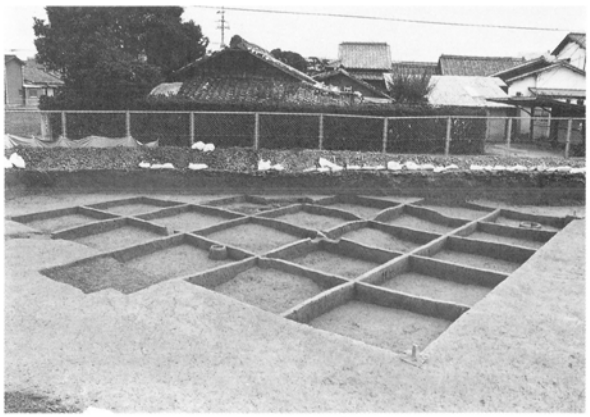


5　III区SK55土壙出土状況（北から）



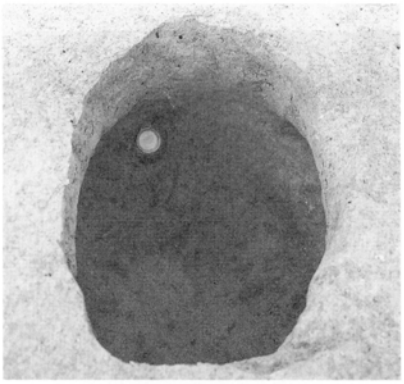
6　II区SD20溝内礫群出土状況①（南から）

7　II区SD20溝内礫群出土状況②（南から）

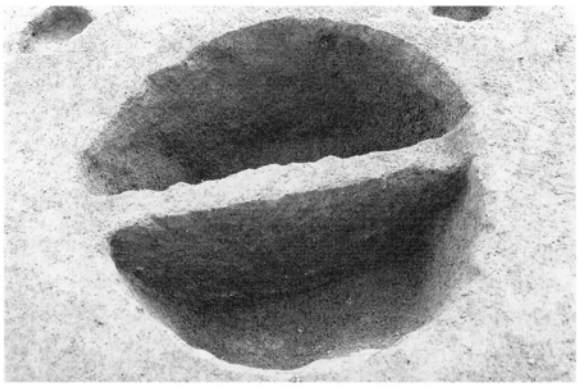


8　II区縄文グリッド（北から）

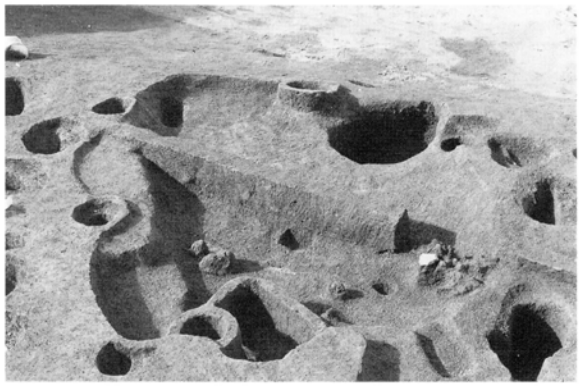
1　第Ⅲ区全景（南から）



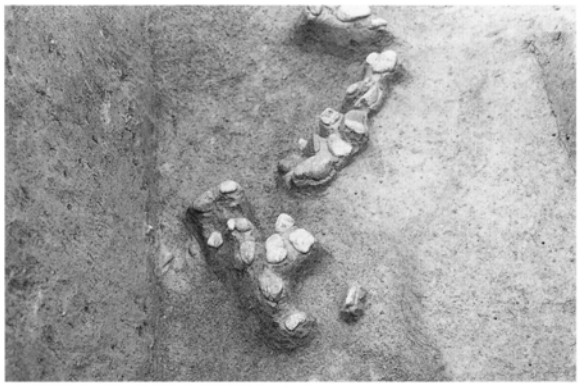
2　Ⅲ区SK41土壙出土状況（南から）



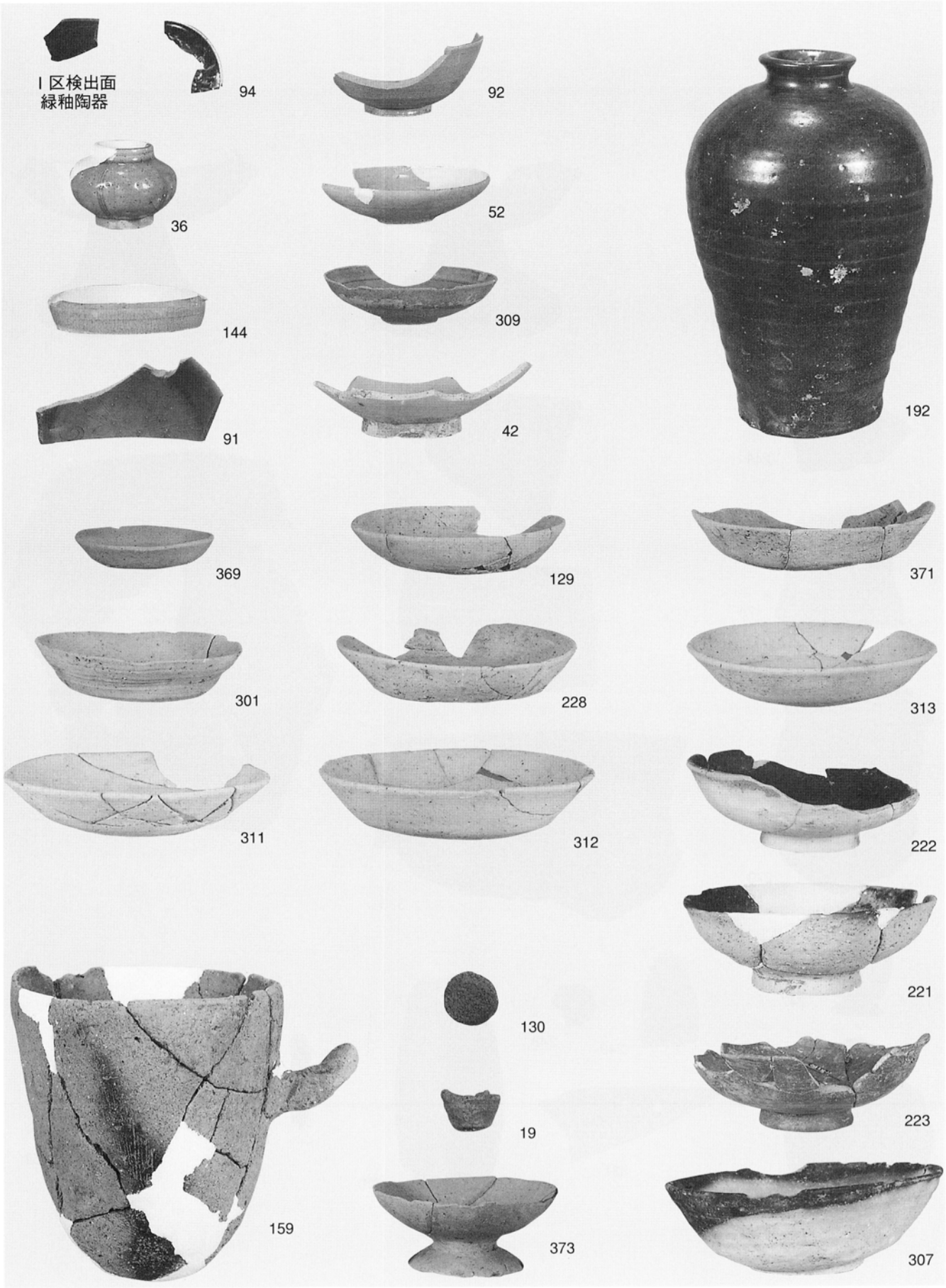
3　Ⅲ区SK42土壙出土状況（北から）



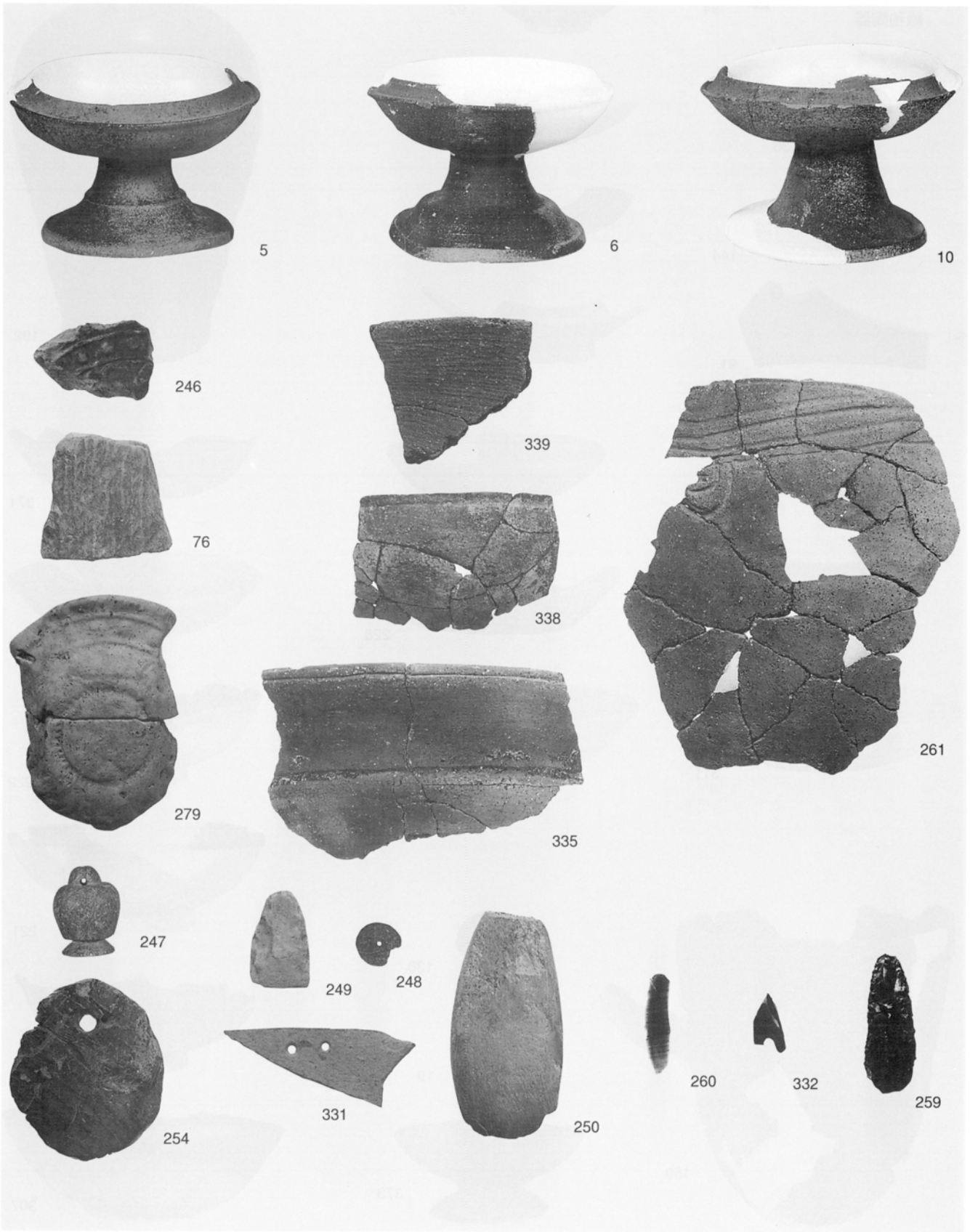
4　Ⅲ区SK47土壙出土状況（南から）



5　Ⅲ区SD30溝内礫群出土状況（東から）


Ⅰ区検出面
緑釉陶器
94
92
36
52
144
309
91
42
192
369
129
371
301
228
313
311
312
222
221
130
223
19
159
373
307

PL.10


5
6
10
246
339
76
338
261
279
335
247
249
248
254
331
250
260
332
259

福岡外環状道路関係
埋蔵文化財調査報告
— 17 —
—福岡市南区所在曰佐遺跡群第3次調査—

平成15年3月14日

発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号
印刷　有限会社 筑紫印刷
福岡市東区社領3丁目8番7号